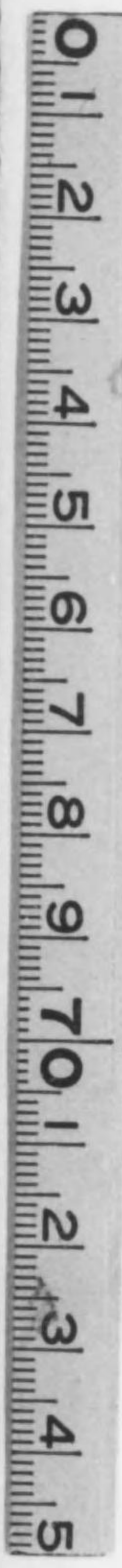


319-921  
1200501374572



始





412





OLD TESTAMENT HISTORY

BY  
ALFRED EDERSHEIM, M. A. (OXON.) D. D. PH. D.  
VOL. I. AND II.



# 舊約釋義

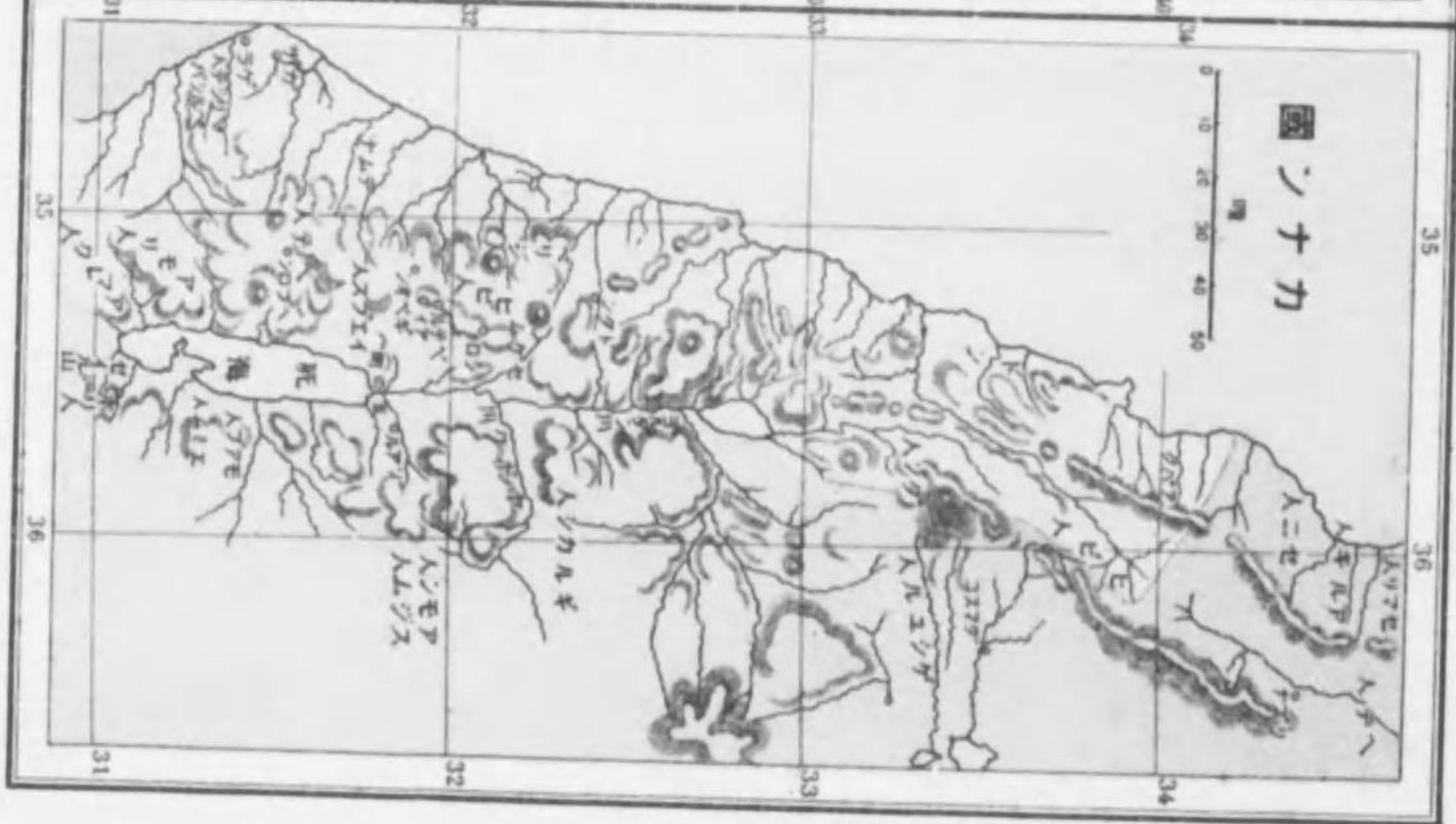
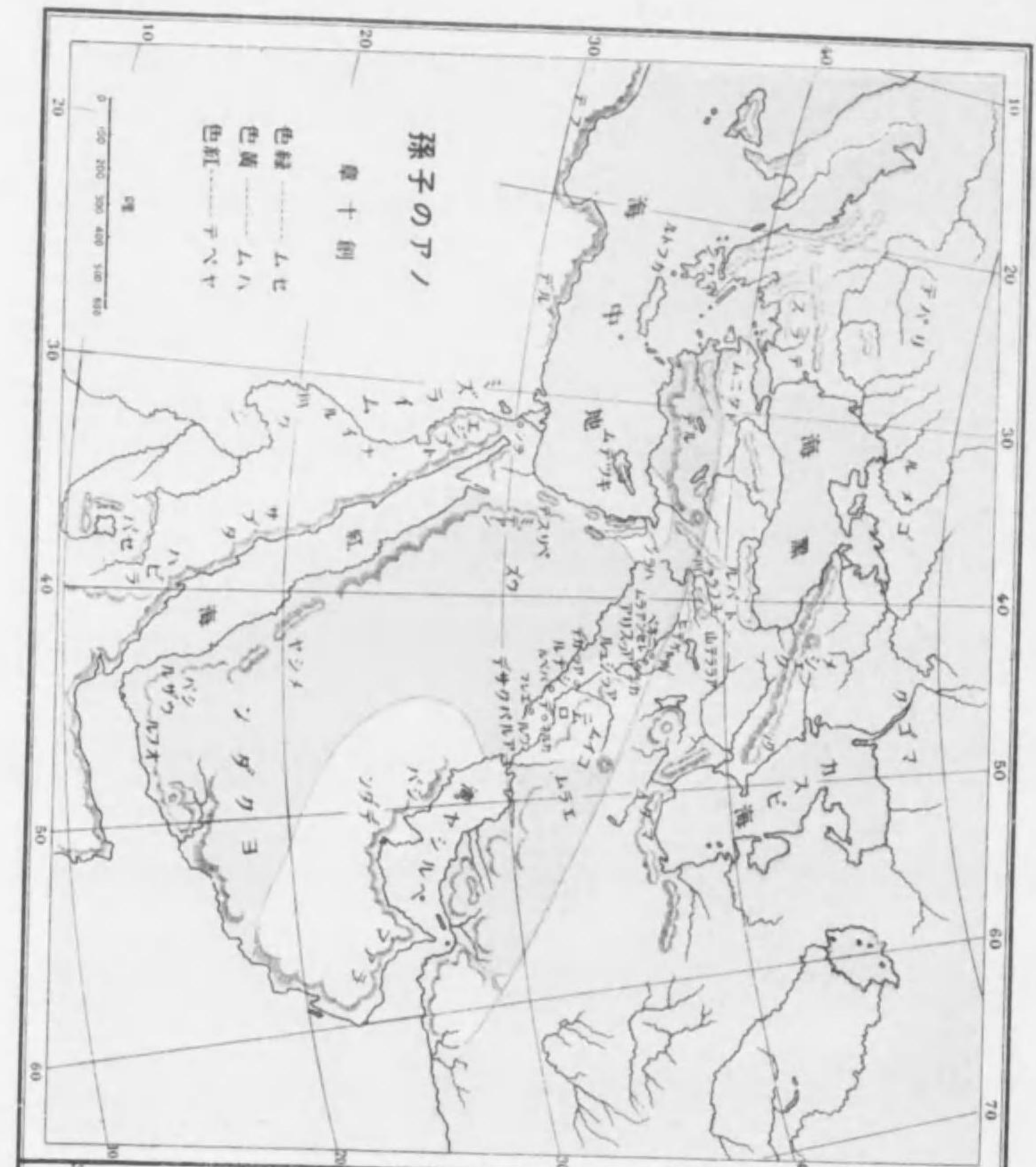
卷上

神學博士 エー・イデルシヤイム著  
ジエームス・ハインド譯

東京 基督教書類會社









Vol. I  
The World before the Flood  
and the  
History of the Patriarchs.

~~~~~

卷一  
洪水前の世界  
及び  
父祖等の歴史



緒言

現今聖書研究の愈々盛なるは最も顯著にして且最も希望あることなり。聖書を信じ、又尊重し、又其の能力と真理を實驗せし者は之を喜ばざるを得ず。蓋は「神の活ける限りなく保つ言」は其の「一點一畫も廢ることなく」、「キリスト・イエスを信する信仰によりて救に至らしむる智慧を與へ得る」ものなるを知るによる。聖書を研究するに従ひて「神の据え給へる堅き基の立てる」ことを深く信するに至るなり。

余が本書を著さんとする目的は、凡ての聖書研究者を助けんが爲にして決して其の研究を不必要たらしめんが爲にあらず。殊に學校又は家庭に於て教へ、或は學ぶ者を助けんと目的なるも、又その他家庭に於て幾許か聖書歴史の理會し易き註解としても用ゆべきものたらしめんことを欲せり。又聖書の教訓の如何を示すのみならず、聖書の本文に關する誤解と虚説より生ずる惡意の攻撃を拒がんがため青年に與へたき希望もあるなり。

右の目的により日曜學校教師、新進の學者、又聖書研究會員等の爲に理會し易く之を著し、第一部と第二部に於て漸次に歩を進め、粗より精に入らんとす。又家庭に於ても個人に於ても其の説明を聖書の本文に對照するため聖書の物語を其の各章に記せる順序に従ひて記し、又其の説明せし個處



を現すことにしたり。終に又反對者の異説は述べざるも、之に對する穩健なる説明をなすことを努めたり。しかも議論によらず詳細に且正しく聖書のヘブル原文を研究して之を爲すことを勉めたり。それが爲には最も有名なる英獨の批評家の研究の結果のみならず、聖書地理學及び考古學并にエジプト、アツスリヤの古碑等の研究をも利用したり。されども他に尙一層高尚なる意味にて聖書を理會する智慧なくば凡て無益なることを益々深く感ず。それは唯聖書の物語の意味を覺るに止らず、靈魂上之を自己に應用して其の永生に關する教を悟り、又之を實行するの外、利益を受け得る聖書研究の方法なく、其の他は凡て唯その準備たるに過ぎざるなり。若し『教誨と譴責と矯正と義を薰陶せんために』聖書を研究せんとせば、『聖書はみな其の感動による』とこの者に教へられざる可らず。『人のことは己が中にある靈の外に誰か知る人あらん、斯のごとく神のことは神の御靈の外に知る者なし』。然るに其の結局はキリストなり。即ち彼は『凡て信する者の義とせられん爲に律法の終となり給へる』のみならず、凡て『神の約束は彼によりて然りとなり、彼によりてアーメンとなるなり』。

イデルシヤイム識

目次

|        |                      |    |
|--------|----------------------|----|
| 第一章    | 洪水前の世界或は洪水前の人々の歴史    | 一七 |
| 第二章    | 天地創造—エデンの園に於る人—その墮落  | 二一 |
| 第三章    | カインとアベル—二つの途と二つの民族   | 二四 |
| 第四章    | セツと其の子孫—カインの族        | 三〇 |
| 第五章    | セツより出でし信仰深き民族の系圖     | 三三 |
| 第六章    | 人間一般の墮落—洪水の準備        | 三八 |
|        | 大洪水                  | 四五 |
| 父祖等の歴史 |                      |    |
| 第七章    | 洪水の後—ノアの祭—ノアの罪—ノアの子孫 | 五二 |
| 第八章    | 諸民族の系圖—バベル—言語の淆亂     | 五九 |
| 第九章    | 諸民族と其の宗教—ヨブ          | 六六 |



第十章 聖書初期の歴史の年代記—神がアブラハムと其の子孫とを取扱ひ給ひし歴史の發端……………七〇

第十一章 アブラムの召さるゝこと—カナンに着し、後暫くエジプトに移ること……………七五

第十二章 アブラムとロトと相離るゝこと—アブラム、ヘブロンに在ること—ソドムの掠奪せらるゝこと—ロトの救はるゝこと—メルキゼデクに遇ふこと……………八五

第十三章 アブラハムの『子孫』につきての二重の約束—イシマエルのこと—エホバがアブラハムを訪ね給ふこと—ソドムの滅亡すること—アブラハム、ゲラルに宿ること—アビメレクと約束を結ぶこと……………九二

第十四章 イサクの生るゝこと—イシマエルの逐出さるゝこと—神イサクを献ぐることを命じてアブラハムの信仰を試み給ふこと—サラの死すること—アブラハムの死すること……………一〇二

第十五章 イサクの結婚—エサウとヤコブの生るゝこと—エサウ家督の權を賣ること—イサク、ゲラルに在ること—エサウの結婚……………一一二

第十六章 ヤコブ、イサクを欺きて祝せらるゝこと—エサウの愁煩—彼等の過失の悪しき結果が家族中の各自に及ぶこと—ヤコブ、ラバンに遣さるゝこと—イサク、アブラハムの祝福を新にし又悉く之をヤコブに與ふること……………一二二

第十七章 ヤコブ、ペテルにて幻を見ること—ラバンの家に着くこと—ヤコブ二妻を娶り、ラバンに事ふること—ハラシより逃るゝこと—ラバン、ヤコブを追ひ又これと和ぐこと……………一二九

第十八章 ヤコブ、マハナイムに在ること—夜角力する事—ヤコブとエサウの和睦—ヤコブ、シケムに居住すること—ヤコブ其の願を果さんとてペテルに往くこと—ラケルの死すること—ヤコブ、ヘブロンに居住すること……………一四一

第十九章 ヨセフの幼時—兄弟等に賣られて奴隸となること—ポテパルの家に在ること—入獄のこと……………一五二

第二十章 ヨセフ入獄のこと—パロの二人の官吏夢を見ること—パロの夢—ヨセフ立身すること—ヨセフ、エジプトを支配すること……………一六三



第二十一章 ヤコブの子等穀物を購ふ爲にエジプトに到ること—ヨセフ其の兄弟等を見分けること—シメオンを獄に投れること—ヤコブの子等ベニヤミンを伴ひ再びエジプトに往くこと—ヨセフ其の兄弟等を試みること—ヨセフ己を兄弟等にあかすこと—ヤコブ家族と共にエジプトに下る準備をなすこと……………一七四

第二十二章 ヤコブ家族と共にエジプトに向つて出發すること—ヤコブ、パロに會ふこと—ヤコブ臨終にカナンに葬られんことを命ずること—エフライムとマナセをイスラエルの子等の中に數ふること……………一八七

第二十三章 ヤコブ臨終に子等を祝すること—ヤコブの死すること—ヨセフの死すること……………一九六

アッシヤア、ヘイルス、カイル三氏の説に従へる創世記に記せる事件の年代

| 事 件          | アッシヤア氏の説 |      | ヘイルス氏の説 |      |
|--------------|----------|------|---------|------|
|              | 紀元前      | 創造後  | 紀元前     | 創造後  |
| 天地創造         | 四〇〇四     | —    | 五四一     | —    |
| セアの生るゝこと     | 三八七四     | 一三〇  | 五一八一    | 二二〇  |
| エタの生るゝこと     | 三七六九     | 二三五  | 四九七六    | 四三五  |
| カイサンの生るゝこと   | 三六七九     | 三二五  | 四七八六    | 六二五  |
| アラムの死すること    | 三六〇九     | 三九五  | 四六一六    | 七九五  |
| アラムの生るゝこと    | 三〇七四     | 九三〇  | 四四八一    | 九三〇  |
| アラムの死すること    | 三五四四     | 四六〇  | 四四五一    | 九六〇  |
| アラムの生るゝこと    | 三三八二     | 六二二  | 四二八九    | 一一二二 |
| エタの生るゝこと     | 三三一七     | 六八七  | 四一二四    | 一二八七 |
| エタの死すること     | 三一一〇     | 八七四  | 三九三七    | 一四七四 |
| エノクの移さるゝこと   | 三〇一七     | 九八七  | 三九一四    | 一四八七 |
| ノアの生るゝこと     | 二九四八     | 一〇五六 | 三七五五    | 一六五六 |
| 洪水           | 二三四八・九   | 一六五六 | 三一五五    | 二二五六 |
| アルパタサデの生るゝこと | 二三四六     | 一六五八 | 三一五三    | 二二五八 |
| サラの生るゝこと     | 二三一一     | 一六九三 | 三〇一八    | 二三九三 |
| ヘベルの生るゝこと    | 二二八一     | 一七二三 | 二八八八    | 二五二三 |

カイル氏の説  
カナンに移り  
し以後



|                  |      |      |      |      |  |
|------------------|------|------|------|------|--|
| ノアの死すること         | 一九九八 | 二〇〇六 | 二八〇五 | 二六〇六 |  |
| ベレグの生るゝこと        | 二二四七 | 一七五七 | 二七五四 | 二六五七 |  |
| 言語の淆亂            | 二二三三 | 一七七一 | 二五五四 | 二八五七 |  |
| リウの生るゝこと         | 二二一七 | 一七八七 | 二六二四 | 二七八七 |  |
| セルグの生るゝこと        | 二一八五 | 一八一九 | 二四九二 | 二九一九 |  |
| ナホルの生るゝこと        | 二一五五 | 一八四九 | 二三六二 | 三〇四九 |  |
| テラの生るゝこと         | 二二二六 | 一八七八 | 二二八三 | 三一二八 |  |
| ノアの死すること         | 一九九八 | 二〇〇六 |      |      |  |
| アブラムの生るゝこと       | 一九九六 | 二〇〇八 | 二一五三 | 三二五八 |  |
| アブラム、カナンに着すること   | 一九九二 | 二〇八三 | 二〇七八 | 三三三三 |  |
| イシマエルの生るゝこと      | 一九一〇 | 二〇九四 | 二〇六七 | 三三四四 |  |
| 婚禮の制定            |      |      |      |      |  |
| イサクの生るゝこと        | 一八九六 | 二二〇八 | 二〇五三 | 三三五八 |  |
| サラの死すること         |      |      |      |      |  |
| イサクの結婚           | 一八五六 | 二二四八 | 二〇一三 | 三三九八 |  |
| エサウとヤコブの生るゝこと    | 一八三六 | 二二六八 | 一九九三 | 三四一八 |  |
| アブラハムの死すること      |      |      |      |      |  |
| エサウの結婚           |      |      |      |      |  |
| イシマエルの死すること      |      |      |      |      |  |
| ヤコブ、パダンアラムに逃るゝこと | 一七六〇 | 二二四四 | 一九一六 | 三四九五 |  |

|                  |      |      |      |      |     |
|------------------|------|------|------|------|-----|
| ヤコブの結婚           |      |      |      |      | 一六九 |
| ヨセフの生るゝこと        | 一七四五 | 二二五九 | 一九〇二 | 三五〇九 | 一七六 |
| ヤコブ、カナンに歸ること     | 一七三九 | 二二六五 | 一八九六 | 三五一五 | 一八二 |
| ヤコブ、ヘブロンに着すること   | 一七三二 | 二二七二 | 一八八九 | 三五二二 | 一九二 |
| ヨセフ、エジプトに賣らるゝこと  | 一七二八 | 二二七六 | 一八八五 | 三五二六 | 一九三 |
| イサクの死すること        | 一七一六 | 二二八八 | 一八七三 | 三五三八 | 二〇五 |
| ヨセフ、エジプトの大臣となること | 一七一五 | 二二八九 | 一八七二 | 三五三九 | 二〇六 |
| ヤコブ、エジプトに下ること    | 一七〇六 | 二二九八 | 一八六三 | 三五四八 | 二一五 |
| ヤコブの死すること        | 一六八九 | 二三一五 | 一八四六 | 三五六五 | 二二二 |
| ヨセフの死すること        | 一六三五 | 二三六九 | 一七九二 | 三六一九 | 二八六 |

讀者は第十章に於てアッシャア、ヘイルス兩氏の年代計算法に關する説明を見るべし。ヘ氏の法式の主意はギリシヤ語の譯文(七十人譯)に従ひ、又數次ユダヤ人の歴史家ヨセファスの年代に因りて改めたるが、ヨセファスの年代は往々明白に誤謬あり。ア氏はヘブル語の文に従ひたり。近來のユダヤ人の年代に因れば、イサクの生れしは天地創造後二千四十八年にして、アブラハムの生れしより百年目に當る。近來の有名なる聖書註解者なる獨逸人カイル博士は、殆んどこれに賛成して僅か二年前、即ち二千四十六年のことなりとせり。右の表の下端にカ氏の說に従ひてアブラムがカナンに入りし後の事件の順序を記せり。カ氏の說によれば右の事件は天地創造後二千二十一年、キリス



ト紀元前二千百三十七年の事なりとす。これに因りて讀者はカ氏の表に従ひて他の事件を計ることを得べし。思ふにカ氏の年代は最も穩當ならん。即ちカ氏の年代の理由は左の如し。王 上六・一に因ればソロモンが殿を建てしはエジプトより出でし後四百八十年にして、イスラエル人がパピロンに移されしは殿を建てしより四百六年、即ちエジプトを出でしより八百八十六年後とす。然るに其の移さるゝことの初は紀元前六百六年ならざるべからざれば、エジプトを出でしは紀元前千四百九十二年（天地創造後二千六百六十六年）なり。又パピロンに移されし初を紀元前六百六年と定むる所以は、彼等が故國に歸りしは七十年後、即ちクロス王の即位の年なるが故なり。而して其の年は紀元前五百三十六年なりしは疑ひなし。

序 文

『アブラハム、イサク、ヤコブの神』は『我等の主なる救主イエス・キリストの父なる神』と同一なる事と、『信仰に由る者は是アブラハムの子』なる事とは啓示の眞理中最も價値あるものなり。之に因りて神の信なること、我等の特權の貴重なる事、及び救の計畫に關する不可思議なる智慧の始終一貫せる事とを認むるを得べし。蓋し聖書は其の各卷を個々別々に研究すべきものなるのみならず、相關一致せる全書として研究すべきものなり。

舊新兩約聖書は之を引き離して關聯せざる者となす事を得ず。又舊約の或部分も其の全體より引き離す事能はざるなり。何となれば各卷の意義と榮光とは只其の一致に因りて全く顯るればなり。此の諸卷は世の初より一切の歴史及び諸の前表によりて預表せられ、又諸の約束を成就し給ふ主イエス・キリストの降世に一致接續せる一の聯鎖なり。約二千餘年前に於て神がアブラハムに宣ひし所は、此の時に至りて福なる事實となりたり。記して『聖書は神が異邦人を信仰に由りて義とし給ふことを知りて、預じめ福音をアブラハムに傳へて言ふ、なんちに由りてもろくの國人は祝福せられんと。この故に信仰によるものは、信仰ありしアブラハムと共に祝福せらる』とあり。史上の變遷、時代の異動、文明の階段を問はず、此の大的目的は忘れられず、又之を改善するの必要なく、



唯漸次發達し、遂に成功に至るは最も吾人の信仰を堅くする所にして、又之に因りて神の恩恵の目的の不變なるを認めなば大に慰めらるゝ事を得べし。されば吾人は吾人の『先祖』が歩み、又神が契約に導き給ひし途を踏み、以て人の迫害又は自ら信者と唱ふる者の不義等によりて、神の恩恵の聖旨を空しくする事能はざるを知りて喜ぶ。即ち神の吾人を愛し給ふ事は初より今に至り、今より世の終に至るまで變る所なし。是れ聖書の一致して確認する所なり。

尙他に緊要なる左の大真理を認むる事を得べし。即ち聖書の諸卷は相互一致するのみならず、最も密接なる結合ありて各卷相照し、其の教訓を繼續し又明瞭にす。此の故に聖書の一致は規模の廣大精巧なること大建築物の如しと言ふよりも、寧ろ聖書に記せる形容に従ひて言へば『いよ／＼光輝を増して晝の正午に至る日』の如きものなり。聖書中人が漸次深き啓示を受け得るに従ひて、其の教訓の進歩するは明瞭なり。夫れ舊約に於ける律法、預表、歴史、預言及び契約は皆同一真理を漸次發達せしめ、遂に新約の完全に至らしむ。是れ同一真理を證するものたりと雖も、其の中一も減じ得べき卷なきのみならず、他の卷に照さずして理會し得べきものなし。故に聖書の最終を研究せば、創世記に記載せる萬有創造の事と初めて人々が神の子として召されし事とは、第二の創造の光榮と神の教會の完成とを告ぐる默示録の中に、その成就せられしことを見る。古代の師父聖オーガスラン曰く『新約は舊約に包まれ、又舊約は新約に因りて顯さるるなり』と。

多くの篇より成り、又之を記せる事情も、其の著者も、時代も亦大に異なる此の書中に、『悟りがたき所あり、無學のもの、心の定まらぬ者の之を強ひ釋く』ことあるも、神の聖旨は唯人々が之を受け得るに従ひて、漸次に明かなる光を照し給ふに在るを特に認めなば怪むに足らず。加之限ある吾人の能力と知識を以て、神の深遠なる道を全く理會し盡すことを得ざるも、慎重綿密に研究するに隨ひて遂に仇の攻撃を拒ぐために信仰を堅固ならしむる證據を得るに至る。されども吾人の之を研究する終極の目的は知識を増さんがためならず、恩恵を受けんがためなり。蓋し聖書は適當に之を理會せば徹頭徹尾キリストの事にて満ち、又彼が吾人の唯一の救主たる事を示す。キリストに導く教師なる律法や、キリストの影響なる預表や、又キリストを預示する預言のみならず、舊約の全部悉くキリストの事にて満ちり。即ちキリストを代表する人々なき場合にもキリストを代表する事件あり。イサク、ヨセフを以てキリストを代表するものと認め難きも、イサクを献ぐる事、ヨセフを賣る事、及びヨセフが其の兄弟等の爲に養の準備をなす事を以て、キリスト傳中の事件を代表する者と認めざるを得ず。斯の如く彼は全歴史の初と中部と終なり。即ち『昨日も今日も永遠までも變り給ふことなき』ものなれば、凡ての事件はキリストを示すものなり。故に聖書を研究するはキリストを我等のため『途なり眞なり生命なり』と聖書に示す如く認むるために益あり。左れば斯く認めんため始終聖靈の助力と教訓とを求めざるべからず。



茲に父祖の歴史を研究するに當りて幫助として必要な注意を一言するは無益ならず。舊約聖書は『律法と預言書』とに大別することを得。夫れ十は完全の意を表す比喩數なるが故に、律法はモーセの五巻を以て成るも、『預言書』と約束とを別にすれば完全の半數なりとの意ならん。又律法に五巻ある如く、詩篇も左の五部に分れ、各部祝福を以て終る。第一部は一篇一四一篇、第二部は四二篇一七二篇、第三部は七三篇一八九篇、第四部は九〇篇一〇六篇、第五部は一〇七篇一五〇篇、而して一五〇篇は終極の大祝福なり。

太一・一三、二二・四〇、徒一三・一五等。大體ユダヤ人は聖書を左の如くに分ちたり。第一、律法（モーセの五巻）、第二、預言書（前部は約書亞記、士師記、撒母耳前後書、列王紀略上下、及び後部は以賽亞書、耶利米亞記、以西結書其他十二の小預言書）、第三、記録或は聖書（其中詩篇、箴言、約百記、及び諸會堂にて執行する祝祭の時に讀む五巻即ち雅歌、路得記、哀歌、傳道之書、以士帖書、又但以理書、以士喇書、尼希米亞記、歷代志略上下）（歷代志略上下はヘブル語にて云へば日誌の如きものを包含す。ルカ傳二四・四四を參照すべし）。

モーセの律法即ち五巻は、元來五書と稱せらる。此の名稱は原文を希臘語に翻譯する時に名けしものにして五冊又は五篇の意なり。

創世記を大別せば二部となり、兩部又各五つに分れ、各左の如き記事と傳記を以て始まる。第一部は諸民の分布及び其の領地の確定するまでの世界の歴史

- 序 文
  - 一、天地の由來
  - 二、アダムの傳
  - 三、ノアの傳
  - 四、ノアの子等の傳
  - 五、セムの傳
- 第二部は父祖等の歴史

- 一、(アブラハムの父)テラの傳
- 二、イシマエルの傳
- 三、イサクの傳
- 四、エサウの傳
- 五、ヤコブの傳

- 一章—二章三節
- 二章四節—四章
- 五章—六章八節
- 六章九節—九章
- 一〇章—一一章九節
- 一一章一〇節—二六節
- 一一章二七節—二五章一一節
- 二五章一二節—一八節
- 二五章一九節—三五章
- 三六章
- 三七章

以上合せて十(完全數)にして、各其の神の國の歴史に對する關係の多少によりて其の記事に精粗の差あり。それは兩部共に次の如き關係あればなり。第一部に於ては人間元來の位置、又神に對する關係、其の墮落及び贖罪の必要と、神の之に應じて備へ給ひし恩寵とを記す。此の恩寵を受け或は拒



むに由りて、セツとカインの子孫の代表する人類が二種の民族に別るゝことを示し、而して神が洪水を以て悪人を罰し、己の民を救ひ給ふは、何れの時代をも預表する所にして、諸民の由来と區別、及びセムを聖別せることは萬民の救を生ずる一民族を預選することを現せるなり。歴史の第一部なる此の興味ある部分は人よりも事件を主になせり。第二部は契約と契約の民、即ちアブラハムの召さるる事を始めとし、イサク、ヤコブ及び其の子孫の傳なれば前者とは異なれり。此の部に於ては事件よりも人を中心にして神の恩寵の約束が漸次に發達し、又父祖等を教育したる神の恩寵深き待遇を記せり。而して其の家族が發達して國民となるに至るを以て創世記と契約の歴史の第一期は終る。創世記中の傳記を記せる主意に就ては、其の正系を記す前に先づ其の傍系の事を簡單に取扱ひ居るを認む。例之ばカインと其の族の傳はセツと其の族の傳の前に、ヤベテとハムの系圖はセムの系圖の前に、イシマエルとエサウの傳はイサクとヤコブの傳の前に記す類なり。それは始より選擇と聖別と恩寵との原理が契約の歴史を貫くが故なり。即ち其の原理はアブラハムの召さるゝことに現れて父祖等の傳を貫き、又其の聖き家族は發達して民となり、其の契約は先づダビデの家に集中せられ、又終に預言者、祭司、王にしてダビデの裔なる主イエス・キリストに集中せらる。是は彼に在りて一般の信徒のため天國の門戸を開かれ、又彼より救の恩寵を一般の人々に及ぼされんがためなり。

# 舊約釋義

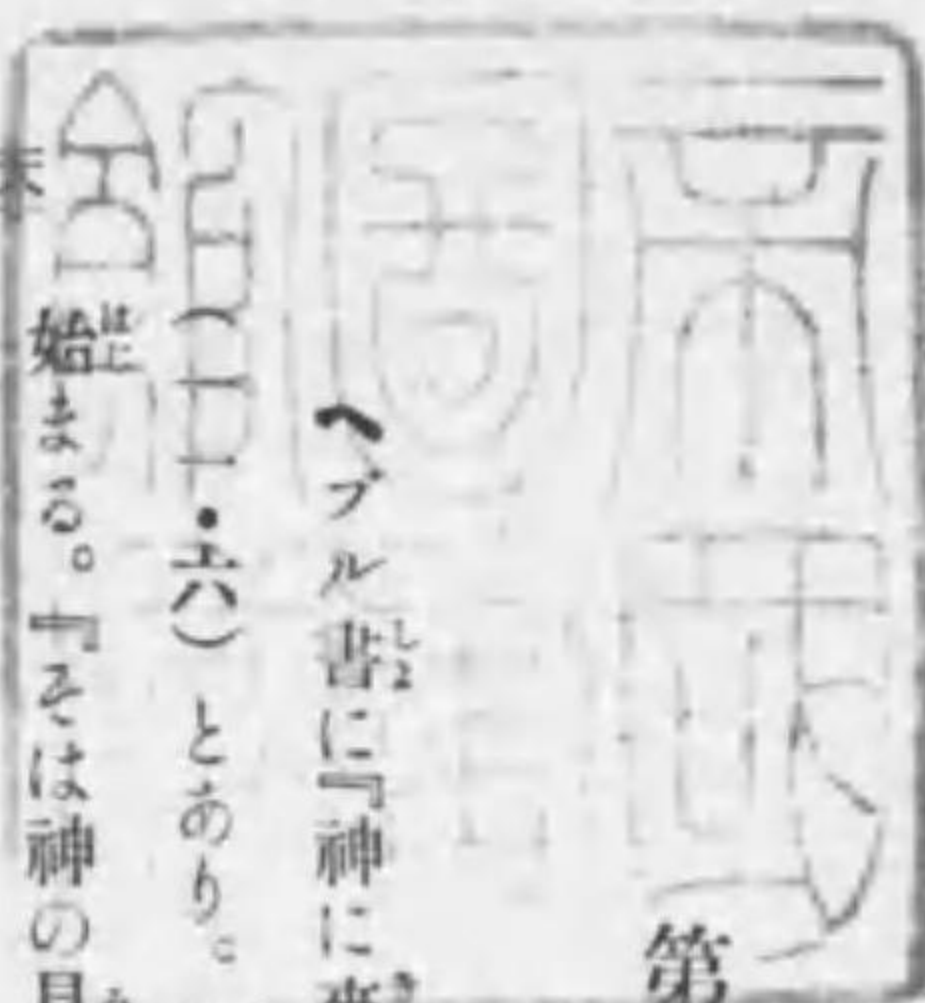
## 洪水前の世界或は洪水前の人々の歴史

### 第一章 天地創造—エデンの園に於る人—その墮落

(創一章—三章)

ヘブル書に「神に來る者は、神の在すことと神の己を求むる者に報い給ふことを必ず信すべし」(一・六)とあり。故に聖書は神が人に對する待遇及び聖旨を示す記録なれば、天地創造の記事に始まる。「それは神の見るべからざる永遠の能力と神性とは造られたる物により世の創より悟り得て明かに見るべければなり」。

凡そ啓示の四大原理はエデンの園より流るゝ四の川の如く聖書の最初の物語にあり。此の原理は(一)萬物が神の能力ある言にて創造せられたる事、(二)萬民が始祖なるアダムとエバより出でたる事、(三)吾人が人類の首なるアダムに關係を有して其の罪及び墮落に與りし事、(四)アダムより出





でたるものがアダムアダムの罪罪に染染むことなく、墮落墮落の結果より吾人吾人を救救ひ、第二第二のアダムアダムとして凡て彼彼に順順ふ者の永遠永遠の救救の源源となる事等事等、以上四項以上四項の外外に神神に對對し毎七日毎七日に一日一日を聖安息日聖安息日として定め定める事事を加加へて第五第五とするも亦亦可可なるべし。

萬物萬物の起原起原に就就き聖書聖書に記記す所所と、神神を知らざる人の想像想像する所所とは大なる相違相違あり。後者後者の考考ふ處處は極めて信信じ難難く、一見捏造捏造せる昔話昔話なりと思思はざるを得得ざる所夥多所夥多あり。之之に反反して前者前者は單純單純なれども威嚴威嚴に滿滿るが故故に、殆んど我等我等をして『拜拜みひれふし、我我らを造造れる主主エホバエホバの聖前聖前に曲跪曲跪』かざるを得得ざらしむ。而而して之之を記記せる目的目的は學術的指導學術的指導の爲爲にあらず、又決決して好奇心好奇心を充充さしむる爲爲にあらず、神神を敬敬はんが爲爲なれば、其其の記記す所所は創造創造の詳細詳細にあらず、唯當時行唯當時行はれたる事事の大體大體に止止る。故故に其其の詳細詳細を究究めんとせば、宜宜しく萬物萬物を研究研究する科學科學に因因りて知るべきなり。未未だ全く其其の研究研究の盡盡されざるに漫漫りに、不正確不正確なる説説を唱唱ふることは慎慎まざるべからず。聖書聖書に由由れば劣劣れる所所より漸次漸次に優優れる物物に進進み、遂遂に被造物被造物の首首たる人間人間、即即ち神神が萬物萬物を治治むる者と定定め給給ひし者者(詩八・三・一八)は創創られたるなり。或人或人々は言言ふ、天地創造天地創造の六日六日は普通普通の日子日子にあらず、所謂六時期所謂六時期を指指すものなりと。此此の説説の根據根據は地球地球の甚甚た古古き事事、又地球又地球が吾人吾人の棲息棲息に適適すべき有有様様に至至るまでに經過經過せしと思思はるゝ往古往古の數時期數時期(各時期各時期の終終には大變動大變動大沿革大沿革ありたり)ありしによりてならん。然れども思思ふに如斯如斯説説をなすの必要必要なし。創世記創世記一章一節一章一節に左左の事情事情を簡短簡短に記記す

のみなり。曰曰く『元始元始(その何時何時なりしかは不明不明)に神神天地天地を創造創造り給給へり』と。又二節二節に最終最終の大變大變化化(或は變事或は變事)後の有様有様を記記して言言ふ、『地地は定形定形なく、曠空曠空くして黑暗淵黑暗淵の面面にあり』と。一節一節に記記す天地天地の創造創造せられたる時時と、二節二節に記記す地球地球の曠空曠空き有様有様との間に、殆んど無限無限の時間時間、又幾多幾多の變化變化ありしや知り難難し。兎兎に角元始創造角元始創造の時期時期に就就ては未未だ精密精密に之之を知知ること能能はざるなり。

されども左左に記記す所所を知るは吾人吾人に取取つて最も肝要肝要なり。即即ち『神神はイエス・キリストキリストに由由つて萬物萬物を造造り給給へり』(弗三・九)、『萬物萬物は彼彼によりて造造られ、彼彼のために造造られたり』(西一・一六)、『凡凡ての物物は神神より出出で神神によりて成成り、神神に歸歸す』(羅一一・三六。參照哥前八・六、來一・二、約一・二三)と。之之に因因りて萬物萬物は一致一致するのみならず、我等我等の主主イエス・キリストキリストと密接密接に關係關係あるものなることを示示す。又之又之に關關して左左の事事をも常に記憶記憶せざるべからず。曰曰く『信仰信仰に由由りて我等我等は、諸諸の世界世界の神神の言言にて造造られ、見ゆる物物の顯顯るゝ物物より成成らざるを悟悟る』(來一一・三)と。

一切一切の萬物萬物は神神に造造られしとき甚甚だ『善善かりき』、即即ち神神の各自各自につき定め給給ひし目的目的に適適ふものなりき。『第七日第七日に神神其其の造造りたる工工を竣竣へ給給へり、即即ち其其の造造りたる工工を竣竣へて七日七日に安息安息み給給へり。神神七日七日を祝祝して之之を神聖神聖め給給へり、そは神神其其の創造創造爲爲したまへる工工を盡盡く竣竣へて、此此の日に安息安息み給給ひたればなり』と。

創一章に『夕夕あり朝朝ありき、これ首首の日日なり』、或は二日三日等二日三日等と記記すを見る。ユダヤ人ユダヤ人の日日を數數ふるは、今日我等今日我等のなす如如く中夜中夜



より翌日の中夜を以て一日とせず、星出づる夕より又星出づる翌夕に至るまでを一日とす。

此の安息日を立て給ひしは現今の主日(日曜日)を守る事の起源にして、第七日が第一日に變ぜしは、主イエス・キリストが其の日(第一日)に甦り給ひしによる。其の日には第一の創造のみならず、第二の創造も成就せられたり(賽六五・一七)。

神は其の凡ての工の中に人間のみを其の自己の像の如く創造し給へり。此は神が人間に具へしめし智慧と其の與へし不滅の靈のみならず、墮落前の人間が有したる道德上又靈魂上完全なる性質をも示すものにして、神は人を造りて「エデンの園に置き、之を理め之を守らしめ給へり」。而して又彼に適ふ助者、即ちアダムが己が骨の骨、己が肉の肉と認めしエバを與へ給へり。かく神は安息日を立て給ひしが、人と其の造物主との正當の關係は禮拜なる事を教へしのみならず、樂園にて結婚と家族とを定むることによつて人間社會の基礎を置き給へり(可一〇・六、九參照)。

エデンの園の所在に就ては數多の說あれども、茲には之を論ずるの必要なしと思ふ。之に關する最も信すべき二說によれば、アルメニヤの北方の山に近くか、或はベルシャツの近傍なりしならん。樂園より流るゝ四の川の中、二はテグリス及びユーフラテ川なる事は分明せるも、後洪水の爲め地形の變化によりて、創世記に記す所は現今の有様に適せざるは怪むに足らず。

その時、人が神に服従するや否やを試み、其の已に受けし所よりも尙高き特權を受けしむる順序になりたり。されどもサタンと其の使等が神に謀反せしために、罪惡は已に世界にありき。聖書に於て

人の試鍊を記すは眞に簡短にして又單純なり。之に由れば神は「善惡を知るの樹」を「園の中」に生ぜしめ、之を食はゞ死すべしとアダムに教へ給へりと。又別に「生命の樹」ありたり。若し始祖が連續して神に服従し居りしならば、是は吾人が嗣ぐべき高尚なる生命の記號と約束となりしならん。然れども其の試鍊の結果の速に來りしは殘念なり。即ち試者蛇の形を以てエバに近づき、神の警告を拒絶し、其の禁じ給ひし果實を食ふ結果につき彼女を欺きたり。エバはそれがためと己が慾とに打ち敗け、自ら先づ之を食ひて後、之をアダムに食はしめたり。それがために其の罪の結果は忽ち來りたり、即ち彼等は「神の如くならん」と思ひて、全く神の命令に服従せず、自己の意の儘を行ひたりしなり。試者の云ひし如く、「彼等の目開けて『善惡を知る』に至れり。彼等は善惡を知るや、直覺的に犯罪を認知し、忽ち神の前より避けて身を隠さんと欲するに至れり。此の如く彼等が神に背き、良心に其の罪を咎められ、之を悲しみ且つ耻ぢたるは、彼等の不義に對して慥に神の刑罰の行はれしことを證するものなり。『汝之を食ふ日には必ず死すべければなり』との死の宣告は、始祖の肉體と靈魂、即ち其の滅する所と滅せざる所とに及びたり。故に人は罪を犯したる日に其の身體も靈魂も死せしなり。又アダムは一切の人類の首にして之を代表し居りたるため、若し幸にして彼が引續きて神の命に服従せしならば、吾人は皆高尚にして又最も幸福なる境遇に入りし筈なり。故に其の反逆の結果は諸の人に及びたり。記して曰く『それ一人の人によりて罪は世に入り、また



罪によりて死は世に入り、凡ての人、罪を犯し、故に死は凡ての人に及べり」と。加<sup>し</sup>之神がアダムに治めしめ給ひたる萬物も、其の罪によりて「空虚に服し」又咀を受けたり。曰く「土は汝の爲に咀はる、汝は一生のあひだ苦勞みて其より食を得ん。土は荆棘と薊とを汝の爲に生ずべし」と。然るに神は其の大なる恩によりて人をその罪の儘に棄て給はざりき。已に樂園に住むに適はざれば其處より放逐せしと雖も、尙其の前に之を試みしサタンを咀ひ、又婦の苗裔が蛇の頭を碎き、即ち「婦の生みたる」我等の尊き救主が其の柔順と、死と復活によりて、我等を罪と死の權より贖ふべしとの貴き約束を與へ給へり。又人がその後の罰たる手の勤勞も當時の事情に於ては有益なりき。是故に始祖がエデンの園を出でしは望なきにあらず、又外の幽暗に出されしにもあらざりき。贖主の約束、終局に其の大なる仇に勝ち得べき保證、神を拜すべき安息日、及び家族の基なる婚姻の制度を彼等はそこより携へ出でたり。如此して基督者の生涯の基は樂園の中にて設けられたり。

右に關して實際上興味のある點二三あり。諸の人が始祖より出でたる事に因りて吾人のアダムに對する靈魂上の關係定まりたり。即ちアダムにありて皆罪を犯し又墮落せり。然るに之に因りて第二のアダムたる主イエスに對する靈魂上の關係も亦定まれり。蓋は「我ら土に屬する者の形を有てる如く、天に屬する者の形をも有つべし」、又「凡ての人、アダムに由りて死ぬる如く、凡ての人、キリストに由りて生くべし」。又「一人の不從順によりて多くの人の罪人とせられし如く、一人の

從順によりて多くの人、義人とせらるゝなり」。從來凡ての人が一人より出でしことを疑ふ人なきにあらざれども、聖書に由れば神が「一人よりして諸種の國人を造りだし、之を地の全面に住ましめ給ひし」ことは明に示され居れり。これは最も有名なる科學者等の認むる處にして、之に對する反對は今や殆んど一般に顧みられず、元來人種は一人の人より出でたりとの單一説は現今概ね承認せらるゝに至れり。

眞の神を知らざる宗教は神の示し給ひし宗教と異なる點尠からざれども、又之と舊約の宗教と左の類似する點もあり。人の靈魂に於て其の墮落する以前の跡の見ゆる如く、古代の諸宗教の傳説と物語の中にも、昔人が神より聽きし所の跡を認むべし。一の民族に限らず、殆んど何れの國民も元來幸福にして且潔く、天地の交際の破られざる境遇にありしも（これを黄金時代とも稱す）、其の後の人の罪のために墮落せしことを微に示す所の傳説を有す。又何れの民にもこの幸福なる境遇を恢復せんことを多少希望せざるものなし。即ち諸の人は皆未來の救を求め、心中臚氣ながらも贖主を求め居ればなり。

左に右「婦の苗裔が蛇の頭を碎かん」との古代の大契約は、萬民を照す燈明臺にして、先づセムに對する約束に於て、又次にアブラハムに對する約束に於て、亦ヤコブの預言に於て、後律法の預表より預言者の約束に進むに従ひて、其の光益々輝き、遂に時滿つるに及んで、「義の日……其の



翼には醫す能を具へ』給ふて昇れり。

## 第二章 カインとアベル——二つの途と二つの民族

(創四章)

聖書に歴史上の第二の大事事件を記することも亦甚だ簡單なり。

アダムとエバの子はカインとアベルの外にもあれども、聖書の歴史は専らこの二人のみに關するを以て唯この二人のことを記すに過ぎず。これ聖書の目的は萬國の歴史の詳細を記すにあらず、又其の中に載する人々の全傳を記すにもあらず、單に神の國の歴史を示す爲に必要なる人と事情のみを記すに止まる。この二人の内カインは兄にして又長子なりき。夫れ古代また東洋に於る人名には概ね深意あり。エバが其の長子にカイン(『得たり』との意)と命名したるは『我エホバによりて一個の人を得たり』との意なり(エホバとは約束の神を云ふ)。エバは其の子の生るゝや、之を以て蛇の頭を碎くべき苗裔に關する約束が既に成就したるなりと信ぜしは明白なり。かく思ひしは初代の基督者が、主の速に再臨し給ふことを待ちたるに類似せるのみならず、其の希望を深く懷き、其の約束の成就せらるゝことを堅く信じ、又之を切望せしことを現せり。然るにかゝる望ありしとするも直

にこれを失ひしは疑なし。蓋は其の次子をアベル(呼吸又は消失の義)と名けしは此の失望の故か、或は尙明白に示されし所ありしに由るか、又は尙他に吾人の知らざる理由ありてならん。

此の二人につき聖書の記す所は『アベルは羊を牧ふもの、カインは土を耕すものなりき』との言の中に含蓄せり。次に之につきて記す所は其の二人共にエホバに供物を献げたり、即ちカインは『土より出づる果を携來り』、アベルは『其の羊の初生と、其の肥えたる者を携へ來れり』。エホバは『アベルと其の供物を眷顧み給ひしかども(多分目に見ゆる休徴を以て之を示し給ひしならん)、カインと其の供物をば眷顧み給はざりき』。カインは其の己の供物の受納れられざる理由を質し、之を除くことを努めずして、直に怒と恨に任せたり。神は其の恩に因りて彼の罪と危険を示し、又其の避くべき途を教へ給へり。されどカインは既に意を決し、野にて弟に出會ひて先づ怨言を吐きて後これを殺害せり。これ世界に於る人の死の初めにして且この暴行は兄の爲せしものなるを以て殊に甚だしとす。カインはそれがため再び神に責められ、自ら心を剛愎にして殆んど神の權威を拒みたり。されど審判し給ふ神の手はこの改心せざる兇殺者の上にあき。アダムは第一の大なる誠を犯せしが、カインは第一と第二(太二二・三八、三九)とを共に犯したり。アダムは神に對して罪を犯せしも、カインは神と人とに對して罪を犯したり。於是カインは凡ての人に對する警告と證據として、土を耕す職より放逐せられ、『地に吟行ふ流離子』と成れり。之を例へばイスラエルが『アベルの血に勝



りて物言ふ血、即ちイエスを不法の手にて十字架に釘けて殺せし後、諸國に放逐されたるを代表せり。且此の刑罰は『大にして』、カインが負ふこと能はざる『ものなりしも、彼はこれに因りて改心せず、唯其の結果を恐れしのみなりき。而して神は『カインに遇ふ者の彼を撃たざらしめるために、印誌を彼に與へ給へり』。こはユダヤ人をして如何に迫害さるゝも亡び失せざる民となし給ひしと同じことなり。唯ユダヤ人に對して恩寵に富み給ふ神は、慈悲の目的を有てり、即ち彼等が其の主なる神に歸らんがためなりき。記して曰く『イスラエルは悉く救はれん』と。又其の歸ることは即ち死より生に入るることなり。倍カインは『エホバの前を離れて出で……ノドの地に住めり』(ノドは吟行或は不安と云ふ意)。カインに就きて終に記す所は彼の以前の生涯に符合せり、曰く『カイン邑を建て其の邑の名を其の子の名に循ひてエノクと名けたり』と。

右の物語には著しき教訓あり。この兄弟の供物の中一は『土より出づる果』にして、他は動物なりしことなり。又カインの供物に就ては其の詳細を記さざるも、アベルの供物は一切が神の物なるを表さんため、『其の羊の初生』にして又『肥えたる者』、即ち最良の物なりと記せり。神は又カインに警告し、且慈悲を以て罪を避く可き道を示し給へることを認め得べし。其の他カインの犯罪は、主イエスが兄弟に對する怒は即ち殺すことにして、我意と怒と仇恨と妬忌の當然の結果は兇殺なるを教へ給ひしこと(太五・二二)を明白にせり。又罪は早晩明白になり、如何なる刑罰も人を改心せ

しめ其の行爲を變ふること能はざるを示せり。而して又左の苦き教訓をも含蓄せり、不敬神者はカインが其の受けし地より遂に放逐せられたる如く、彼の『善きかた』(路一〇・四二)を棄て、此の世の財を愛する人々の失望は免れ難く、時過ぎて悔ゆるも無益なることを示せり。後に聖書に記せる此の教訓(詩四九篇)、はカインとアベルの歴史に既に胚胎し居れり。

尙この歴史上の教訓を新約に照して研究すれば、ユダ書一節には『カインの道に行く』を誡め居り、聖ヨハネは之に基き兄弟を愛することを勧めて、『カインに效ふな、彼は悪しき者より出でて己が兄弟を殺せり。何故殺したるか、己の行爲は悪しく、その兄弟の行爲は正しかりしに因る』(約壹三・一二)と。これに就き最も詳しき消息はヘブル書にあり。曰く『信仰なくしては神に悦ばるること能はず』、又『信仰に由りてアベルはカインよりも勝れる犠牲を神に献げ、之によりて正しと證せられたり。神その供物につきて證し給へばなり。彼は死ぬれども信仰に由りて今なほ語る』(來一・六、四)と。此の聖句は二人の生涯中最も高尚なる點、即ち其の供物を献ぐることに就て語り、一は信仰あり、一は信仰なき事を記せり。又其の信仰の有無は其の供物の種類と之を献ぐる方法に因りて現れたり。然るにアベルの供物を吹込みし信仰と、カインの供物が現せる信仰なき有様は既にこの以前に於ても現れしならん。故にヨハネがカインは『悪しき者より出で』し者なり、即ち常に父祖を墮落せしめし彼の試むる者に従ひしなりと言ひしは之が爲なり。これを熟考せば一層明瞭に



カインの性質と行爲を知ることを得べし。

墮落せし後、神に對する人の位置は全く變じたり。エデンの園に於ける人の境遇を續けて向上するの希望は神に全く服従するにありしなり。然るに人は神に逆ひて墮落せり。爾後未來の希望は全き服従によりて得る事能はざるに至れり、蓋は其の墮落せし儘にては全く服従する事を得ざればなり。「行爲」によりて義とせられ得る道ありしと雖も、罪によりて死したるを以て其の道は既に終れり。茲に於て神は其の洪大なる恩によりて他の道、即ち信仰に於る望を備へ給へり。神が人間に對する恩の約束は蛇の頭を碎き、其の工を毀つ救主を與へ給ふ事なり。人は信仰によりて此の約束を望み、一心之を把握することも又之を拒むことも得たるなり。故に神の國の歴史の初に、此の世と神の國との二つの途は現はれて、その後人類を二つに別ちたり。其の信仰に於る望を拒むものは如何に其の行爲によりて之を現せしやと云ふに、彼等は此の世を其の儘選びて之に満足し、地上に安堵し、之を我物とし、其の喜樂と情慾を快とし、其の藝術を練磨したり。然るに其の約束を信じたる者は地に在りて自ら賓旅なり寄寓者なりと言ひて、心に於ても外部の行爲に於ても其の約束の成就するを信じ、之を待つ事を現したり。即ち前者はカインと其の子孫の歴史を表し、後者はアベルと後にセツと其の子孫の歴史を表すことは言ふを待たず。アダムの凡ての子孫は其の靈魂上の傾向と希望に従つて、其の代表者たるカインとセツの二つの流れに區別せらるべし。

右の説に照せば聖書の教示は簡短明瞭なり。「カインは土を耕す者」にして、「アベルは羊を牧ふ者なり」と記せり。彼等が其の業を選びしは偶然にあらず、是れ其の性質及び意志に適へるは明白なり。即ちアベルは賓旅の業を選び、カインは地を有して之を樂むことを選びしなり。彼等の歴史が樂園を失ふに至らしめたる恐るべき事情と、約束が初めて與へられたる時に近きだけ、それだけ彼等の人生の選擇の意味が明瞭になるなり。此の故にカインは後に邑を建てしのみならず、此の世を其の儘有し、之を樂むことを現さんとて其の子の名を取つて邑に命名したり。又其の子孫に於て其の傾向發達し、遂に五代のレメクに至りて甚だ鞏固となり、最早聖書に記す必要なきに至れり。是故にカインと其の子孫の記事は、レメクと其の子等を以て終り、以後聖書には記す所なし。尙右の二民族(靈魂上の異民族)の歴史を詳細に研究する前に、聖書歴史の最初に犠牲の祭ありしことを認む。是れアベルの時代より以來神に近づき神と交際するに定りたる方法にして、また時を経るに従ひて益々明白になりたり。遂に聖書の歴史の終に於て、從來凡ての犠牲に代表せられたる我等の願むべき救主イエス・キリストの犠牲あり。加之神を知らざる諸國に於ても、人間墮落以前に或幸福なる境遇ありしことを仄に記憶し、救を希望せしが如く犠牲の必要をも認めたり。野蠻人等の血醒き儀式、否無残にも最愛の子をすら献ぐる事などは、犠牲即ち之を献ぐるもの自身の代に最愛の者を棄つる事を以て、神と和ぐために必要と認めて悲惨なる行爲を忍びしなり。是れ元來



神の示し給ひし眞理が誤傳變化したるものなり。之を喩へて言へば、元來の神殿今や破壊され其の跡のみ残るが如きなり。福音の光を與へたまひし神は頌むべきかな。此の福音は『道なり眞理なり生命』にして、『世の罪を除く神の羔羊』を我らに教へしものなり。

### 第三章 セツと其の子孫—カインの族

(創四章)

神の恩寵の聖旨の成就せられん爲にはアベルに代るべき者が必要となりたり。是故に神はアダムとエバに向一人の子を與へ給ひしかば、エバは『神我にカインの殺したるアベルの代りに他の子を與へ給へり』と云ひ、其の子をセツ(與へる或は補ふの意)と名けたり。聖書はセツと其の子孫の歴史を詳細に記すに先ち、カインの系統六代までの事を記せり。カインは既に陳べし如く『ノド』(吟行或は逃遁或は不安の意)の地に行き、其處に邑を建てたり。此は惡魔の精神の支配する國の基礎を置えたりと言ひしは當れり(近世の註解者の説に由れば創四・一七に記す所は、其の邑を建て終りにあらず、唯之を建てつゝありしとの意となす)。天地創造後既に數百年を経過したれば人口も亦増加したることと思はる。カインがかく移住せし事、及び其の子孫の名がセツの子孫の名と對立させられ

たる事の外は聖書に記載する程の事はなかりしと見ゆ。カインの子孫を五代のレメクまで研究せば、其の全族の特性と傾向とは既に十分に發達したるを見ることを得るなり。斯く數代の間に、始祖の生ける中に神の諸の誡命と其の立て給ひし制度とは輕んじ破られ、暴虐と情慾と不虔とが地上に充つるに至りしは驚くべきことなり。此處に第一に記す神の立て給ひし制度の違反は、多妻を娶る事これなり。記して曰く『レメク二人の妻を娶れり』と。『元始より然にはあらざりし』は疑なし。加之レメクが其の二人の妻に言ひし所は最古の歌にして『レメクの劍の歌』と稱せらる。そこには己の力を頼みとし、高ぶり誇り、暴虐と兇殺との精神を現せり。

近世の人の翻譯によれば其の歌は左の如し、『アダとチラよ、我が聲を聞け。レメクの妻等よ、我が言を容れよ。我が創傷の爲に人を殺し、我が妻の爲に少年を殺す。蓋はカインの爲に七倍仇を復されば、レメクの爲に七十七倍せらるべければなり』と。此はトバルカインの發明を指して、神はカインの爲に報い給はば、自己は劍を以て創傷と病に應じ七十七倍の罰を與へんとの意味なり。

神がカインの爲に仇を復し給ふによりて、自己も亦安全なるべしと思ひし外、更に神に就て云ひしことなし。又レメクの妻等と其の女の名を記せるは理由なきにあらず。蓋はレメクの男子の業が『所々の誇』を表せし如く、其の女の名は『肉の慾、眼の慾』を表したり。即ち其の妻の名『アダ』は美し、或は飾の意、『チラ』は陰(其の髪の色が故か)或は響(歌が上手なりしたためか)との義にして、其の女の名『ナアマ』は艶麗との意なりき。又カインの子孫は其の歴史によれば左の特性ありき。レメクの子等



の業と發明とは技術の修練と落着いたる社會状態を示す、即ちアダに由りて生れし長男ヤバルは「天幕に住みて家畜を牧ふ所の者の先祖」にして家畜を牧ふを業としたるが、其の次男ユバルは「琴と笛とを取る凡ての者の先祖」にて樂器の發明者なり。又チラに由りて生れしトバルカイン（トバルは鍛冶の意味と思はる）は「銅と鐵の諸の刃物を鍛ふ者」なりき。右に記す子等の業をレメクの劍の歌に照して考ふれば、レメクの家族が庸せし文明は悉く不敬神的なるを認むるを得。そは不敬神者の庸せし者なるのみならず、神に信賴せず、又神の人間に對する聖旨に従はざりしが故なり。加之希臘と羅馬の如き古代の文明國に現れし偶像教の特性が、カインの子孫にありしは眞に注意すべきところなり。且彼等の家庭の有様はアダ、チラ、ナアマの名を以て現すことを得、其の國體の有様は古代の異教社會の精神を表す「レメクの劍の歌」により見ることを得、又其の文化と職業は聖書に記すカインの子孫の傳記の概略によつて知ることを得。而して彼等が洪水に由りて亡びし如く、偶像教と其の生活、文化、文明も亦亡され、神が其の警告と約束を信ぜし者を庇護し給ひし方舟のみ残りたるなり。

カインの子孫の事よりセツ及び其の子孫に移れば、兩者の相違の甚だ顯著にして、セツが其の子をエノス（弱）の意にして詩八・四。九〇・三。一〇三・一五等の「人」と同じと名けしは、カインの子孫の高慢と反對なるのみならず、其の相違はエノスの生るゝことを記せる次の言によりて一層著しく現る。曰く「此の時人々エホバの名を呼ぶことを始めたり」と。素より其の以前にも神に祈禱し、

又感謝せしことなしと思ふべからず。即ちカインとアベルの供物によりても知ることを得。右の言の意味は、其の二族の間の從來の相違は、セツの子孫が公然神を信認し、又讚美するに由りて益々著しくなれりとの意なり。是故に是れ神の國の歴史に於る第一の大時代の初にして、「信仰に由る者」が世の「中より出で」、此の世の國より蟬脱するに因りて二派の大別が公然現れたりといふ意なり。數百年の後アベルの血に勝りて物言ふ血、即ちイエスの臨み給ひし時、其の弟子等は肉に屬するイスラエルを離れ、又彼等のキリストアンと稱せられしはアンテオケより始まりしが、是れ新約の教會歴史の始を現せし如くに、セツの子孫がエホバを公然告白したるは、舊約に於る神の國の歴史の始を現せるなり。

斯く世を離れて其の中より脱却すること、即ち「エホバの名をよぶことを始むる」は、十字架を負ひキリストに従ひ、神の國に入らんと欲する者の各自常に努むべき所なり。

#### 第四章 セツより出でし信仰深き民族の系圖

(創五章)

聖書の目的の一は既に達したり。カインの子孫の悪しき傾向は充分に發達し、又「此の世の國」



の眞 狀の現るゝことも既に記したり。然るにセツの子孫は神の約束を信じ、又神に事ふる決心を公然現し、又之に因りてカインの子孫と離れたり。この二途は明白にして之に従ふ者の特性は確定したり。故にカインの子孫の歴史を尙研究する必要なければ、『信仰によつて證せられたる』『古への人』の傳記に移ることにせん。

一見すれば此の物語は、『アダム』の傳の書『即ち叙述を以て始め、處々に簡單なる記事を挿入したる如くに思はれるれども、其の實然らず。先づ最初に注意すべきは、アダムは『神の像の如くに造られたり』とあるも、今はアダムは『其の像に循ひ己に象りて子を生めり』との語を加へらる。彼は神に象りて聖く又罪なき者に造られしが、セツは其の父より墮落せし性質を遺傳したるなり。次にアダムを始め父祖の傳と共に長男(セツ)だけは長男にあらず(を生みし時の齡と、其の後生存したる齡と、其の死せし時の齡を記せり。天地創造より洪水までの父祖を合すれば左の十人なり。左表はヘブル語の原文によれる年にして、ギリシヤ語の譯文又はサマリヤ語の文に依れば、多少異なれり。尙之に就てはアツシヤア、ヘイルス兩氏の年代計算の相違の説明を記せる本書第十章を参照すべし。

| 人名  | 長男を生みし時の齡 | 其後生存せし齡 | 死去の時の齡 | 天地創造より出生の年まで | 天地創造より死去の年まで |
|-----|-----------|---------|--------|--------------|--------------|
| アダム | 一三〇       | 八〇〇     | 九三〇    | 一            | 九三〇          |
| セツ  | 一〇五       | 八〇七     | 九一二    | 一三〇          | 一、〇四二        |

尙之を詳かに研究すればアダム、カイン、エノク、イラデ、メホエル、メトサヘル、レメクと其の子等の七代に就ては詳記し居らざるを認むべし。その理由は、カインの子孫は其の將來のなかりしが、『エホバの名を呼びし』セツの子孫は神の恩寵の聖旨を成就する者と預定せられたればなり。次に兩系圖中共にエノク、レメクと云ふ人ありと雖も、聖書は各々特性の區別を記せり。即ちカインが其の名を取りて己の建てたる邑の名としたるエノクと、『神と偕に歩みしが神彼を取り給ひたれば居らずなりし』エノクとは別人なり。又高慢にして劍の歌を詠みしカインの子レメクと、其の子をノアと名けて『此の子はエホバの詛ひ給ひし地に由れる我が操作と、我が勞苦とに就きて我等を慰めん』

| 人名     | 長男を生みし時の齡 | 其後生存せし齡 | 死去の時の齡 | 天地創造より出生の年まで | 天地創造より死去の年まで |
|--------|-----------|---------|--------|--------------|--------------|
| エノク    | 九〇        | 八一五     | 九〇五    | 二三五          | 一、一四〇        |
| カイナン   | 七〇        | 八四〇     | 九一〇    | 三二五          | 一、二三五        |
| マハラレル  | 六五        | 八三〇     | 八九五    | 三九五          | 一、二九〇        |
| ヤレド    | 一六二       | 八〇〇     | 九六二    | 四六〇          | 一、四二二        |
| エノク    | 六五        | 三〇〇     | 三六五    | 六二二          | 九八七          |
| メトセラ   | 一八七       | 七八二     | 九六九    | 六八七          | 一、六五六        |
| レメク    | 一八二       | 五九五     | 七七七    | 八七四          | 一、六五一        |
| ノア     | 五〇〇       | 四五〇     | 九五〇    | 一、〇五六        | 二、〇〇六        |
| 其後洪水まで | 一〇〇       |         |        |              |              |
| 合計     | 一、六五六     |         |        |              |              |



と云ひたるレメクとは別人なり。かく其の同名は却て其の特性の相違を明白にせり。又一方の族は其の罪惡の極端がカインの子孫の第七代なるレメクに現れしが、他の一族に於ては其の敬神の極がセツの子孫の第七代なるエノクに現れたり。

右の二族の系圖の相違よりセツの子孫の傳に進むに方り、彼の古代の系圖は、『神が其の約束を實行し給ふたる忠信と、先祖等の信仰及び忍耐を表す記念碑なり』と言ひし言の正しきことを思ふ。各人皆天命を終り、其の子に約束を傳へたりしが、皆信仰を懐きて死にたり、未だ約束のものを受けざりしが、遙に之を見て迎へ、地にては旅人また寓れる者なるを言ひあらはせり。是等の人々につき知り得ることはこれに止まる。然るに各傳の終に『而して死ねり』と繰返して力言せるは不必要なるやうなるも、『アダムよりモーセに至るまで……死は王たりし』(羅五・一四)ことと、死が罪より出でし事と、第二のアダム之に勝ち給ふ教訓をも表せるなり。唯例外なるはエノクにして、例の如く其の子を生みし後何年『生存へたり』との簡單なる記事の代りに、『メトセラを生みし後三百年神と偕に歩めり』とあり。又『死ねり』との言の代りに再び『エノク神と偕に歩みしが』と記し、更に『神彼を取り給ひたれば居らずなりき』とあり。之に因りて其の生涯も、亦移さるゝことも『神と偕に歩む』ことに關せり。此の言は聖書中珍らしくして、ノアに關する例(創六・九)を除けば、祭司が聖所にて神と交ることにて就てのみ記せる(馬二・六)言なり。是故に殊にエホバと親密なる交際を示すものな

り。エノクの生涯と行爲と移さるゝ事とをヘブル書に左の如く説明せり。『信仰に由りてエノクは死を見ぬやうに移されたり。神之を移し給ひたれば見出されざりき。その移さるゝ前に神に喜ばるることを證せられたり』(來一・五)とあり。其の移されしはエリヤと等しく(王下二・一〇)、又主イエスの再臨し給ふ時聖徒の移さるゝが如し(哥前一・五・五一、五二)。又エノク自ら左の如く『預言せし』は甚だ注意すべきなり。『曰く、視よ、主はその聖なる千萬の衆を率ゐて來り給へり。これ凡ての人の審判をなし、すべて敬虔ならぬ者の不敬虔を行ひたる不敬虔の凡ての業と、敬虔ならぬ罪人の、主に逆ひて語りたる凡ての甚だしき言とを責め給はんとてなり』(猶一四、一五)と。

\* 右はエノクにつき知る所に適へり。典外聖書の「エクレシアステカス」(四四・一六)によれば、エノクは歴代の人々の改心の模範として移されたるなり。「エノクの書」によれば、彼は不敬虔なる者を鞠かんが爲に主の來り給ふことを預言せることを確言せり。

エノクの『移されし』時、アダムのみは死にしがセツ、エノス、カイン、マハラレル、ヤレド等は猶ほ生存中なりき。エノクの子メトセラのみならず、其の孫レメク(當時百十三歳なり)も亦エノクの移されしことを見たり。ノアは未だ生れざりき。當時の敬神者等はエノクが預言したる事と其の移さるゝによりて預表せし事件を如何に感ぜしかは、レメクがエノクの移されし後六十九年に生れし子をノア(休息或は慰安)と名けしによりて知ることを得るなり。レメクはその時言へり『此の子はエホバの咀ひ給ひし地によれる我が操作と我が勞苦とに就きて我等を慰めん』と。レメクは神が咀



ひ給ひし地上の勞苦の負ひ難きを感じ、又救主につける神の契約の成就に由りて其の結果たる苦難と滅亡の中より恩の救を望み居たり。この希望に基き其の子をノアとは名けたるなり。果して一大變化は來りしが、是は其の罪深き人々の滅亡と、契約の歴史の新時代の始まることとなりたり。ノアに就ては唯一人の子のみを記さずして、一族が各々新しき人種の歴史の基となる三家族に別ることを現すために、ノアの子三人の名を記せり。

最も親しく神と偕に歩みしエノクが、彼の前後の人々の半生にも足らざる僅に三百六十五年、地上に生存せしことは注意すべき所なり。非常なる長壽は改心と恩恵のために祝福なるやも知れざれども、神の最も愛し給ふ者は、罪の爲に世に出で來りし操作と勞苦より救はれんがため、其の生涯を短縮さるることあり。後に見ゆる如く、非常に長壽なるは初には必要なりしも、罪惡の深き人々とつては決して幸福にはあらざりしなり。

## 第五章 人間一般の墮落—洪水の準備

(創六章)

萬國の傳説には何れも古代の人々が甚だ長壽せしことを傳へざるなきは奇なりと云ふべし。斯る

事實の傳はり易きは當然なれども、『洪水』以前には健康、體格、氣候、土地、食物等の有様が現今と大に異なりしことを記憶すべきなり。原始の状態は知ることを得ざれば、その相違を比較する事能はずと雖も、人口の頓に増加せんため、又知識の發達せんため、殊に神を拜し又其の示し給へる救主に就ける信仰の連續せんため、斯く長壽を保つ必要ありしは明白なり。此に依て各人は其の遠き子孫にまで數世紀間の事實を傳ふるを得たり。即ちアダムはレメクの生れし後もエデンと墮落の物語と神の口より直接聽きし契約の言を知らしむることを得たり。又最初の『父祖』中天地創造以來千五百三十六年に起工せし方舟の建造を見し者なかりしも、レメクの死せしは『洪水』より僅に五年以前にして、又最も長壽せし其の父メトセラの死せしは洪水と同年なりき。交際、文明、知識等大に發達せし現今の時代に於ても、大事件に關係遭遇せし人と親しく交際することに因りて、如何に知得ることの多きかを考ふれば、人類の初代に於て長壽の必要なりしを理會し得べし。

されども又一方より考ふれば、かく長壽するが爲に罪惡をも増長せしむるに至れり。數百年間死と死に關する恐怖を容易に見ざるに因りて良心を鈍くし、惡人との長き親交は腐敗と罪惡の進歩を促し、審判と救拯の無限なる遲延に因りて戲謔者の不信は益々堅くなりしならん。又實際かゝる有様なりしは、レメクの預言や、ノアの時代の世の有様や同時代の人々の不信や、主イエスが『ノアの時』を『人の子の來る』時に比し給ひし(太二四・三七—三九。路一七・二六)に因りて明かなり。聖ペテ



ロ曰く、其の時「嘲ける者嘲笑をもて來り、おのが慾に隨ひて歩み、かつ言はん、主の來り給ふ約束は何處に在りや、先祖等の眠りしもの萬のもの開闢の初と等しく變らざるなり」と(彼後三・三、四)。  
 セツの子孫とカインの子孫との相違すら、兩者間の肉慾的な動機より爲したる離婚に因りて不明となり、人間の墮落は其の極に達したり。記して曰く「神の子等人の女子の美しきを見て、其の好む所の者を取りて妻となせり」と。かくて當時地上には人口大に繁殖せしことならん。其の有様は次の如く記されたり。「エホバ人の惡の地に大なると、其の心の思念の都て圖維る所の恒に惟惡きのみなるを見たまへり」と。是れ現今云ふが如き人間の性質、悉く墮落せしみに止まらず、カインの子孫とセツの子孫との區別を失ひしたため、公然憚る所なく好んで罪を犯し、神に逆ひたることを示せり。此の時に於てノアの外に「エホバの名を呼ぶ」者なし。「當時地にネピリムありき……其等は勇士にして古昔の名聲ある人なりき」。ネピリムとは其の語原「撃つ」の意味なり。判り易く言へばルーテルの譯したる如く「壓制家」なりき。必竟當時は暴行と淫慾に満ち、契約を信ぜざる時代にして、セツの信仰と禮拜は殆んど滅亡して活ける希望なかりしかば、人々は審判を受け亡されざるを得ざりき。

此の「神の子等」てふ言に就て他に數多の説あれども、綿密に之を研究すれば信し難きもののみなり。

其の數を過大に計算したるものもあるが取るに足らず。

ネピリムなる語はカナンにて身幹高き人を指す由、間諜の報告に見えたり(民一三・三三)。或は當時のネピリムも亦巨人を指し

たるやも知れず、此の言の意味は必ずしも身幹高きを云ふにあらず。また聖書には此の言が唯「神の子等の子孫」にのみ限れることを表せる言は一もなし。

右は神の正義のみならず、其の契約に對する誠實も亦このことを要求したれども、神の慈悲も左の如き言によりて現れたり。曰く「エホバ地の上に人を造りしことを悔いて心に憂へ給へり」と。其の悔い給ふと言ふは無論唯人の如くに云へるなり。何となればカルビンも言ひし如くに、何事も偶然に又神の豫知し給はずして起らざればなり。又人間の罪のために神の愛よりする憂愁に就て彼の云ふ所次の如し。「人大罪を以て神に逆くときは神は其の罪を憂ひ給ふによりて心を傷けられたるが如くに愁歎し給ふ」と。又其の結果として萬物が其の主たる人間との關係に於て人間の罪と滅亡に與れるを以て、神は「地の面より……人より獸、昆蟲、天空の鳥に至るまで亡さん」と曰ひ給へり。然るに之を實行する遙か以前に、神は「我が靈永く人と争はず(或は寧ろ借に住まはず、或は支配せず)」「其は彼も肉なればなり」。或人は之を譯して其の叛逆、即ち墮落に因りて全く「地に屬し、情慾に屬し、惡鬼に屬する者」となりたりとなせり。「然れど彼の日は百二十年なるべし」と曰ひ給へり。即ち神の慈悲に因りて最後の審判の來るまでには尙百二十年の期間ありたり。「方舟に入り水を経て救はれし者は僅にしてたゞ八人なりし」が、「その方舟の備へらるゝあひだ寛容をもて神の待ち給ひし」は、此の百二十年の間なりき。



當時一般の腐敗に感染せざる者は獨りノアのみなりき。今聖書の順序に従ひてノアの記事を引用することにせん。曰く「ノアはエホバの目の前に恩を得たり」又「ノアは義人にして其の世の完全き者なりき」と。ヘブル語に由れば「子等の中にも」、同時代の人の間にありても、靈性上端正眞摯、心純一完全にして唯一の目的を有する者なりとの意なり。「ノア神と偕に歩めり」、これはエノクと同じなり。彼が神の前に恩を得たることは、其の道德上の態度を顯す所の彼が「義人」なりし事に先ちて記されたり。即ち彼が「義人」なりしことは新約的の言にて言へば、聖靈に因りて新になりし心より出でたりしなり。之を一言せばエノクの如く神と偕に歩みしなり。ノアが神の前に恩を得たるは、恰も嵐の將に吹かんとする雲間より日光の輝くが如きものなり。世は亂れたりと三次記し、又暴虐世に滿りとも記されたり。是れ「世を視給ひし」主が人々の心腸を探り、又試みて之を罰する前に慈悲を以て忍び耐へ給ふたることを示すものなり。

加之「方舟の備へらるゝあひた、寛容をもて神の待ち給へる」は百二十年なりき。此の期間ノアは特に「義の宣傳者」として努めたり。方舟の建造に着手せし時はノア四百八十歳、即ちセム、ハム、ヤベテの三子の未だ生れざる前にして、セムの生れしはそれより二十年目なりき。ノアの大信仰の著しきは、戲謔者と不信なる世人との眼より見れば無用の長物にして、且つ必要よりも百二十年前に於て方舟を造りしのみならず、未だ子なきに其の「子等」、及び「子等の妻」のために準備せし

所にありき。必竟其の事情を考ふるに従つて父祖ノアの動かざる信仰は尙著しく顯るゝなり。神の示し給ひし言は次の如し。「諸の人の末期わが前に近づけり」と。是れ人の墮落の極なりと譯する人もあり。「其は彼等の爲に暴虐世に滿つればなり」、言ひ換へれば、彼等の爲したる暴虐が世間に充滿したるなり。されば「視よ、我彼等を世と共に剪滅さん」と。かくてノアと其の家族のみ「方舟」に因りて救はるゝことになりたり。方舟はモーセの救はれし葦の箱舟(出二・三・五)の外他に記す所なき語なり。ノアは「松の木」を以て方舟を造り、「瀝青を以て其の内外を塗る」ことを命ぜられたり。其の長さ三百キュビト、濶さ五十キュビト、高さ三十キュビトにして一キュビトを一尺五寸とせば長さ四百五十尺、濶さ七十五尺、高さ四十五尺なりき。ヘブル語の原文に由れば、屋根の下一キュビトに光と空氣を入れるべき所あり(日本譯は導光牖と記せり)。或人の考ふる所によれば硝子の如き透明の物を用ひしならんと。其の他創八・六に記す如き窓もありて戸は其の側に設けられたり。又諸の動物と食物を貯ふるため三階に造られたり。蓋は「諸の生物」即ち「諸の潔き獸」牡七對宛と潔からざる獸牡七對宛を挈へ入れたたり。斯くして其の定れる時に至り、神「洪水を地に起して、凡て生命の息氣ある肉なるものを天下より剪滅し絶たん」とし給へり。されどもノアと其の妻は「契約を立てたり」、即ちノアに由り贖主の生れんとする恩の契約により聖旨を成就し給はんとなり。左ればノアと其の妻(此處に多妻の痕跡見えず)及び其の子等と、其の子等の妻とは方舟に



入りて、其の周圍にある一般の滅亡の間に保護せらるゝこととなりたり。

\* 一キニピトを一尺七寸五分とする人もあり。聖オーガステンは方舟の寸法の割合は、完全なる人の寸法と同じにして、其の頭より足に至るまでは、胸の測定の六倍、胸の厚さの十倍としたり。

右は方舟に就て聖書に記す所なるが、方舟の容積と、其の内部の有様と、當時動物を入れし室を詳細に測らんとして巧みに説をなす者も少からざれども、斯る説の無益にして徒勞なるは、元來方舟の容積と入るべき動物の数を全く測り知る事能はざるを以てなり。神の國を示す聖書には斯る愚問に對する答を記さずと雖も、神の備へ給ひし方舟は、如何なる意味よりするも眞に其の目的を達するに足れる事と、其の目的の完全なりし事とは疑ふべからず。方舟は航海の爲にあらざして貯藏の爲なるを忘るべからず。帆柱もなく、帆も舵もなく、底は多分平かにして、唯巨大なる函の如き物なりしならん。其の寸法が物を貯ふるに適當なりしことは、千六百四年にオランダ人ピーター・ジャンセンが同寸法の割合を以て造船せしに、同噸數の船より三分の一多量に積載し得たりしを以て證すべし。

方舟の構造に就てこれ以上に他の問題を論ずるの必要なるべし。當時之に就て最も顯著なる所は即ちノアが義を宣傳へ、來らんとする審判につき警告しつゝも救の方舟を準備する事を續け、其の信仰を顯せしこと是なり。聖書の言を以て次の如くに概括するを得ん。曰く「信仰に由りてノアは

未だ見ざる事につきて御告を蒙り、畏みて其の家の者を救はん爲に方舟を造り、かつ之によりて世の罪を定め、又信仰に由る義の世嗣となれり」(來一・七)と。

## 第六章 大洪水

(創七章—八章一五)

聖書の『洪水』の記事は莊嚴にして、且つ簡潔なること、眞に其の比を見ず。思ふに舊約聖書中同事件を記すは唯二回にして嚴肅且つ簡單なり。詩二九・一〇には「エホバは洪水の上に坐したまへり、エホバは寶座に坐して永遠に王なり」とあり。此は「イエス・キリストは昨日も今日も永遠までも變り給ふことなし」(來一三・八)とあるに類似せる言なり。而して此の舊約歴史上の事件の福音的解釋を賽五四・九、一〇に記して、「このこと我にはノアの洪水の時のごとし、我むかしノアの洪水をふたゞび地にあふれ流るゝことなからしめんと誓ひしが、其のごとく我ふたゞび汝を憤らす、再び汝を責めじと誓ひたり。山はうつり岡は動くとも、わが仁慈は汝より移らず、平安を與ふるわが契約は動くことなからんと、此は汝を憐みたまふエホバの聖言なり」とあり。

『洪水』の記事に就て注意すべき第一の點は、ノアが「都て神の己に命じ給ひしごとく」爲したる



こと、即ちノアの絶對從順を二回記載せる事(創六・二二。七・五)なり。次には洪水前即ち「大淵の源皆潰れ、天の戸開け」、別言すれば地と天にある極の口廣く開ける前、七日間恐れつゝ之を待ちたる事なり。この洪水の始まりは「ノアの齡の六百歳の二月、即ち其の月の十七日に當れり」。ヘブル普通曆(宗教曆にあらず)によれば、現今の十一月中旬なりき。扱ノアと其の妻、三人の子セム、ハム、ヤベテと其の妻等、其他總ての動物は方舟に入りしかば、「エホバ乃ち彼を閉置め給へり」。是に於て「雨四十日四十夜地に注げり」。同時に大淵の源みな潰れたり。洪水は百五十日地にありて後、水減り始めたり。此の恐るべき災害は左の如く記さる。「洪水四十日地にありき。是に於て水増し、方舟を浮めて方舟地の上に高くあがり。而して水瀾漫りて大に地に増しぬ。方舟は水の面に漂へり。水甚だ大に地に瀾漫りければ、天下の高山皆おほはれたり。水はびこりて十五キュビトに上りければ、山々おほはれたり。凡そ地に動く肉なる者、鳥、家畜、獸、地に匍ふ諸の昆蟲及び人皆死ねり。即ち凡そ其の鼻に生命の氣息のかよふ者、都て乾土にある者は死ねり。斯く地の表面にある萬有を人より家畜、昆蟲、天空の鳥に至るまで盡く拭去り給へり。是等は地より拭去られたり、唯ノア及び彼と共に方舟にありし者のみ存れり」と。

創七・二一に照して八・三、四を考ふれば、雨の地に注ぎし四十日は、此の百五十日の中に含めるものと見るべきなり。

此の記事につき、近世の或者者は次の如く適切に言表せり。曰く「此の物語は其の真相を活々と力

強く描きしも、近世の歴史家又は詩人が多く記すべき點を記す處なし。即ち死の苦痛や絶望の歎なく、夫婦或は親子が水の漲るを見て狂亂の恐怖を現す處もなく、又己自身は救はれし一人の義人が、自ら如何とも爲すこと能はざる滅亡を見て、心痛の情を現す言もなし。されども其の物語の簡潔なる所こそ却て其の滅亡の甚だしきを感じしむ。而して之を重ねて記したると、且つ二の思想の對照に因りて此の感殊に深し。即ち一方に於て恩を受け、又救はれて方舟に入りし僅少の人々を六回(創六、七、八章)記し、又他方に於て其の他の萬有の全く滅されし事をも同じく掲げたり(創六・一二、一七。七・四、二一—二三)と。

吾人は當時地上一切の生物を滅したる洪水の有様を詮議するために、水面に淋しく浮び居りし方舟に關する聖書の印象深き莊嚴なる記事を忘るべからず。思ふにエホバがノアを「閉置たまへり」とは、ノアが其の亡ぶる者を救はんと欲するも之を救ふ能はざる事を示す爲ならん。其より百五十日の後、聖書は最も意味深き左の言を以て記して曰く「神ノア及び彼と共に方舟にある諸の生物と諸の家畜を眷念ひ給へり」と。風は地の上に吹き、雨は止み、「是に於て水次第に地より退きたり」。方舟はノアの入りし時より五個月の後、「アララテの山に止りぬ」。是必ずしも最高の峰(一萬七千二百五十呎なり)にあらず、また其の次の峰(一萬二千呎なり)にもあらざるべく、唯其の山脈に止まりしならん。水次第に減じて七十三日を過ぎ、即ち十月一日に至り山々の巔現れたり。其より尙



四十日を経て後、ノアは「鴉を放出せしむるが」、山上に於て留るべき所を得、又浮べる屍を以て餌とせしかば再び歸らざりき。尙七日を経て「地の面(谷の底地)より水の減少しかを見んとて亦鴉を放出しけるが、鴉其の足の趾を止むべき所を得ずして彼に還りて方舟に入れり」。尙七日の後再び鴉を放出ちけるが、暮に及びて彼に還れり。「視よ其の口に橄欖の新葉」を啣へて還り來れり。此の物語は、橄欖の樹が水の下にありて葉を出すものなることを確むる間接の證據を有するは著しき事實なり。尙七日の後三次鴉を放出しが「再び彼の處に歸らざりき」。右につきライエル氏は「之よりも眞實に又巧に博物學の事を記せし所なく、事實としても詩としても驚くべきものなり」と言へり。六百一年の一月一日には「水地に涸れたり。ノア乃ち方舟の蓋を撤きて視しに、視よ地の面は燥きてありぬ。二月の二十七日に至りて地乾きたり」。此はノアの方舟に入りし時より一年と十日日なりき。

右は聖書に記せる洪水の物語なり。聖書の目的は敢て奇談や科學的事を論ずるにあらず、乃ち神の國の歴史を示すにあるは屢説明せし所なるが、近世屢不穩當なる心を以て論難する人に對しては、近代記者の左の語を引用すれば足れりと思ふ。曰く「神學者及び科學者の間には、洪水は絶對的一般の事なりしや、或は當時の人の住居せし地に限れるやとの事に就て議論あり。余は斯の如き問題を論ずることを爲さず、唯方舟の止りしアララテ山の東方にある地方は、何の時代にか水底に埋められし跡を認むとの著しき事實を述べれば足れり。この地は其の近傍の地方よりは特別の低地な

れば埋められ易き地方なり。

洪水に關し他に又特に注意すべき點あり。即ち互に遠く離れて無關係なる諸國の古代史に洪水の事跡を傳へざる無く、皆同一の原因より出づるを疑ふ事能はざるなり。しかして此等は其の詳細に於て昔話の如く考へらるることも尠からず。又何れも皆自國に於てのみ行はれしこととするは怪とするに足らざれども、聖書に記せる眞の記事と異なり、誤謬は會々各民族がその移りし國々に携へ行きて傳へし事を證するものなり。ペロウン氏は此の傳説に就て左の如く區別せり。即ち第一、西部亞細亞にてはカルデヤ、ペニケ、フルギヤ、スリヤ及びアルメニヤの傳説を含み、第二、東部亞細亞にてはベルシヤ、印度及び支那の傳説を含み、第三、亞米利加の部に於てはチエロキ及びメキシコ・インデアン諸族と珍らしくもフキジ群島を含み、而してギリシヤ諸國の類似せる傳説を以て第四部となせり。右の中最も興味あるはカルデヤ即ちバビロンの傳説にして、輕々しく看過すべからざるものなり。

聖書に記す物語の眞實なるを信ぜしめんがためには、斯る間接なる證據の必要あるにあらずと雖も、歴史的の研究も眞に完成し且つ正しく應用せば、皆聖書の記事の眞實なる事を確證するは眞に注意すべきなり。然しながら洪水に就て聖書の吾人に對する教訓の眞髓は、大洪水の上に浮びて其中にエホバが「閉置め給ふ」者を永遠に救ふところの夫の方舟(キリスト)を示すに在るなり。



洪水に關するカルデアの物語

洪水に就てのカルデアの傳説は二種ありと云ふも可なり。一はギリシヤより出づる所にして、即ち紀元前第三世紀にバビロンの記録を、ギリシヤ語に翻譯したるカルデアの祭司ペロサスより出でたり。されどもこは他の傳説程明白ならざれば茲には之を詳記せず。

大なる興味をそよめるは、紀元千八百七十二年英國博物館のジョージ・スミス氏が發見して解讀せし後、尙同氏が深く研究せし太古の楔狀の文字の銘刻せられたるものにして、此は十二の碑板に記せるも、利用し得るは未だ其の一部分に過ぎず。右に記す所は洪水に關するバビロンの傳説なるが、洪水が其の近傍に出でし事ゆゑ、此の記事は特別なる價值あるものなり。乃ち此の傳説は紀元前二千年乃至二千五百年頃のものなりと思はる。この洪水の歴史は之より救はれたる英雄が、スミス氏はイズバアと稱し聖書に記すニムロドならんと思ふ王に報告せるものなり。この傳説と聖書の洪水の記事は相違妙からざれども、兩者の記せる所には著しき一致ありて、此の事件の起りし地の歴史の明かなる事實なることを現して、聖書の記事を確認せり。

此の傳説には第一〇・一〇にあるエレクの邑を屢々記し、寓意的なる語を以て巨人族のありし事、其の名は異れりと雖もノアの父レメタの事、及び神が罪のために洪水を以て世をじさんと定め給ひし時、方舟を造りし敬虔なる賢人父祖ノアの事を記せり。又其の言の聖書の言に似たるもの甚だ多きより見れば、或は聖書より引用せしならんと思はるゝ所あり。例へば當時の人々が方舟を造るを慮りたる事、方舟の内外を漆青を以て塗れる事、助けし者を方舟に閉置めし事、水の退きし時窓を開きし事、船出でし止る所を發見さるるによりて歸り來れる事、また鴉を放出しが水にある屍を食ふて歸らざりし事、終にノアが祭壇を築くこと等はなり。スミス氏はこの碑板を發見せし結果を簡短に論じて曰く、『必竟カルデアの傳説と聖書の記事とを比較する時は、其の主なる點に於ては殆んど符合せり、即ち洪水前の人々の罪惡、神の忿怒、また方舟を造ることに就ての命令、鳥獸を入れるこ

と、洪水の出づる事、雨と風、方舟山上に止る事、水の退きしや否やを試みんとて鳥を放つ事、及び洪水後祭壇を築く事等なり。右の諸點は兩記事共に同じ順序を以て記すと雖も、兩者を詳細に研究すれば救はれし人々の數、洪水の日數、方舟の止りし場所、鳥を放つ順序其他につき相違の點多からず」と。

當時の人々が種々の誤謬に因りて眞偽を混淆せしこと妙からずと雖も、神の事に付き原始的知識の保持せられし事は次に引用するスミス氏の説に明白なり。記して曰く『太古バビロン人は世の罪惡のために神の下したる罰なる洪水のありし事、又方舟を造りて滅亡より救はれ、爾後移されて神々と偕に住みし聖人のありし事に關する傳説を有せしこと明かなり。彼等は地の下に苦痛の地獄、又蒼空に榮光の天あるを信し、而してこの兩所に關する記事は聖書の中に著しくそれに類似せる所あり。彼等は又身體と別なる魂ありて身體の死する後も不滅なる者なりと信し、又此の魂が神々の一人により召されて地より天に上り往く者なりと言ひ表せり』。



父祖等の歴史

第七章 洪水の後—ノアの祭—ノアの罪—ノアの子孫

(創八・一五—九・二八)

洪水により『世の人』の皆滅されしことは深く之を考究すれば、人類の眞の存続に取つて必要なき。其の新しき生命を受けん爲に先づ死あることは必要なりき。舊き世界は洪水の中に葬られたり、是れ新しき世が其の墓より甦らん爲なり。蓋はセツの子孫がカインの子孫と混同せしによりて、神の恩寵による聖旨の成就せん爲に全然新しき出發の必要ありたればなり。然れば神はアダムに曰ひ給ひし如く今又新にノアに對して、ノアと其の子等を祝して其の繁殖することを約束し、又諸の生物を支配せしめ給へり。然れども後に見る如く、今過ぎしばかりの審判と今始まりし新しき境遇のために、ノアに與へ給ひし約束は多少以前と異なりき。

地の乾きし後、ノアは神の命令を受けるまでは方舟を出でざりしことを認むべし。既に方舟を出でし後には先づ『エホバの爲に壇』を築き、『諸の潔き獸と諸の潔き鳥を取りて燔祭』を壇の上に獻げ

たり。これ當に恩に感じ又神に服従するのみならず、靈なる禮拜を以て新生涯を始め、又地を神に供へたるなり。生物を以て祭を爲すはアベルに倣ひ、エホバの名を呼ぶはセツの子孫の神を信頼するに倣へりと雖も、以前の祭と異なりて此の時始めて壇を築くことを記せり。樂園の存在せし間は、そこは曾てエホバが人と交際し給ひし場所なるが故に、そこに向つて禮拜せしならん。されど其の場所は洪水の爲に流されしかば、神其の位を天に引上げ其處より自らを示し又人々と交際し給ひしが如し(創一・五、七參照)。而して吾人の心と祈とを天に在す神に捧げざる可らざるものなることは、供物の置かれたる壇に由りて示されたり。聖書によれば、『エホバ其の馨しき香(安息或は満足の香)を嗅ぎ給ひ』、換言すれば、其の祭を受納れ給ひて、『エホバ其の意に謂ひ給ひけるは』、即ち心を決め給ひけるは、『我再び人の故に因りて地を誣ふことをせじ、其は人の心の圖維るところ其の幼少時よりして悪ければなり』と。一般の人の罪惡は曾て洪水の審判を起したる原因なりしが、今は却て再び地を誣はざる原因とせられしことは、ルーテルもカルビンも共に認めたり。而して此は唯洪水以前の人々と以後の人々との有様の相違を示すものなり。神は今人間一般に罪惡あることを認め、將來それを基礎として支配し給ふことを定め給へり。即ち今後人を憐なる罪人とし、人間の救拯に就て約束し給ひしもの、一切を成就する迄は、其の第二にして又終局なる審判を延して、慈悲と忍耐を以てあしらし給ひき。又イスラエル人が神の選民なることを除けば、ノア時代とキリス



ト時代との間はパウロの語を借りて『神が見過し給ひし』『無知の時代』(徒一七・三〇) 或は『忍耐をもて過來しかたの罪を見過し給ひし』(羅三・二五、二六)時と云ふを得べし。

斯く洪水後救主の降臨まで、即ち猶太教の時、神が地上の邦國に對して爲したまふ根本原則は今述べし如くなるが、更に一步を進めて神がノアに語り給ひし言によりて、洪水の前と後との有様に於る相違を考ふべし。第一は『地のあらん限りは播種時、收穫時、寒熱夏冬及び日と夜息むことあらじ』との恩寵ある通知は、神がこの地を撃つ滅し給はざるのみならず、人は常に四季の順を知り、暫く地に住み、之を有し又耕すべきことを現せり。故にノアが『農夫』となりしは、先にカインが自ら『地を耕す者』となりしとは其の事情全く異なれり。第二は既に述べし如く、最初神がアダムに語り給ひしと同じ繁殖の祝福を新にし、再び下等動物を支配せしめ給へり。されど今は次の相違あり、原始に於ては動物は自然に人に服従せしが、今は唯強ひて服従せしむることとなりたり。即ち最初に神は『諸の獸』と『諸の鳥』をアダムに服従せしめ、又『之を何と名くるかを見んとて』、アダムの所に率ゐり至り給ひしが、今はノアと其の子等に『地の諸の獸畜……汝等を畏れ、汝等に懾かん。是等は汝等の手に與へらる』と曰ひ給へり。

洪水以前の有様は知らず、今や始めて明白に肉食を許されたりと雖も、血の儘食ふべからずと限られたり。之は後に供物に就て云へる如く、生命は其の血なればなり(利一七・一一、一四)との理由

によるならん。又『凡そ人の血を流す者は人其の血を流さん』と云へる言を以て、人を殺すを嚴禁し、以て一の最も大切な變化を顯せり。而して神は斯る罪を自ら罰し給はず其の權を人に任し給へり(羅一三・一、二)。是れルーテルの言ひし如く、『此の言によりて治者の職務及び刃を操る神による權能は立てらるゝ也』。其は神はその像の如く人を造り給へる事を以て、殺人者は死刑に處すべしとの理由として記せるは、何人も自ら仇を報ゆべからず、唯地にありて神の代人として其の權能ある人のみ之を報ゆべきことを示せばなり。之によりて其の代人は詩八二・六に神(或はエロヒム)と稱せられたり。ルーテルも亦之に就き論じて曰く、『神若し人に生殺の權を賜はゞ、況てや之に劣る資産、家族、妻子、僕及び地を治むる權も共に委ね給はざらんや』と。斯て神がノアに語り給ひし言は我等を治め又審判く人々の權能を含めり。後世凡て猶太教に入りし異邦人の守らざる可らざるノアの七誡と稱するものあり。即ち(一)偶像禮拜、(二)瀆神、(三)兇殺、(四)淫行、(五)強盜、(六)血を流し絞殺したる物を食ふ事の禁止、(七)治者に服従の命令是なり(徒一五・二〇參照)。

ヘブル語に於ては神に用ひし名稱概ね二種あり。一は其の支配し給ふ權を表すエロヒム(力の意)にして、一は契約の神なる品性を表すエホバ(在りの意)是なり。

神は其の語り給へることを確證せんとしてノアと其の子等とに『契約を立て』、また其の『契約の徴』として『虹を雲の中に起し』(或は立て)給へり。聖書には明記せざれども此の時始めて虹を見たること



となるべし。聖書には唯爾後虹は神が再び洪水を以て地を滅し給はざる契約の「徴」、即ち見易き表號となり、又神は之を觀て、神と地にある都て肉なる諸の生物との間なる永遠の契約を記念え給はんと記せり。是故に虹は神の契約の徴證に定められたり。風吹き荒み、さながら洪水前に現れし天候に於る如きに遡ふ時、吾人は現在洪水を目撃せし者が如何に深く此の徴を感ぜしならんと推察し得るなり。或る獨逸人は巧みに之を述べて曰く、『太陽の光線が暗き雲に映するによりて顯れたる虹は、天より來る者が地より起る者に照り渡ることを示し、又天地間の淵に跨るを以て神と人との間の和を傳へ、又其の地平線まで顯るゝによりて惠の契約が地の端まで擴まることを表すが如し』と。

神とノアとの交際に關する事件よりノアの傳記の中の大に異なる事實に移らざる可らず。ノアはその三子セム、ハム、ヤベテとともに方舟を出でて農夫となり葡萄園を耕せり。ユダヤの傳説によれば、樂園より伸び出でたる蔓を植へたるなりと。然るに彼のエデンに於て禁じたる果實を除けば、葡萄ほど地に於て罪惡と零落と荒廢を來すものあることなしと云はざるを得ず。ノアは葡萄酒が人を酔はしむる力を有するを知らずしてか、或は不注意のため多量に飲用せしなるか、洪水より救はれし儘の老父祖は單に酔へるのみならず、其の子ハムに耻辱を與へらるゝに至れるは歎すべし。ルーテル曰く、『ハム若し神の命令に従ひ孝心を早く失せざりしならば、酒に酔へる父を侮らざりしならん』と。幸にノアの他の子等は其の兄弟の罪に與せず、孝を盡してハムの無情の所業より其の父を

救へり。是に於て三人の子等は各々其の所業によりて其の報を得たり。ハムは詛はれ、セムとヤベテとは適宜に祝福せられたり。而してハムの他の子等よりもカナンが殊更詛はれしは、ノアが其の子のために苦みしが如く、ハムは其の子によりて罰を受けたるならん。又カナンの斯く殊更に罰せられしは或は其の父に與せしが故ならんと雖も、尙將來のイスラエル人とカナン人との關係を表さんがためなりしならん。カナン人の中にハムの精神と咒詛とは尙著しく實現したり。この關係のため、ハムは既に『カナンの父』と稱せられたること二回あり(創九・一八、二二)。

ノアの子なるセム、ハム、ヤベテの三人の子孫は將來漸次全地に蔓延する人種を出すものなるが、此の三人の特性は其の子孫に傳へられ、且其の名も記號的又預言的にしてセムは榮光、ハムは灼熱、ヤベテは擴張との意義なり。ノア云ふ、『カナン詛はれよ、彼は僕輩の僕となりて其兄弟に事へん』と。ハムの子孫即ちアフリカ人種が如此になりしは人の知る所にして、カナンとは服従者との意なりとする者あり。ノア又云ふ、『セムの神エホバは讃むべきかな、カナン彼の僕となるべし』と、この預言はイスラエル人がカナンの地を取りし時著しく成就せられたり。又云ふ、『神(エロヒム)ヤベテ(擴張)を大ならしめ給はん、彼はセムの天幕に居住はん、カナン其の僕となるべし』と。此の最後の預言は三に分れ、(一)神は全能の神としてヤベテの子孫たる歐洲各國民の擴張する特性を約束し給ひ、(二)ヤベテ(或人の説の如く神とすべからず)はセムの天幕に居住はん、即ちオーガスチン



が云ひし如く、『預言者等の子たる使徒等が建てし教會に』居住はんと云ふを以て、ヘブル人種によりて萬民に及ぶ祝福を指せり。(三)終にカナンはヤベテの僕となるべきことにして、古代に於て富貴と貿易の中心なりしツロとカルタゴと、強大にして且つ古代諸國に先ちて最も文明なりしエジプトとがギリシヤとローマに服従せるに因りて成就せられたり。

或獨逸の著者は之に就て云ふ『吾人はセムの天幕に住めるヤベテの子孫にあらすや。又新約聖書の言はセムの住家中にて語れるヤワン(ギリシヤ)の語にあらすや』と。

加 之ヘブル人種の祖先セムに對して言はれし言につき特に注意すべき所あり。其の祝福の言は、ヤベテの時と異なりて神に對する感謝を以て始まる。之に就てルーテルの曰く『ノアは之を先見し、言を以て言ひ盡すこと能はずして感謝を以てせり』と。而してセムの祝福は外部的にあらず、靈に關するものなり、それはエホバはセムの神たるべければなり。セムの分は預表的なる形容語にて言ふ時は、最も廣き意味に於てその後ユダヤ人の中なるレビに與へられし分の如し。ヤベテはセムの天幕に住むべしとは、換言せばイスラエルは恰も萬國民に對してレビの族の如くなるべしとの意なり。加之エロヒムはヤベテを大ならしめ給ひ、契約の神エホバはセムの神となるべし。斯てアダムに對する最初の約束は今一層細に示され且擴張せられたり。約束の救主は、エホバが其の中に居給はんとする選民の祖先たるセムより出づべきものにして、又セムに因りてヤベテは其の來らんとする靈の

恩に與るべく、爰にユダヤ人と異邦人の區別と各の使命は確定せられたり。即ち前者はエホバより、後者はエロヒムより與へられたるものにして、前者は教會に於て、後者は世に於て之を盡すべし。

### 第八章 諸民族の系圖—バベル—言語の淆亂

(創一〇—一一・一〇)

洪水以後全地にノアの子孫の住ふことは神の聖旨なりき。是故に彼等の子孫は世界の諸國民、諸種族とならんがため勿論離散せざるべからず。されば彼等の群居せんとするは是れ常に神の聖旨に逆ふのみならず、人間一般の罪深き點より考ふれば危険となりたり。且ハムと其の兄弟の異なる性質と傾向に因りて内部の分離は既に現れたるを以て、外部の一致は眞正の一致にあらざりしなり。然るに聖書に於ては神の目的を強制すべき審判を記す前に、左の三の理由を現さんがために、諸民族の系圖を記せり。是れ(一)ノアの子孫が全地に満てることを示し、(二)イスラエルと諸民族との關係を現し、(三)諸民族の名を神の簿籍に記さんがためなり。之に因りて『過ぎし時代には神、すべての國人の己が道々を歩むに任せ給ひしかど』(徒一四・一六)、彼等をも恩寵の計畫中に容れ、終に『セムの天幕に居住む』べく定め給ひしことを示されたり。



ノアは聖書の記された一般の目的に従ひ、其の子等の將來を定むる預言をなしたる後、『洪水の後三百五十年生存へたり』。又其の『齡は都て九百五十年なりき。而して死ねり』といふの外記す所なし。ノアが全地を三子に分ちたる事につき大體を言へば、セムに亞細亞、ハムに亞弗利加、ヤベテに歐羅巴を與へたりと云ふも可なり。又之に倣ひて近世學者等の一致して言ふ所によれば、現在の諸言語の起原は三にして、是等は元來一起原より出でしなれども、『言語の淆亂』によりて之を失ひたるならん。而して其の一起原より出でたる事は三種の語の相互の關係に於て著しき點あるに因りて證せらる。歐羅巴、亞細亞、亞弗利加がノアの三子に分たれたることを認むれば、愈々彼等に關する預言の成就せられし事を明白に知ることを得。又創一〇章に記す諸民族の目錄を考ふれば、其の名を知ること難からず。例ばノアの第三子ヤベテに關するもの、中、ウエールスとブリタニーのキムリ(ゴメル)、スクチャ人(マゴグ)、メデア人(マダア)、ギリシヤ人(イオニヤ又はヤワン)、及びトレシアン人(テラス)は皆人の知る所なり。其の子孫中獨逸人、ケルト人及びアルメニヤ人はゴメルの三人の子より出でたるなり。之を尙詳細に研究する必要なしと雖も、タルシシ即ち西班牙、及びキツテム即ち『洲島の民』は何人もよく知る所ならん。

次にセムに就て言はん(創一〇・二一)、エベルの本系はアブラハムの族を出せしベレグとヨクタンの子孫(二五)とに別るゝを以て、セムは『エベルの全の子孫の先祖』と稱せらる。セムの子孫は専ら

亞細亞民族にして、其の中アスル即ちアツスリヤとヨブの生れしウズの地の外は知ることを得ず。

ハムの事を最終に述ぶる所以は、人々の離散せる事に關係あるによりてなり。其の子等はクシ人(エテオピヤ)、ミツライム人(エジプト)、フテ人(リビヤ)、及びカナン人にして之を知らざるものなかるべし。カナン人を除けば此等の民族は皆亞弗利加に居住せしが、カナン人はイスラエル人に放逐さるゝまではパレステナに居れり。其他ハムの子孫にて亞細亞に居住せし者一人あり。此はパピロン帝國の建設者にしてアツスリヤを占領しニネベを建てし(創一〇・一二)、クシの子ニムロデと云へる人なり。最初の世界的帝國を建設したる『世の權力ある者』たりし彼の名は、吾人にカインと其の子孫レメクを想起さしむ。そは或人は之を謀反者と説明する其の名の意味は言はずとするも、其の歴史の特性は高慢なる暴虐と謀反となればなり。ニムロデを『權力ある獵夫』と聖書に記したる理由は、不思議にも其の後嗣たる王等の殘したるアツスリヤの古石碑に因りて證明せられたり。此等に因りて見るに、勝利を得たる大勇士なる王等は民の獵者と稱せられたればなり。之によりて『彼始めて世の權力ある者となれり』との言の意味を理會し得べし。ニムロデは『彼の國の起初』なるパピロンを建て、それより『アツスリヤに出でニネベを建てたり』(一一)。ニムロデに就て二回共に四の邑を記すは奇と云ふべし、即ち始は己が國パピロンの四の邑にして其の京はバベル、次は占領せしアツスリヤの四の邑にして其の京はニネベなり。右は悉く古代史と多くの歲月の間地中に埋没



せし後、聖書の記事を確證せんが爲に近年レーヤード、ロフタス兩氏によりて掘出されしアッスリヤの石碑に著しく合へり。蓋は第一、吾人はバビロン大帝國がクシ人の創建にかゝる事を知るが故なり。加之ニムロデの名もエジプト諸王の表中に記せり。第二、其の國の最初の京はバベルにして、又バビロン初代の王等の名稱は不思議にも四民族を現す名稱を有したり、これはバビロンとアッスリヤに各々四都ありしことを現すものならんと推察せらる。第三、聖書に記す如くバビロン帝國の國境は、北方アッスリヤにまで擴張られてニネベの都を起せしが、その後アッスリヤは却てバベルの都が支配せしバビロン帝國を併合するに至れり。此の故に此等の點に就ては最近歴史的研究に因りて聖書の物語を著しく確證したり。

『夫の権力ある獵夫ニムロデ』の國都バベルの宏壯華麗なりし事は、本書の主意にあらざる程詳細に之を記さざれば實際を現し難しと雖も、或人の計算によれば少くとも一百万哩、或は二百万哩とするものあるを以て考ふれば、略其の廣袤を知るを得べし（之を誇張の言と思ふ者もあり）。此の如き邑こそニムロデが其の基を置きたる所なり。彼の時代の榮耀榮華を好む人々が此の如き國都を建て、『其の塔の頂を天に至らしめん』と欲せし事は怪むに足らず。其の計畫の失敗に歸したるはセムの孫ベレグの時なりき（創一〇・二五）。ベレグは洪水より百年の後に生れ、二百三十九年生きたれば、當時地上の人口は既に多數に達したりしならん。

洪水により罪人は亡びしも罪惡は亡びざりし證據は、ニムロデとベレグの時代の人々の生活と言語とに見るべし。彼等は方舟を出でし後『東に移りて』（創一一・二）、廣くして又善く潤澤ひたるシナルの平野に着したれば其處に居住したり。此の時までは皆『一の言語一の音のみ』なりしが、彼らは『邑と塔とを建てその塔の頂を天にいたらしめん』とし、二つの目的を以て此の事を初めたり、即ち『名を揚げる』と、『又』全地の表面に散ることを免れん』が爲なりしなり。此の言はいつ聞くと如何にもニムロデの用ひたるものらしく、バビロン風の精神を表せり。其の言の意、他なし、『謀反すべし』てふ是れなり。之に因りて人々を地の全面に居住せしめ給ふ神の聖旨に背くのみならず、斯る地上の國は其の動機が高慢と野心より成るものなれば、神と神の國に反逆するものなり。獨逸の或批評家は『我等名（ヘブル語にて光輝）を揚げん』てふ言は、神の約束の中心たるセムとは似て非なるものにして、所謂非キリストが地上の政を立つるを表すところなるは、神が其の計畫につき宣べ給へる左の言に因りて然りと思はる（創一一・六）、曰く『民は今既に之を爲し始めたり。然れば凡て其の爲さんと圖維る事は禁止め得られざるべし』と。この言はバベルの塔を建つるは連續して謀反するの始めなることを示すものと思はる。若し斯く凡ての物質的勢力を一ヶ所に集めしならば、一般の暴政と一般の偶像禮拜、即ち非キリストが最後の審判まで保留するものを發達せしむるに至りしならん。聖書に記して曰ふ、『エホバ降臨りて彼人衆の建つる邑と塔とを觀給へり』と。此は普



通の言を以て云はゞ神が裁判の手續として人の工を檢察し給ふことなり。バベルの邑と塔を建つる者の自ら信じて其の目的を現せし誇言、即ち「去來甌石を作り云々」(創一一・三)に對して、神は其の計畫を破るべき目的を以て又似たる言にて宜ひけるは、「去來我等降り彼處にて彼等の言語を消すべし」と。斯て目に見ゆる何等の干渉なく、唯この簡易なる方法即ち其の言語を消すを以て、神は人間の謀反の最大なる計畫を禁止め給へり。記して曰く「遂に彼等を彼處より全地の表面に散し給へり」と。『是故に其の名はバベル(淆亂)と呼ばれる』。右は詩第二篇に記す莊嚴なる言の註解ならずや。

バベルの塔の遺蹟は未だ發見されずとも、大略古ピロンの位置より西南約六哩を距つるピルス・ニムラドと云ふ古跡と同一ならんと言はる。ピルス・ニムラドは三角の塚にして、其の上に塔の古跡ありて平地より高さこと約百五十五呎五吋、其の周圍二千餘呎なり。然るに其のバピロンより隔たるにより聖書に記す塔の跡ならざるべきかとも思はる。然りとすもピルス・ニムラドはバベルの塔より僅に數百年の後建てられしものならん。故に其の建築法に因りて其の最初の塔の形狀を推察し得べし。ピルス・ニムラドは北東に向ひ三面ともに傾斜をなし、傾度極めて小なる七段の金字塔なり。而して此の段を置えたる地盤は熱かざる煉瓦にして、其の段は諸神或は遊星に擬して諸色に塗りたる、熱きたる煉瓦を積みたり。第一段は土星を祭れるを以て黒色に塗り高さ二十六呎、廣さ二百七十二呎平方、第二段は木星を祭り橙黄色にて高さ同上、廣さ二百三十呎平方、第三段は火

星を祭り朱色にて高さ同上、廣さ百八十八呎平方、第四段は太陽を祭り山吹色にて高さ十五呎、廣さ百四十六呎平方、第五段は金星を祭り淡黄色にて高さ同上、廣さ百四呎平方、第六段は水星を祭り藍色にて高さ同上、廣さ六十二呎平方、第七段は月を祭り銀色を以て塗り高さ同上、廣さ二十呎平方なりき。其の最高段には殆んど全面の廣さに建てられたる堂宇なりき。其の高さは前述の如く百五十三呎にして、殆んどエジプトの最大三角塔(高さ四百八十呎)の三分の一位なりき。古代のバピロンの建築法が、聖書に記す左の言に適へる事を認むるは實に興味あることなり、曰く「彼等互に言ひけるは去來甌石を作り、之を善く熱かんと。遂に石の代に甌石を獲、灰沙の代に石漆(地瀝青)を獲たり」と。地瀝青の中に置きし熱きたる小き瓦は、其の塔の邊のみならず、其の邑と同時に建てられしバベルの古宮殿の現存せる遺蹟に於ても見出さるるなり。

聖書は、夫の「塔」が其の建築者の離散されし後も存在するを許されしや否や、また「エホバ彼處に全地の言語を消し給ひし」方法に就て詳細に記す所なし。此は聖書の目的以外の事なればなり。然りと雖も當時始めて人力を以て地上に巨大なる國を建設せんとする際、神が其の建築者の言語を消亂し、又彼等を全地に四散せしめて其の計畫を破り給ひしは預表的審判にして、ヘンテコステの日に與へられし恩は其の正反對なりき。其の日聖靈を注がれしによりて別に世界的王國を創建せられしが、其の最初の休徴は方言を言ふ力にして、凡ての國民がセムの天幕に集めらるてふ約束の成



就せらるゝ時に、諸の國民の再び結合することを預表するものなり。

第九章 諸民族と其の宗教——ヨブ

近世獨逸の或著者は曰く「異教の始めて起りしは、高慢にも人々が「去來邑と塔とを建て、其の塔の頂を天に至らしめん、斯して我等名を揚げん」と言ひし時なりき」と。往古のユダヤの歴史家ヨセフアスすら、ニムロデを異教の父とし、其の教の特質は神によらず、罪惡によりて勢力と幸福とを得んとするにありとせり。其の中心たる主義は、凡て見えざる處のものを拒み、唯暫時なる世上の物を求むることなり。されば吾人は木石の像を拜せず、また知識上に於ては偶像を拜する者にあらざるも心に於ては異教徒たることあり。尙深く注意すべきは何れの民族と雖も、必ず人間以上の或者を信じ之を拜することは是なり。然れども最も開けざる野蠻人にもあれ、又は最も知識ある哲學者にもあれ、皆唯一の活ける眞の神を知らず、之を知れるは唯神が特別に自己を示し給ひしイスラエル人のみなりき。然れどこの人々とも亦再び偶像を拜するに至らしめざる様、常に神の教導と訓練を要したり。偶像教は見ぬ物を信する宗教と異なりて見ゆる所に憑る宗教なり。見ること能はざる造物主の代に、見ることを得る日月星辰の如きものを萬有の原因なり支配者なりとし、一切萬事其

の何たるを問はず皆之に屬する神ありとす。即ち「多くの神多くの主」ありとし、又は現實的或は想像的勇者等を神となす。此の如く天或は萬有又は人間を拜するは是れ異教なり偶像教なり。然れど人々斯くしても尙満足せざりき。蓋は其の諸神と人を絶對的に支配する、動かすべからず又理會すべからざる運命ありとしたるを以てなり。嗚呼眞に恐るべき變化なる哉、天父と其の慈愛を此の如き虛妄と失望とに變へんとは。加之人間が自己の案出せし斯る宗教に漸次に歸依せしは殊に遺憾ならずや。而して先づ其の信する諸神に嫁するに自己の惡徳を以てし、次に其の神の惡徳に倣へり。眞に神を知らざる諸國民は、聖書に記す彼の比喩に於ける季子なりき(路一五・一二)。彼は異教的の學術、美術、文學、權威などに己に屬ける業を以て其の父の家を出で、遂に豕の食する蝗豆を以て己が腹を満さんと欲するに至りしかども、其の空腹を飽かしむる事を得ざりき。其の放蕩なる子を父の心と其家とに歸らしめたる主イエス・キリストによりて、自己を顯示し給へる神は讚むべきかな。

夫れ神は己れ自ら證し給はざることなし。人々が心に神を求め、揣摩する事、其の良心に咎めらるる聲、供物を獻げんとする事、又眞理に關する古代の傳説は皆多少其人を神に導けり。而してイスラエルより出る者悉くイスラエルにあらざりし如く、何れの時代を問はず異邦人なる諸國民中神に屬する者あり。例へばヨブ、メルキゼデク、ラハブ、ルツ、ナアマンの如き者は是れなり。異邦人中にも「月足らぬ者」(哥前一五・八)のごとき者の數は、古に溯り昔の傳説の深く保たれたる時代



に近づくに従ひて愈々多くありしならん。之に就て最も著しき例は、古代の有様を善く現す約百記に記載せり。

約百記につき左の二點の確定せるあり。同書に記す地方及び人物は父祖時代にして、アブラハムの家族以外のものなり。同書は初期の父祖時代の異邦人の物語なりと雖も、之に記す所の貴重莊嚴にして敬神的心靈的なることは、『イスラエルの中にたに見しことなきなり。此處にはヨブの歴史を寫し、以て其の記事に於る思想の深遠、其の用語の美しく又雄渾なることを論すべき要なし。たゞ簡單に當時の宗教的又社會的狀態を論すれば足れり。エリフの語を引用するまでもなく、ヨブは眞の神を親しく知れる者なりしことは明白にして、且彼は謙遜にして熱心にエホバを拜する者なりき。彼は『モーセと預言者』を知らざりしと雖も、モーセと預言者の言を知れり。彼は敬虔にして神を信じ神に服従し、又靈的悔改を常とせしかば神に嘉せられたり。ヨブは又供物を献げ、大誘惑者のことを語り、身體の復活及びメシヤの降臨を待ちたり。

ヨブの信仰に就ては既に簡單に論ぜしが、其の朋友等はヨブの如き敬虔を有せざりしも、彼の所信を以て奇にして又未だ聞かざる所なりとはせざりき。是當時の或社會の幸なる有様を現すものにして、技術及び文明の如何に進歩せしやは約百記の記す所に因りて之を推測することを得べし。ヨブは地位高く又富者なりき。近世の著者(スミス編聖書辭典の中のクック氏の説)の語を借りて言へば、

「族長は威儀ある生活を営めり……ヨブは數々邑に往き、君とし裁判官とし又有名なる勇者として尊敬せられたり(伯二九・七、九)。また裁判所、起訴書及び裁判手續等に就て記す所あり(伯一三・二六、三一・二八)。既に人々は萬有の現象を観察し、且論することを始め、又天文学の觀察を古代の傳説に關する空想と聯結したることあり。同書には鑛山事業と大なる建物と、破壊せられたる墓の一事を記せり。……記者の生存中に大改革ありて、曾ては獨立したりし國々も今や顛覆せられ、全人種とは不幸と零落の慘狀に陥りたり」。

社會の狀態につき同書に記す所を見落すべからず。其の地に暴虐、盜奪、兇殺ありしかども、幸に又異なる所もありたり。記して曰く『我出でて邑の門に上りゆき、我が座を街衢に設けたり。少き者は我を見て隠れ、老いたる者は起あがりて立ちたり(伯二九・七、八)と。又かく貴人を尊敬するのみならず、敬虔なる富者と貧者との關係を左の如く記せり、『我が事を耳に聞ける者は我を幸福なりと呼び、我を目に見たる者は吾が爲に證據をなしぬ。是は我助力を求むる貧しき者を拯ひ、孤子及び助くる人なき者を拯ひたればなり。亡びんとせし者われを祝せり、我また寡婦の心をして喜び歌はしめたり(伯二九・一三)と。右のうちには新約時代に至りても變更を希望すべき所なき反面には、人間の大部分に偶像崇拜と墮落との恐るべきものありしならんと察せらる。其は偶像崇拜は洪水以前より傳へられたりと思はるれども、其の勢力速に増加し、墮落は『斯る無知



の時代』の間に益々甚しくなりたればなり。

第十章

聖書初期の歴史の年代記——神がアブラハムと

其の子孫を取扱ひし歴史の發端

尙進んで論ずるに先ち、本書に記す年代表及び聖書の初期の年代を簡単に説明する要あるべし。第一、キリストの降世より溯りて年を數ふることを認めざるべからず、例へば天地創造の年を降世前四千年とせば、創世後千六百五十六年に起りし洪水は降世前二千三百四十八年なるべし。尙また此の事件には互に數百年の相違ある二の年代表を記したることに注意すべし。前者はアツシヤア氏の説にして即ち英文聖書の旁註に記し、又ヘブル原語の舊約聖書に合へる所なるが、後者はヘイルス氏の説なり、其の相違の理由は聖書の年代を數ふる出所に三あるによれり。モーセの五卷は三種あり。第一はヘブル語の舊約聖書の原文にして、第二は之を翻譯せるギリシヤ語のものなり。此は遠く救主降世以前に翻譯せられ、キリスト時代のユダヤ人に廣くに用ひられ、概ね新約聖書に引用せられしものにて、七十人の手に依りて翻譯せられたりと思はるゝ故に「七十人譯」(七十との義)と稱せらる。第三はサマリヤ人が用ふる五卷なり。右の三種によるに、父祖の年齢各相違し居れば、其の

中何れに従ふべきやとの疑問を生ず。而して各説とも賛成者あれどもヘブル語原文に記す年代は、最も博識なる神學批評者の殆んど同意する所なり。他の二説の中サマリヤの五卷は信すべからざるものにして採るに足らず。其の七十人譯とヘブル原文との異なる所は左の如し。此は多少洪水以前の父祖、殊に洪水とアブラハムの召さるゝこととの間の父祖等の齡を延ぶるによりて、洪水はヘブル原文より五百八十六年後、又アブラハムの生るゝは尙八百七十八年後、合計千二百四十五年後の事なりとす。ギリシヤ語翻譯者が元の年代を變更せし理由は察し難きにあらず。是れ他なし、成るべくアブラハムの生れし時を洪水より遠くせんと欲せし故なりき。便宜上ヘブル原文の年代を短年代と云ひ、七十人譯の年代を長年代と云ふも可なるべし。因つて前兩氏の所説を簡単に説けば(其の理由を詳細に説明するは長きに過ぐべし)、ヘイルス氏はギリシヤ語の長年代に賛成し、アツシヤア氏はヘブル語の短年代に賛成せりと云ふも可なり。

之に就ては議論多しと雖も、既に陳べし所にて充分なるべし。今や聖書に其の歴史の記さるゝ神の國の現るゝ初期に在るを以て、之に就て研究することは更に肝要なりとす。神は第一に人間一般、其の次に人種の一部、最後に諸民族の一部を取扱ひ給ひしが、今や萬の人々に對して恩寵の計畫を實行せんとて自らの爲に一の選民を起し給へり。此の民を搖籃期より教育して其任務を盡さしめ、即ち萬國民の願望なるキリストの來り給ふまで之を教育し給へり。次の三點は特に注意すべきなり。



近世のエドヤ人は天地創造をキリスト降世前三千七百六十一年とす。然ればエドヤ人の曆年を知らんには、紀元の年に三千七百六十一年を加算せざるべからず。

一、神の民となりし者の選擇と聖別。父祖等の歴史に於て神が漸次これを選出し、又之を聖別し給ふを見るなり。兩者ともに左の二の特徴ありて普通の方法に由るにあらず、徹頭徹尾超自然、即ち恩寵に因りて成就せられたり。かくアブラハム獨り其の父の家より召されしは、即ち選ばれ又聖別せられしものなり。約束の嗣子なるイサクの生れしことも亦或意味にては超自然にして、アブラムの長男イシマエルは棄てられたり。此の外エサウとヤコブの歴史に於ても、亦凡ての父祖の歴史中に於ても、選擇と聖別との二主意現れざるなし。蓋は最初に彼の選民は、聖書の大主意即ち吾人の有する所は神より受けたるものにして、又其の恩に因る、即ち人の動作にあらず神の工にして、普通の方法によるにあらず、神の特別なる働によることを認めざるべからざるなり。尙神の取扱に就て認むべき他の特點あり。新約の比喻を以て言へば、天空の鳥來りて其の枝に宿る樹となるべき芥種の如し。アブラムの時に枝葉を剪り取られ根のみ残されたり。此の一の根は成長して先づ父祖の家族となり、漸次繁殖してイスラエルの支派となり、遂に選民となりて花咲き果を結ぶに至れり。然れど此は唯目的を達せしむる方法なりしに過ぎず。イスラエルは所謂左の三の冕を有しき。即ちアロンに於て祭司の位あり、ダビデ及び其の血統に於て王の權威と又預言者の職務ありたり。され

ど「終の日」に至つて、祭司、王、預言者の三重の王冠は「モーセの如き預言者」、「メルキゼデクの位に等しき」永遠の祭司、また「ダビデの子」にして永遠に眞の王なるイエスによつて戴かれたり、しかもこれ當然のことなりしなり。又アダムよりセムに至り、アブラハムに至り、ヤコブに至り、又律法に於て、舊約の預表に於て、最後に諸預言に於て愈々明瞭に與へられし神の諸の約束は、遂に萬國民がセムの天幕に居住ふに至り、彼の中に「然り」となり又「アーメン」となりたり。

二、前代に於る神の默示と父祖時代に於る神の默示には其の方法に相違あり。以前は神或は地在りて或は天よりして人に語り給ひしか、今は人々に顯れ、殊にエホバの使或は契約の使として現れ給へり。神が始めてアブラムに「顯現れ」給ひしは、彼が神に選ばれ又聖別せられて、神の民の先祖とせらるゝため神の召に従ひてカナンに入りし時なりき(創一・二・七)。其の後契約の歴史の各段階に於て神はエホバの使又契約の使として現れ給ふことありき。かく現れ給ふことは常にアブラハム、ハガル、ヤコブ、モーセ、バラム、キデオン、マノアと其の妻及びダビデに對してのみならず、エドヤの歴史の最終の時にも反逆又背信なるイスラエル人の爲に、此のエホバの使は左の如き哀願をなせしことありたり。「萬軍のエホバよ、汝いつまでエルサレム……を恤みたまはざるか」と(亞一・一一)。此のエホバの使を詳細に研究するに従ひて彼が普通の天使にあらず、唯エホバが舊約時代に於てかく自己を示し給へることを確信するに至るべし。此の後この問題に就て論すべき機會屢次あ



るべしと雖も、昔のユダヤ人が彼を雲の柱、火の柱の中に、又後には殿の至聖所にて現れ給ひし「シカイナ」、即ち目に見ゆる神の臨在と信じ、古代の教會に於ては之を神の子、即ち三位一體の第二位なるキリストとして、恰んど異口同音に崇むるを見るは頗る興味あることなりとす。舊約に記すエホバの使のことを敬虔の心を以て研究するに勝りて、有益にして又幸福なる問題は他になかるべし。

三、父祖等の大なる一特性は其の信仰なりき。父祖等の行爲はイスラエルの歴史とその民族が神に聖別せらるゝことを代表せり。近世獨逸著者の言によれば、如何なる場合にも父祖の歴史に於る不變なる特性は左の如し、即ち「信仰を以て約束の言に信頼し、又其の言の爲に目に見えざる未來の事を得んとして目に見ゆる現在の事を放棄することなり」云々。されば「アブラハムは信仰によりて喜びつゝ働き、イサクは信仰によりて忍び、ヤコブは信仰によりて戦ひ、又勝を得たり」。彼等は皆「信仰を懐きて」生き、又「死にたり、未だ約束の物を受けざりしが、遙に之を見て迎へ、地にては旅人また寓れる者なり」しが、今も亦然り。アブラハムの血統より出でたるものゝ大なる特權を無視する者に非ざるも、眞實の意味に於て「信仰に由る者は是アブラハムの子なり」。又「汝等若しキリストのものならば、アブラハムの裔にして約束に循へる世嗣たるなり」。獨逸の詩人の言に曰く、

「牧場にある羊の特徴は、  
眼には見ざれど、さながらに  
見えざる主よ、汝を  
見るが如くに信する信仰にぞある。」

第十一章 アブラムの召さるゝこと——カナンに着し。

後暫くエジプトに移ること

(創一一・二七—一三・四)

アブラムに因つて新時代の始ると云ふも可なり。乃ち彼は神の約束を保ち、又其の成就せらるべき方法たる新しき民族の先祖となるべき者なるが故に、其の召さるゝ時に父の家と家族と國と民とを離るゝ必要ありしと見ゆ。唯其の從來の境遇に在りて其の召に從はんとするには、多くの危険ありしのみならず、新に召に應じて「後」にある一切のことより離れざる可らざりき。若し續いてカルデアのウルに在りしならば、到底古き鎖の新しき一輪に過ぎざりしならん。加之神の特別な待遇と、アブラムが神の命令に服従するに因りて現るゝ信仰と忍耐とは、新世界の首、即ち「信する凡ての者の父」となるに適はしめんが爲なりき。其の他アブラムと其の子孫の歴史は福音の大主意の準備となり、又凡ての信仰と忍耐とを以て約束を嗣ぐ者の歴史を代表することに定まりたり。

是迄神は洪水及び言語の消滅等により、人々が其の恩の聖旨に反かんとする計畫を止め給ひしのみなりしが、アブラムを召し給ひし時には審かんとに非ず、恩を現さんが爲に自ら干渉し給へり。



アブラムの歴史は四つの段階に分つことを得べし、此の四つの段階は何れもエホバが自ら彼に示し給ふことを以て始まる。第一、父祖が其の業と務に召されし時(創二二章—二四章)、第二、後嗣を興ふるとの約束を得、契約が結ばれたる時(一五章、一六章)、第三、其の名のアブラムをアブラハムと改める事と、契約の記號及び證たる割禮とに因りて其の契約が立てられたる時(一七章—二二章)、第四、其の信仰がイサクを献ぐることに因りて試みられ、神に嘉納せられ又完成せられし時(二二章—二五・一一)是れなり。右は父祖アブラムの漸次に登りたる歴史の所謂高峰にして、其の歴史の他の事件は乃ち之に登る路の如し。

セムの血統を辿れば、アブラムは洪水後の第十代の「父祖」なり。彼はテラの子(三男にして末子と思はる)にして、其の兄等はハランとナホルなり。テラの宗族、正しく言へば支派は、バビロン國の南カルデアに居住せり。近來再び發見せられし如く「カルデアのウル」は、カルデアの邑の中にて最古の若くは最古に近き邑の一なりき。ウルはユフラテ河より凡そ六哩を隔て、今のベルシャ灣より凡そ百二十五哩を隔てたれども、原は之に沿ひたりと思はる。此の相違を生ぜしは、近傍の山が次第に水に洗ひ流されて海を埋め沖積層を構成せしに因る。此の故にアブラムは幼時濱邊に立ちて其の後代の子孫の繁殖に喩へられたる數へ難き砂を見たり。尙其の子孫の比喩にせし他の事も同じく彼が能く知りし所なり、即ち數へ難き星にして、同地方に於ては星を拜む風ありたり。アブラムの住みし邑

は偶像に「満ちたり」しが故に、深くこれを冥想せしならん。ウルの位置は今もホルの名を書きし瓦を見出すによりて知らるゝなり。此はホルキ、即ち月の神を現せしが、カルデアのウルは有名なる月の邑、即ちカルデアに於る月を拜むことの中心の地なりき。此の邑の最も有名なる古蹟はウル月の宮の跡にして、其の瓦に記せる名によりてキリスト降世前二千年のものなるを知るべし。已に今日三千九百餘年を経たりし瓦は、アブラハムの生れし古き邑を證し、又神の言を信じて之に従ひし時の彼の大英斷を現すの證據となれり。

アブラムが此の地に於る偶像教より改心し、又これが爲に迫害を受けしことを現すユダヤ人の傳説あれども、聖書に於ては斯ることを記せる所なく、唯其の不變なる目的に従ひて神の國の歴史に關する事のみを記せり。然れども書二四・二、一四、一五に因りてテラの家族が「在昔河(ユフラテ河)の彼旁に住みて皆他神に事へたり」しことを知るが故に、其の境遇に於る感化の如何を理會し難からず。ウルの中より神はアブラムを召し給ひしが、これに先ち、其の長兄ハラン死せり。記して曰く「テラ、カナン地の往かんとて、其の子アブラムとハランの子なる其の孫ロト、及び其の子アブラムの妻なる其の媳サライを引挈れて、俱にカルデアのウルを出でたりしが、ハランに至りて其處に住めり」と。其の「カナン」の地に往かんとて「てふ言によりて、テラの死に先づ遠く、又其の家族が未だウルに居たる時に、アブラムが神に召されしは疑ひなし(徒七・二を參照すべし)。ハラン



は後に『ナホルの邑』と稱せしによりて(創二四・一〇、參照創二七・四三)、アブラハムの兄ナホルと其の家族が其處に居住せしならんと推量せらるれども、之は後のことにして又偶像は未だ棄てざりしならん。此の地方はカルデアに非ず、メソポタミアの領分なれども、永くカルデア語及び其の宗教を保存せしことが聖書の物語を確證するは興味深しと言ふべし。ハラントふ地名は後年にも續きて羅馬帝國の時、ロー人がバルテア人に敗られたる有名な古戦場の一なりき。

ウルよりの旅は遠く南方に於ては長途にして困難と危険多かりき。又ハランの近傍の肥えたる平地は家畜を牧ふ種族に對しては其處に居住する誘惑となりしならん。然れども神の命を受けたればアブラムは『天よりの顯示に背かざりき』。ナホルと其の家族が來りて居住し、且其の偶像に就ける習慣は、アブラムが其處を出づる他の理由となりしならん。又其の父テラが二百五歳にてハラんに於て死にし故に、神の攝理は彼がそこを出ることを容易ならしめたり。創一一・一—三に記せるアブラムの第二の召命の中には四の命令と四の約束ありき。その命令は明白なり、『汝の國を出で、汝の親族に別れ、汝の父の家を離れて、我が汝に示さん其の地に至れ』と。然れど行先の住所は未定なりき。此の未定は其の事情に於てアブラムが服従の上に大困難なりしならん。然れども彼は其の約束の言に因りて大に元氣付けられたり。此の時常の如くに服従せるは其信仰に基けるなり。即ち記して曰く『信仰に由りてアブラハムは、召されしとき嗣業として受くべき地に出で往けとの命に遵ひ、其の往

く所を知らずして出で往けり(來一一・八)と。彼は信頼せし約束に因りて左の四のものを與へられたり。『我汝を大なる國民となさん』。我は『汝を祝み』猶ほ左の言を加へ、『汝は祝福の基となるべし、我は汝を祝する者を祝し、汝を詛ふ者を詛はん』。『我は汝の名を大ならしめん』。最後に『天下の諸の宗族汝によりて福祀を獲ん』と。

右の約束を尙詳細に研究せば、是等もアブラムの信仰を試むるものなりしことを直に會得するなり。彼は他人の國に旅するのみならず當時子なかりければ也。『福祀の基となるべし』てふ約束によりて、其の福祀がアブラム自身に關するものにして、即ち人々の幸と不幸は其のアブラムに對する態度に因る可しとの意なり。また『汝を祝する者』等(原文には復數を用ゆ)と『汝を詛ふ者』(單數なり)との特殊の語によりて、神の恩寵の聖旨は『諸の國、族、國語』など多數の人々を含むものなりと推量することを得べし。又『天下の諸の宗族汝によりて福祀を獲ん』との大約束は、『汝の名を大ならしめん』との個人的約束より遙にまされる所なり。此はアブラムを其の福祀の源とするものにして、曩に約束せられたる最後の救を反復約説し、一層明瞭にしたるものなり。之に因りて見れば全人類は、同先祖より出で、多くの宗族に分れ、又アブラムによりて共有の福祀を受け再び合同せんとするものなりと見ゆ。アブラムの歴史中に繰返せし此の約束は、最初より人間を救ふ神の恩寵の聖旨の全體を含蓄せり。斯くて『神ヤベテを大ならしめ給はん、彼はセムの天幕に居住はん』との預



言は、聖ペテロが徒三・二五に、又聖パウロが加三・八、一四に示せし如く成就せられたり。

アブラムがロト及び其の家族と共に「ハラシを出でたる時」は七十五歳なりき。アブラムは永くダマスコに滞留し、其處を支配せしといふ傳説を除けば、聖書に因りて左の事を知るなり。即ち久しき後其の孫ヤコブが爲せし如く右に雄大なるレバノン、左にギレアデの草野とパシヤンの山林を見りて約東の地に入りたり。而して山を越え谷を渉りて遂にモレの平地、即ちシケムの谷にある「モレの橡樹に至れり」。此の地を旅行せし人は此の谷の景色を賞讃せざるはなし。博士ロビンソン曰く、「地は西の方に俄に低く、土黒く肥えて草木鬱蒼たるを見る。谷は一面に野菜畝又は果樹園にして、處々の泉より出づる清流は白玉を轉すが如く滾々として西に流れ、一度此處に杖を曳けば恰も仙寰に入りしが如き感を感じ、パレスチナの中に較ぶべき所なし」と。又或る旅行家は云ふ、「此處に藪なしと雖も、常に新緑あり、樹蔭あり、其は橡樹の蔭にあらず、橄欖樹の蔭にして、其色の鮮に其形の美なるを以て他の樹を顧みるに足らざるなり」と。アブラムが始めて約東の地に入りて留りし所は、モレ（其邊を所有せるカナン人の名を取りて稱せしならん）の平地の或る林なりき。聖書に「其の時にカナン人其の地に住めり」と記せしによりて、此の地は無人の地にあらず、異人種が其の住民たりしや明なり。アブラム此の地に入らんとせば、固く神の約束を信ぜずんば能はざりしなり。此處にエホバ目に見ゆる形を以てアブラムに「顯現れ」、又今カナン人の居る所にて始めて「我汝

の苗裔に此の地を興へん」との約束をなし給へり。茲に於てアブラムは「己に顯現れ給ひしエホバに壇を築けり」。斯く神が見てアブラムに約束し給ひし其の地は、神によつて聖別せられ、又アブラムは他人の國にありながら、信仰を以てエホバの約束を眞とせり。

アブラムは多分家畜を養ふ牧草を得んが爲め、シケムを離れて南方に方り、「ペテルの東の山に移りて」、ペテルとアイの間に「其の天幕を張れり」。ロビンソン氏曰く「此の邊は其の國中にて最も秣草の良き所なり」と。スタンレー氏は左の如く之を畫きて曰く「我等は連山中最も高き峰の上に立てり。……其の峰は恰も其の下に岩石勝なる傾斜の上に置かれ、又一方には橄欖の茂る林あり、而して此の高峰は父祖の祭壇の爲に善き基礎となり、又天幕を張るには適當なる蔭ありき。此處よりアブラムとロトが廣く其の國を見渡せしならんと察せらる。自然に而も他に斯く眺望し得る場所其の邊に有ることなし」と。彼等兩人が此處より見て驚きし所は之を次章に述べべし。此處にても亦アブラム「エホバに壇を築けり」。エホバ此處にては目に見ゆる形を以て顯現れ給はざりしかども、アブラムは「エホバの名を頌べり」。暫く此處に留りし後、アブラムは復旅し、「約束の地に在る」賓旅また寄寓者として「尙進みて南に遷れり」。彼が此の地を所有したる標は、たゞ其の旅路に残せし祭壇のみなり。

今や新にアブラムの信仰の試みらるゝ時となれり。彼の信仰は神の國に關しては常に堅固なりし



かども、其の一身上の事に於ては數次失敗したり。當時其の地は饑饉の爲に困難せしかば、斯の如き場合に於て現今のペドウィン族が爲す如く、アブラムと其の家族は、エジプトが常に他國に穀物を輸出する國なるを以て「彼處に下れり」。アブラムが神の命令を受けずして斯く移住するは宜しきに適へりや否やは之を論ぜずと雖も、彼が之に因りて大なる危険に遇へることは勿論なり。父祖等の困難を輕んずべからざるが如く、又其の信仰と能力を過信すべからず。アブラムは「我等と同じ情をもてる人」にして、弱點の人なりき。彼は神の語り給ふ所は之を信じ、信する所は之に従へり。然れど神は未だサライについて明に示し給ひしことなきが故に、其の時代及び其の國の習慣に従ひ、己が意に任せて行へり。創二〇・一三に因れば、彼は初めて其父の家を離るゝ時、其の遇ふ所の國民は「神を畏れざるべければ」、其の妻の故に人己を殺さんことを恐れしに因りて、サライはアブラムの妹なりと言ふことに定めたり。かく欺くことは彼等より見れば、サライが其の近き親族なりしを以て之を妹と稱するも可なりと思はれしなり。是れ必竟吾人も數次なす如く、先づ自己を欺くことに基ける欺瞞にして、其の語りし言は文字通に於ては眞なれども實は偽なりき。然りと雖もアブラムは己の命を助けんとて其の妻を危険に會はしむる程に無情なりしとすべからず。却て之を守るに最も善き道なりと思ひしならん。蓋はもしサライを有名なる族長の妹とせしならば、之を娶らんと欲する者あるとも、先づ手續を行ふ間にアブラムは其の妻と共に逃ぐることを得しならん。此は辯解

の爲に言ふにあらず、此の事件の説明の爲なり。

\* 英國博物館所藏のエジプトの古きパピラス(昔しエジプト人の文書を書くに用ひし一種の紙)は、アブラムの時代より少しく後の物なるが、アブラムがエジプトに入りてかく心配せるは理由なきにあらざることを證明す。其のパピラスには、パロが大匠等の勳によりて、或人の妻を強奪し、又其の夫を殺さんとて兵を遣せしことを記せり。

此處に又聖書の物語はエジプトの碑石によりて確證せらる。それに因れば有名なる外國人が其の家族と臣僕を携へてエジプトに往くことは敢て珍らしからざりき。アブラムの時代の或る碑石は、此の如き家族の來りてパロの前に出で、歓迎せられしことを描出し、其の名、人相及び衣服によりてセムの子孫にして家畜を牧ふ族なることを現す。

× それに記せる「首長」の名はアブシヤと云ひて、「地の父」の義なり。此は「衆多の人の父」なるアブラハムを思出さしむ。エジプトの碑石と聖書との關係は尙次の卷に詳述すべし。

又他の碑石に因れば、かくエジプトに來りし外國人が同國にて最高位に上れることもありき。然ればアブラムは歓迎を受くべかりしならんも、彼の計畫は畫餅に屬し、サライは「パロの家」に召入れられたり。アブラムは王の義兄となりて俄に富めり。此の禮物は不義と耻辱を増し、かども之を拒むに由なく、且既に深入して悔め難きに至れり。又始に彼に恐怖を懷かしめたる不信は、益々深くなりしが如し。アブラムは已に暫く約束の地を棄てしが、今又尙其よりも大なる約束を失はんとす



る危険に會せり。然れどもエホバはアブラムとともに契約の世嗣の母となるべき者を棄て給はず、『大なる災を以てバロと其の家を惱まし給ひしかば、彼等は實際の事情を知るに至れり、恐くサライの口より事實を聞けるならん。此に於て王はアブラムを召して之を叱せしが、アブラムは偶像教徒なる王より之を受けたれば一層耻入りたりしならん。アブラムは默然として其の正理を承認せり。而して神はアブラムの爲に干渉し給ひしかば、バロは彼の諸の所有物を無事に彼に還すことにし、且ヘブルの原文に見ゆるが如く國境まで彼を送りたり。

或る獨逸の著述家が云ひし如く、カナンに饑饉のありしは、アブラムをして約束の地に於ても食物は神の祝福に因ることを認めしめ、『我等の日用の糧を今日も與へ給へ』てふ願を豫め務め習はしめんがためにして、其のエジプトに於る経験も、また此の世と戦はん爲には肉の智慧には力あることなく、救は『人の彼等を虐ぐるを許し給はず、彼等の故によりて王等を懲しめて宜給はく、我が受膏者たちに觸るゝ勿れ、我が預言者たちを害ふ勿れ』(詩一〇五・一四、一五)と曰ひたまふ者より出るを認めしめんが爲なりしなり、即ち之によりて左の二の願をアブラムに教へ給へり。『我等を嘗試にあはせず』と『惡より救ひ出し給へ』との二なり。かくてアブラムはベタルに歸りて、『以前に天幕を張りたる處に至れり、即ち彼が初に其處に築きたる壇のある處なり。彼處にアブラム、エホバの名を頌べり』。此の出來事は或意味に於て、後にイスラエル人の上に取りしことを象徴せり。

即ち彼等はアブラムの時の如く饑饉の爲にエジプトに下り、アブラムの時の如くエジプト人の間に『彼らを恐るゝの念』起りし爲に、エジプトの貨財を携へて其處を出でたり。

## 第十二章

アブラムミロトと相離るゝ、こここ—アブラム、ヘブ

ロンに在るこここ—ソドムの掠奪せらるゝ、こここ—

ロトの救はるゝ、こここ—メルキゼデクに遇ふこここ

(創二三章、一四章)

今迄はアブラム何處に往くにもロトを伴ひしが、今や相離れざるべからざるに至れり。蓋は約束せしメシヤの先祖として、又凡ての信者の父として將來の人々の信仰の目は彼に注がるべければ、アブラムと其の子孫を他の民族と區別する必要ありしなり。神が數次人を導き給ふ場合に於る如く、是れ亦自然の状況に因りて行はれしと見ゆ。又アブラムも眼前の出來事に於て大なる困難を感ぜしならんも、そは其の中に存する神の聖旨を知らざりし爲ならん。其の所有の増加殊にエジプトにて家畜の増加せしによりて、『アブラムの家畜の牧者とロトの家畜の牧者との間に競争ありき』。是れ聖書に記せる如く『カナン人とベリジ人此の時その地に居住みし』によりて、彼等は兄弟の間の『競争』



を目撃せしなるべし。アブラムは此の競争を避けんとて任意に分離すべきことを發案し、ロトが己より年若く又劣りたるに拘らず、ロトに其の好む場所を選定せしめたり。此は唯彼の厚意に因るのみならず、其の住む所の界を定むることを信仰に因りて主に任せたりしなり。

斯て二人はベテルとアイの間の最も高き山上に立ちて見渡せしに、其の景色の美しきは他に比すべき所なく、北はユダヤとサマリアの界なる山々を望み、西南は後にベニヤミンとユダ兩支族の領地となりしものにして、遙にヘブロンに在る傾斜地を眺め、殊に勝景を極めしは東方にして、眼界の盡くる所には淡墨を以て畫きしが如きモアブの山脈あり、山麓は地味頗る肥沃なる谷にしてヨルダン川其の中を貫流し、手近き所はエリコの上の高地なりき。父祖等が此の全地を眺めし時、ヨルダンの谷は熱帯の草木繁茂し、最も美しき中心はソドムの湖(當時は清水なりしならん)の周圍にして、其の眺望はガリラヤの海に似たれども景色と土地の豊饒なることは遙に優れり。ヨルダンの低地とソドムの湖水の邊に繁昌なる邑數多ありて何れも恐るべき淫蕩の街なりき。ロトは四時青々たる夫の樂園の如く美しく、又ナイル河に灌漑されたるエジプトの地方の如き此の土地を見て、其の地の人々の性質如何を顧みず、若くは之を調ぶるの猶豫なく只管之を希望したり。此の如き土地は其の美しきこと地にある物を慕ふ者の眞に望む所なりき。ロトはかゝる人にして、之を選べるによりてアブラムと離れざるべからざる者なりしを實證せり。而して其の往きし路の相異りし如く、其の目的

も亦然りき。然りと雖も神はロトを保護し、其の選擇の苦き結果を受くるに任せ給はざりき。

アブラムは又その時慰めらるることなきにあらざりき。彼多くの人と同じく獨り在りし時こそ殊に慰藉を要せしが、其の目前には比較的荒れたるユダヤの山のみなりしも、エホバは重ねて其の地を彼に與ふことを約束し、且前よりも之を大にし、目の達く限りの地をアブラムと其の「裔に永く」與へ給へり。永くとは無窮との意味にして、ユダヤ人は七十年間バビロンに俘となりしも、又今日までイスメル人は現に千八百年間不信にして諸國に散らされたるも、其の約束の條件は空しくならざりき。神はアブラムの「裔に永く」地を與へんと約束し給へり。其の地と民は神が合せ給ひし者にして、一方は屍の如く荒れ果て、又一方は身體を離れし靈の如くなれども、其の約束の終に成就せらるる時に至れば再び之を合せ給ふべし。而してアブラムはエホバの言を此の如く解せり。彼が信仰を以て約束の地を受けし時、「縦横に其の地を行き巡るべし」と命ぜられたり。かく行き巡る間に世界最古の邑の一なるヘブロンに至り、マムレの林中の橡の大樹の下に天幕を張り、エホバに壇を築けり。此處はアブラムの生涯中斷えざる彼の運動の中心の場所なりしと見ゆ。

その間にロトは彼が選定せし場所に住居を構へたり。その地方はヨシユアの征服の時代に於るカナンの他の所と同じく、多くの小き王の領分に分れたる或る場處に居住したりしが、その小王等は一の邑と附近の土地を領したるものと思はる。此の地は十二年間ケダラオオメルの屬領となり、第十三



年に叛けり。第十四年にケダラオメル及び彼と偕なる三人の王の軍勢は此の地方を過ぎて之を荒し、遂に後に死海となりし所のシデムの谷にて、ヨルダンの低地の五人の王の同盟軍に當り、交戦して勝利を得、カナンカナンの王二人は戦死し、他は皆亂れて遁逃したり。是に於てソドムとゴモラは劫掠せられ、又其の居民等（ロトも其の中にあり）は擄にせられて携へ行かれたり。是はニムロデが建てし此の世の國が兎に角聖書の歴史に於て、神の選民と而もパレステナに於て接觸せし始めなりき。蓋しケダラオメルと其の同盟者等の占領せし土地は後にアツスリヤ、バビロン兩帝國となりし地なればなり。此の故にアブラムの之に干渉すべき必要起れり。其の地は神が彼に與へ給ひし所なるが此處には代々の仇ありき。彼は其の地に於て唯賓旅また寄寓者なれども、神に選ばれて其の地を救ふ者とせられたり。而して其の救の方法と狀況とは其に依て代表せらるるキリストの救の事實を預示せり。

創一〇・一〇 アツスリヤの古碑には聖書の記事を證するエラム國のことを數々記せり。又スミス氏が著せる『バビロン王』の目録の中には、ケダラオメルと其の三人の同盟者の名を挿入せり。

遁逃者敗報をもたらせしかば、アブラムは直に訓練したる家の子三百十八人を率ゐて、ヘブロン近傍を有せし族長たるアネル、エシコル及びママレと聯合して、ケダラオメルと其の同盟者とを追撃したり。彼等は恐く其の勝利を得しが爲に油斷せしか、或は酒食に耽りしか、或は各自の俘虜と戦利品の多きがため隊伍を亂して退却し居りしやも知れず。兎に角敵は少しも危険の迫り來ることを前

以て知らざりしが、アブラムは其の家臣を分ち、夜陰に乗じて四面より攻撃し、大に敵を破り、ダマスコの近邊まで追ひ行きたり。かくして凡ての戦利品と俘虜及びロトをも皆奪回したり。アブラムの軍隊歸りて、後世エルサレムとなりし所の石壇に近きシャベの谷に入りし時、人物も甚だ異り又反對の方位より來れる二人に迎へられたり。即ちヨルダンの方よりケダラオメルのために戦死せし王の位を繼ぎたるソドムの新王は、アブラムに禮を述べ又彼が分捕りし者を贈らんとて來り、又古代のエルサレムなるサレムの高地より祭司にして王なるメルキゼデクは、アブラムを祝し、又「パンと酒」とを以て休養せしめんとて下り來れり。此の會合の爲に此の谷は「王の谷」と稱せられしと見ゆ。後又此處にアブサロムは己の爲に表柱を立てたり（母後一八・一八）。茲に大に異りたる事件次いで起り、其の預表的の意義甚だ著しくして、舊約の預言も新約の預言成就も大に之に感化せられたり。メルキゼデクは流星の如く、不意に偶然に又不思議に顯れて而して又識に見えずなれり。當時の系圖の多きにも係らず、此の人の系圖に就ては毫も記せる處なく、又諸王と其の工の記録の中にも其の名、其の治世、其の生死を記せる所なし。其のアブラムの關係を考ふれば、之を言はざるは意味あることにて、其の理由は預表的なり、即ちキリストに類似する所を代表する爲なりならん。されど聖書中のメルキゼデクの記事は、彼に關して沈黙せるよりも其の人格に於る意味の深きことを示せること著し。其の名は「正義の王」にして、其の政治は「平和の君」の政治なり。其の「祭司」



たるはアブラムの如きにもあらず、『アロンの位に等し』きにもあらず、一種特別なりき。彼はアブラムを祝福せしが、これは彼に地を與ふることを是認したるが如し、乃ちアブラムは『彼に其の諸の物の什分の一を饋れり』。アブラムが斯く『什分の一』を饋るによりてメルキゼデクを祭司とし、又諸の分捕品の什分の一を受くべき有権者なる王と承認せしなり。而してアブラム自己は少も之を取らず、又其の同盟者にも唯『彼等の分』のみを取らしめたり。

茲は此の物語の預表的の意義を論すべき所にあらざれども、其の人物及び其の事件は甚だ緊要にして、全く不問に付するを得ず。此の後メルキゼデクを聖書に記せること二度あり。第一は詩一一〇・四に記せる、『汝はメルキゼデクの狀に等しく永久に祭司たり』てふ預言して、第二は右の言をわれ等の救主に應用したる來七・三にあり。メルキゼデクがキリスト自身にあらざるは、來七・三に記せる如く『神の子の如くに』とあるに因りて明白なり。加之此の言と聖書中の主意とに因りて彼はキリストの預表なりしこと明白なり。是れ所謂兩時代の界の如し、即ちノアに對する契約は殆んど終り、寧ろアブラムに對する契約に變化せんとせり。新約の始に於てヨハネはイエスにつき證せしかども、イエスはヨハネより洗禮を受け給ひし如く、此處にも亦メルキゼデクはアブラムにつき證せしかども、アブラムより什分の一を受けたり。尙ほ我等思ふにメルキゼデクは、當時ハムの子孫たるカナン人の有せしカナン人の地に居住するセムの族の最後の代表者、又『至高き神の祭司』なれば、偶

像教の中にセムの信仰を有する最後の代表者なりとせば、メルキゼデクとアブラムとの關係は一層明白なるべし。之は舊きものが新しきものに移りて愈々發達することにして、その地に住みし最後のセムの代表者が、アブラムの敵を彼の手に『付し給ひし』天地の主なる至高神の名によりて、セムの支配と約束とをアブラムに傳へしものなりき。或人が巧に言ひし如く『アブラムの貴きは其の希望にあり、メルキゼデクの貴きは其の所有にあり』と。メルキゼデクは王にして祭司なりしが、アブラムは唯預言者なり。メルキゼデクは、アブラムには唯約束せられたるに過ぎざる國の正當なる所有者として認められたり。將來は現在に優ること無限なるは事實なれども、そは唯將來のことなりき。メルキゼデクはアブラムを祝し、又己の位を讓ることによりて其の將來の現實を認めしが、アブラムはメルキゼデクに什分の一を饋り、又彼に祝せられんとて身を屈むることに因りて、其の現在の有様を認めたり。セムの位の最後の代表者たるメルキゼデクは、アブラハムの位の最後の代表者としてキリストの表象なりき。メルキゼデクに發せる幼芽、即ちアロンの位の祭司たり、ダビデの位の王たることは漸次發達して、遂に二者キリストに於て見事に一致し、また全備せり。メルキゼデクは唯影にして預表のみなりしが、キリストは其の實物にして本體なり。聖書に其の系圖と年齢を現す歴史を記せざるは、唯其の沈黙によりてイエスが天より來る者なるを示さんがためなりき。又ソドムの王が與へんとせし分捕品を拒むに用ひし言に因りて、直に其の威光と位を證せしアブラム



は、メルキゼデクの祝福に因り其の與へし靈なる嗣業を受けんとて彼の前に平伏せしことも、亦然る故なりき。メルキゼデクが神を『天地の主なる至高神』と稱し、又アブラムは此の名稱に、彼が代表者たり媒介者たりし恩寵の契約を示す所の、『エホバ』てふ新しき名を加へて、『天地の主なる至高神エホバ』と稱へしは、注意深き研究者の必ず認むる所ならん。アブラムがソドムの王の與へんとせし物を拒みて、『人を我に與へ、物を汝に取れ』と云ひしは、洵に其の全體の事件に適へり。眞神がアブラムに戰を命じ、且つ之を勝たしめ給ひしはソドムの王の同盟者としてにあらす、アブラム及び彼に屬する者等の位置を證せんが爲なりき。斯して此の二者離れて永く相合はず。ソドムの王は將に來らんとする罰を受け、サレムの王は既に始まらんとする更に善き約束の嗣業を待つこととなれり。

第十三章

アブラハムの『子孫』につきての二重の約束—イ

シマエルの事—エホバがアブラハムを訪ね給ふ事—ソドムの滅亡するこゝ—アブラハム、ゲラルに宿るこゝ—アビメレクと約束を結ぶこゝ

(創一五章—二〇章、二一章二二—三四)

繁盛の時期の次に困難の時期の來ること數々あり。アブラムは實にアツスリアの王等に勝ちしと雖も却て之によりて其の怨を招き、又カナンの人々に妬まれしも敢て怪むに足らず。彼は唯他國にある旅人にして、神の約束の外所有なく、且之を遺すべき後嗣もなし。此の場合に於て『エホバの言異象の中にアブラムに臨みて』曰く『我は汝の干槽なり。汝の資は甚だ大なるべし』と、即ち神は凡ての敵より汝を護り、且汝の信仰の喜を以て満さるゝ原因なりとの意義なり。彼之に應へて其の子なきことと、之に因りて僕エリエゼルが唯一の後嗣となるべきことにつき敢て疑ふことをせず。唯問はんとて心の儘に其の要求と其の悲を神に告げしは當然にして、兒童の如くなりき。然るにエホバは彼の豫期に反して、其の子孫が星の如く多くして數へ難くなるべきことを斷言し給ひしかば、『アブラム、エホバを信ず、エホバ之を彼の義となしたまへり』。右の言は其の物語に於て著しき地位を有し、次の事實即ちアブラムが神の言を眞實とするのみならず、其の契約の神エホバに信頼することを認めしむ。かく兒童の如く見ずして信すること、及び其の絶対に信任を置くことは甚だ感すべく、又崇高なり。其の後數千年間神の教會の信仰の標準とせられたり。かく活ける神を信する事よりしてアブラムの柔順は生れたり。彼の行爲はアロンの杖の如く、『至上者の本なる隠れたる所』に於て芽をふき、蕾をなし花咲きて果を結ぶに至れり。

茲に於てエホバ其の信仰を堅くせんとしてアブラムに記號と證とを與へたまひしが、此は未だ實際



ならざるも唯其の信仰に因りて實際たるを信じたり。されば神はアブラムと約束を結び給へり。是故にエホバ三歳の牝牛と三歳の牝山羊と三歳の牡羊と山鳩及び雛き鳩を齎すことを命じ給へり。此の諸の供物(後に供物に用ひし種類の代表なりき)を「中より割き、其の割きたる者を各相對はしめて置けり」。此は契約を結ぶ習慣に従ひて双方其の割きたる者の中を通りて互に一致せしことを現せり。然るに此處にて始に其の割きたる供物の中を通る者なきが如し。アブラム思ふに終日獨にて待ち、其の死體の上に舞ひ下る鷲鳥を驅はらへり。肉眼よりすれば然く見えたり。而して「日の没る頃、アブラム酣く睡りしが、其の大に暗きを覺えて懼れたり」。供物の三年の齡と彼が終日さびしくして待ち草臥れたること、鷲鳥の飛び廻ること、暗き夜の恐懼等は皆神が今預言し給ふ次の事の記號なり。即ちアブラムの子孫が三代エジプトにて惱まれ、四代に及び當時のカナン人の惡の貫盈るにより歸りて其の約束の地を受くることなり。アブラム自身は「安然に其の父祖の所に」行くべし。而して契約は普通の如く双方共に割きたる者の中を通るによつて結ばれず、エホバのみそこを通り給へり。そは契約の恩寵によるものにして、一方即ち神のみ其の義務を負担し給ふて、他の一方は凡ての利益を受くるのみなればなり。

アブラムは始めて其の割きたる者の中を通る烟と火燄の出る爐、即ち雲に包まれたる神の榮光を見たり。此は後にモーセが棘の裏に、又イスラエル人が荒野を通る間に見、又後に幕屋の中、贖罪所

の上、ケルビムの中に顯れしものと同一なり。此は神が始めてアブラムに顯れ給ひしこと、彼と結び給ひし契約の第一段にして、又神の榮光が始めて顯れしことなりき。之と同時にアブラム個人に對する約束は擴張せられ、又約束の地の界を西方ナイル河より東方ユフラテ河に至るまでと明言せられたり。聖地の境界はヘブル王國の最も盛なる時代と雖も未だ此處まで及びしことなきを見るべし。

神がアブラムに對する約束は甚だ貴重なれども、其の約束せし子孫の母となるべきものは未だ定かに示されず。之に就てサライは神の命令を待たず、忍耐なくして速にせんとて自己の考に従ひて行へり。如 此其の意を行ふは神の聖旨に適はず、悲歎と失望を生じたり。アブラムがカナンに入りしより十年、サライは約束の後嗣を生む望みあらざるを以て、其の時と土地との風習に従ひて、夫にエジプト人なる侍女ハガルを娶らしめて子を得んと欲したり。而して此の過失は家庭に於る不和と凌辱と且つハガルが逃走する結果を生じたり。然れども主が其の恩に因りて干渉し給はざりしならば、其の終局の結果は如何なりならん。其の逃走せし侍女は、己が生國エジプトに至る途中の曠野にて泉の傍に休みけるに、契約の使者自ら顯れ給ひて其の女主人に歸るべきを命じ、其の生まんとする子に、其の時より今に至るまで其の子孫の特性たる自由と獨立を約束し、其の子にイシマエル(神聴知)の名を付け、其の血統と彼を守る攝理に因りてアブラムの神に屬せしめたり。ハガルも亦其處にて始めて神を認めて、見給ふ神、活ける神と知りたり。故に此の後其處の泉を「我を



見る活くる者の井」と呼べり。かく信仰を以て神を認むることは深く吾人の心に感ずる所にして、凡ての事件に關し常に之を思ひ出すべし。

かくてハガルはアブラムの家に歸りてイシマエルを生みしが、是よりアブラムの信仰を強く試むべき時となれり。滿十三年を過ぎても神よりは確としたる啓示も與へられざりき。此の間にイシマエルは漸次成長したれば、神に預定せられざりしことは知りしならんも、不知不識の間にアブラムは殆んど彼を其の後嗣となさんとするに至れり。此の時アブラム年已に九十九歳に及びサライも亦老いぬ。蓋し信仰を以て其の希望する所を直接に神より受けんとせば、凡て普通の望を棄て、又其の後嗣は絶対的約束の子にあらんば不可なり。爰に於て神は目に見ゆる形を以て嘗て結びし契約を堅くし、又成就せんがために再びアブラムに顯れて、「汝我が前に行みて完全かれよ」と訓戒を與へ給へり、此は約束以後にあるべき所にして其の以前には決してある可らず。神はこの堅くせし契約に就ける記號と證として、アブラムと其の子孫が割禮てふ式を受くることを命じ給ひ、又之と同時にアブラム(向上の父(貴き長の意))をアブラハム(衆多の人の父)と呼び更へ、サライ(君らしき)をサラ(女君)と呼び更へ給へり。此はこの二人に因りて其の約束が成就せられ、また選民の生れんとすることを示せるなり。アブラハムは之を聞きて甚だ驚き、且喜び謙りて禮拜するが如く、「俯伏して其の事情を考へ」晒ひたり。此はカルピンの云ひし如く疑と不信のためにあらずして、歡

喜と驚愕の爲なりき。而して永く其の驚愕を思ひ出さんが爲に約束の子をイサク(晒)と名づけられたり。後世サウロは異邦人に傳道を始めたる時其の名を更へてパウロと稱せしが(其の働の初果を記念する爲なりしならん)、此處にも亦イシマエルが始めて召さるゝ時に三人の新しき名あり。此は凡ての事の根原たる神の力と約束を受けし單純なる信仰を表す所なり。約束の後嗣は實にサラが生む子ならざるべからざれども、エホバはイシマエルをも守り、「大に其の子孫を増し、又」彼を大なる國民となすべし。其の日より以後割禮は神とアブラハムとの契約の記號として存せり。嬰兒生れて滿七日の後即ち八日目、新らしき生涯の初に之を爲す。爾後總てユダヤの男子が割禮を受くるは、三千餘年前に神がアブラハムと結び給ひし此の約束の活ける證なり。されど此はキリスト・イエスに於て其の契約が一層完全に成就せらるゝ事を預示せり。キリストにありては心の割禮の外に割禮を受くる必要なきなり。

「我わが契約を立てん(創一七・二)と」契約をなす(一五・一八)とは全く相異れり。後者は契約を結ぶとの意にして、前者は契約を成就すとの義なり。

× サラは茂るとの意義なりとの説あり。

アブラハムの信仰はかく鍛煉せられ又祝福せられ居りしが、ロトが住居に選びし所に居たる「悪しき人と人を欺く者」とは益々惡に進み、急速に其の罪惡の量を充しつゝありき。其の義罰は彼等



の頭上を暗雲の如くに掩ひたりしが、今や將に雷雨たらんとす。アブラハムは「日の熱き時刻天幕の入口に坐しむたりし」に、エホバ復形を爲して顯現れ給へり。此の度は三人の旅人の如く見えしかば、父祖は己が住家に於て休養せしめんとて急ぎ迎へしが、其の實、天の客は主自身(創一八・一三を見よ)と其の義、罰を執行せんとする二人の使なりき。恐らくアブラハムは其の天の客を見覚え居たりしならんも、彼は其の特性なる謙遜と慎重とを以て彼等を顯れし儘の者として叮嚀に待遇せり。其の來り給ひし目的は一はサラに對し、一はアブラハムに對してなり。サラが其の約束せし子の母とならんには先づ自らも信仰なからざるべからず(來一一・一一)。アブラハムは神の顯現れたまひしことを其の妻サラに報せしが、サラは未だ信ぜざりしならん。而して此の三人が最初に問ひしはサラのことなりき。今其の子を生むことについての使命は彼女に直接に告げられしが、サラの不信は其の晒によりて現れしかば、先づ之を譴責せられ、次に不信を取り除かれたり。第一の目的に達せしかば、三人はアブラハムを伴ひてソドムに進み行けり。之よりエホバ自ら父祖に他の目的を示し給へり(創一八・一七)。これは左の二の理由に因るものにして、低地の邑の將に亡されんとすることをアブラハムに示せり。第一、アブラハムは約束を嗣ぐものなるがため、第二、アブラハムが『其の後の見孫と家族とに命じ、エホバの道を守りて公義と公道を行はしめん爲』なりき。最後の言に因りてソドムの罰をアブラハムに示し給ひしは、イスラエルの警戒となさんがためなりと推量さる。

然れど是れ單に一時的の罰と爲すべからず。此等低地の邑が長に荒地となりしは、又常にイスラエルに對して罪惡の結果を示し、且未來の審判を代表するものと謂ふべし。舊新兩約共にソドムとゴモラが滅びたるは右の教訓を現すものなりとす。而して神は已に其の地をアブラハムと其の子孫に與へ給ひしが故に、アブラハムは其の地の或部分が將に亡びんとすることの甚しきを知り、又萬民の祝福の媒介となるものとして、前には之を助けんが爲に戰はんことを依頼せられしが、今は之を救はんとて祈ることを許されしは當然なり。是故に神は其の來らんとする審判を示し、又アブラハムに執奏して祈ることを許し給ひしは、神とアブラハムとの親しき交際に因るにあらず、又アブラハムの甥、ロトが其の災難に罹るが故にもあらず、唯正しく神の契約に適へるがためなり。ロトは矜恤を受けしと雖も私慾と罪惡とによりて、此の世の分を選びし結果を免るゝこと能はずりき。彼は人の富と喜樂は『所有の豐なるには因らざる』ことを再び悟らざるべからず。アブラハムが信仰を以て懇願せしは、眞誠なる祈の特性は敬虔なる『望の切なる』ことを想起さしむるが(路一一・八)、神はアブラハムの祈を聽容れ給ふて、もし其の邑の中に十人の義人を看ば滅さざるべしと約束し給へり。然るに二人の使が其處の人々を試みし結果は意ひの外甚だしかりき。ソドムの終局の罪惡の短き夜は明け、モアブの山に曙光を見しかば、使は殆んど強ひてロトと其の家族に其の滅されんとする邑を離れしめたり。ロトの妻は痛く其の地を離るゝを惜みて後を顧みれば、其の



審判に與りて鹽の柱となりぬ。この事實は死海の南端にある山にて行はれしとの傳説あれども、人の思考を感亂せしむる多くの傳説の如く、是も亦實際に基かざるものなり。其の邑々の受けし罰は、聖書によれば其の地方を全滅せしめたる「エホバの所より即ち天より雨りし硫黄と火」なりき。此の物語は近來カノン・トリストラムが其の場所に於て研究せしところによりて、文字通りに確證せられたり。死海の周囲の地には硫黄と地瀝青多く、雷火の爲に大火を起し、又同時に地震ありて、尙燃焼すべき物を地下より噴出せしならん。全面より立ち昇る火烟は、アブラハムが前夜エホバに懇願せし「ヘブロン」の彼方の山に立ちて見たる其の如く、其の烟の柱が天に冲する大なる爐の如くなりき。死海の底は少尉リンチ氏の統率せし米國の探險隊が特別に研究せし所なるが、其の測量によれば右は二の湖水にして、一は深さ十三呎、一は千三百呎なり。前者は滅されし邑の趾にして、後者は其の邑に沿ひたる清水の湖なりしならん。果して然りとせば、其の災難は火山の作用にて生ぜしものなりとの説あれども、彼の天より來りし罰に因りて如何なる地質上の變化ありしにもせよ、最も信用すべき諸説は低地の邑々が火山の作用に因りて埋れたりとする説を打消して、此の災難に就て聖書に記せる物語を文字通りに解釋することに一致せり。

斯る大なる刑罰ありしにも拘らず、最も密接に之に與りし者が其の感動を受けしことの少かりしは甚だ遺憾にして又宜しく學ぶべき所なり。ロトと其の女等はソドムより遠く離れざる小邑ゾアル

に退くことを許されたり。彼等は信仰弱きによりて將に罰を受けんとする己の邑を離るゝことを惜みしが、今又ゾアルは安然なりとの約束をも、信仰弱きがために信すること能はずして此處をも出でたり。加之尙之よりも甚しく又惡むべき罪に陥り、其の結果としてイスラエル人の歴代の敵たるモアブとアンモンの先祖生れたり(申二三・三、四)。アブラハムはかゝる罰を受けし場所を厭ひ、又其の群の爲に尙善き牧場を求めんとてマムレの地方を離れ、南東に向ひて旅し、ペリシテ人の地に於てゲラルの王アビメレクの領分に居住せり。アビメレクてふ名はパロ(創二六・一、八參照)と同じく王の名稱なりと思はるれ共、此の人は聖書によればパロと大に異り、唯正直誠實なるのみならず敬神の人なりしと見ゆ。是故にアブラハムは嘗てエジプトに於て己の生命を助けんとて、其の妻を妹とせし虚偽を茲に再び行ひしかば、神は直にアビメレクに現れ、夢に其の事實を示し給へり。之に因りてアビメレクは其の知らざるにもせよ、殆んど犯さんとせし罪を急ぎ償はんとせり。此の異邦人なる王に比すれば、アブラハムは眞に劣れる地位にありて唯其の信仰の弱きを白狀するの外推誘るべき様なし。然るに神がアビメレクに示し給ひし如く、アブラハムは其の信仰弱きに拘らず「預言者」なれば、已に前に引用せし如く、「神は人の彼等を虐ぐるをゆるし給はず、彼等の故に因りて王等を懲しめて宣給はく、我が受膏者等に觸るゝ勿れ、我が預言者等をそこなふ勿れ」(代上一六・二一、二二)と。アビメレクが結婚によりてアブラハムと結ばんとせし同盟は、其の後間もなく兩者の間に



正式に契約を爲すに至り、牝の羔七(聖き數なり)を神に献げたり。此は個人的にあらすして國民的の契約なるを現さんが爲に、彼は其の軍勢の長ビコルを伴ひ、アブラハムに「汝何事を爲すにも神汝と借に在す」てふことを明言せり(創二一・二二)。而してアビメレクは其の「臣僕等に」此の事を皆語りければ、「人々甚く懼れたり」とあるに因りて王も民も同意せしこと明なり。右に因りて考ふれば、アブラハムが永くベリシテ人の地に住み、アビメレクと共にベエルシバ(盟約の井或は七の牝の羔の井)の傍に天幕を張れるは怪むに足らず、彼は再び「永遠に在す神エホバの名を彼處にて頌べり」。

第十四章

イサクの生るゝここ—イシマエルの逐出さるゝここ—神イサクを献ぐることを命じて

アブラハムの信仰を試み給ふここ—サラの死するここ—アブラハムの死するここ

(創二一章—二五・一八)

アブラハムに對する大契約の成就せらるべき時は遂に至れり。イサクが生れし時、父祖は一百歳、サラは九十歳なりき。神の目的は明白にして、或はアブラハムの信仰を鍛煉し、又堅くし、或は約

束を嗣ぐ者と與へらるゝは超自然なることを明にせんが爲に、成るべく其の事の起る迄の間を延ばす目的なりしなり。已に述べし如く其の子の名は此の事實を長く記憶せんが爲なりしなり。サラ喜びて曰く「神我を笑はしめ給ふ、聞く者皆我と共に笑はん」神我が爲に笑を備へ給へば、之を聞く者喜んで笑はん」と。然ればアブラハムの笑ふは信じて驚ける笑にして、サラの今の笑は元の信仰の弱きに於るものと異り、信じて感謝する笑なり。而して尙他に笑の種類あり。之は信仰にも疑にも基かず、不信侮蔑の笑にして之も亦當然の報を受くべきものなり。「アブラハム神の命じ給ひし如く(創一七・二二)八日に其の子イサクに割禮を行へり」イサクの乳を離るゝ日にアブラハム「當時の習慣に従ひて」大なる饗宴を設けたりしが、其の子の年或は一歳なりしや、又はヨセファスの説の如く三歳なりしやは知るべからずと雖も、イシマエルは少くとも十五歳乃至十七歳の青年なりしならん。記して曰く「サラ、エジプト人ハガルがアブラハムに生みたる子の笑ふを見たり」と。之に就て或る獨逸人は記して曰ふ、「聖き笑の本なるイサクを不聖なる笑談と妄なる語の種として之を冷笑し、此の如く小くして薄弱なるイサクは、衆多の國民の父となるべけんやと云ひしは、其の肉體上の卓越に基ける不信猜忌と高慢の故なりき。彼は「エホバに豈に爲し難きことあらんや」てふ言を理會し得ざれば、斯る小き原因より其程の大結果のあり得べしと信するを大に可笑しく思ひしなり」。彼の使徒も左の言により、イシマエルの行爲を語りし時に右の意味に解せしこと疑ひなし。曰く「その



時肉によりて生れし者、御靈によりて生れし者を責めし如く云々」と(加四・二九)。猜忌の爲にあらす、右の故に因りてサラは其の婢と其の子とを「逐ひ出」さんことを要求したれども、アブラハムはサラの動機を誤解したれば、明に神に命ぜらるゝまで親子たるの情に於て猶豫したり。イシマエルを逐ひ出すは唯彼が不適任なるによるのみならず、神の約束を嗣ぐ者を他人より聖別するが爲にも必要なりしが、尙又神の命に従ひて凡てのこと、即ち自然なる親たるの愛さへも棄つる様信仰を鍛煉せらるべく、アブラハム自身のためにも必要なりき。神は其の恩寵によりてイシマエルが「一の國」となる様特別なる約束によりて彼の試を容易ならしめ給ひたり。然ればハガルと其の子は、旅路に必要なパンと水の外何物をも携へずして逐ひ出されたり。此はアブラハムの信仰を試みる爲にして、彼等の欠乏もまた唯暫くの間のみなりき。後に聖書に記せる如くアブラハムは、其の妾等(ハガルとケトラ)の子に己の死するに先つて多くの「物」を興へたり(創二五・六)。又其の葬らるゝ時、イシマエルも彼の子としてイサクと共に父に對する最後の禮をなしたり(創二五・九)。

已に逐ひ出されてハガルと其の子は、多分エジプトに往かんとしてベエルシバの曠野に彷徨ひたりしが、斯る所を旅行する者のよく遭遇する危険に遇へり。即ち水途に盡きて、子は母よりも先に衰へしが、母の勇氣と忍耐も盡果て遂に絶望に歸せり。今までは其の子を伴ひたりしが此に至つて「子を灌木の下に置き」、彼の死の苦痛を見るに忍びず、「遙に行き」、然りながら達し易き距離に居りぬ。

斯く相備ひて坐し聲をあげて泣けり。神はハガルの泣聲の故にあらすしてアブラハムの子の聲を聞き給ひて、ハガルに水の井を示し給ふ。此の度は前と異り「エホバの化身」にあらすして「神の使」なりき。又ハガルを將來に強からしめんとて、已にイシマエルに就てアブラハムに爲せし約束を更にハガルに對して反復し給へり。この約束は眞に優に成就せられたり。此の青年はパレスチナとホレブ山の間の「バランの曠野」てふ廣大なる地方に住みしが、其の地は今に至るまで其の子孫たるベドイン・アラブ人の平穩なる領分なり。

アブラハムが其の子イシマエルを「逐出す」は甚だ苦き試なりしかども、唯其の信仰と柔順とを尙嚴重に試みらるゝ準備なりき。これ迄神が遇ひ又教導し給ふ所は、アブラハムが漸次信仰の生活を送る中に、終局の高く峻しき坂の如き試を能く受け得る様に準備せしめ給ふことにして、聖書の中に無二無比にして、宛も唯一人のみ登りたる大なる峰の如し。然れども實は然らず、蓋は凡てのことをなし、又遙にアブラハムに優りたることをなし、又父祖の供物は唯その預表たるに過ぎざりし實の供物を献げ給ひし、「アブラハムの裔なる」キリストが歩み給ひし尙高くして天に達する峰ありき。又主キリスト自ら曰ひ給ひし如く、アブラハムがキリストの日を見て(約八・五十六)「喜べる」は、モリア山(神が眞に預め備へ給ふ山といふ意)に於て其の子を献げんとせし時なりしならん。「金の火に試さるゝ」が如くに受けざる可らざるアブラハムの信仰の鍛煉即ち「試」は、神がイサク



を燔祭として献ぐる様命じ給ふに因りて來れり。此の試は父祖の愁歎を毫も假借する所なく苦を與へつつ、『汝の子汝の愛する獨子を携ふべし』と明言し、之を慰めんが爲に救の約束を加へ給ふことなかりき。アブラハムが始めて其の父の家を離るゝことを命ぜられし時は、行く先の未定なるに因る困難ありしが、今この信仰の最後の試にも亦同じ困難を見たり。『モリアの地』に至るべしとのみ命ぜられしが、其處に至れば神は何の山の上に其の奇異なる『燔祭』を携ふべきやを示し給ふべかりしなり。ルーテルがその獨特なる簡易なる言葉にて説明せし如く、普通の人情に照して之を考ふれば、或は神が約束を破り、或は此の命令は神よりにあらずして、惡魔より出しものと思はるべしと雖も、この困難に於ては常の如く、『凡ての念を虜にしてキリストに服はしむる』の結果に外なかりしなり。アブラハムは神の言を『疑はず』、『信仰により強くなりて』『思へらく』(未だ知るにあらずと雖も)『神は死人の中より之を甦へらすることを得給ふと、乃ち死より之を受けしが如くなりき』。吾人は其の結果を知れりと雖も、それがために此の非常なる試の苦を輕んずべからず。アブラハムは其の結果に就て示さるゝことなく、又目前の義務の外知ることもなかりき。其の頼とする所は唯前の約束と又契約を結びし神、即ち今此の燔祭を献ぐることを命じ給ふ者の特性と信實との外なかりしなり。其の困難は甚だしかりしかども、暫時即ち一夜のみなりき。其の翌日『血肉と謀らず』、二人の少者と其の子イサクを携へ、『モリアの地』に至りたり。當時のイサクの年齢を計り知る材料なしと

雖も、ヨセファスの計算に従ひ二十五年とせば、聖書の物語に因りて我等の察する所より多きに似たり。ペエルシバより二日路を行き、三日目に初めてエルサレムの周圍にある山を見たり。又昔し南より上り來る路の高き所より前方に起伏せる丘陵を隔て、後年殿の建ちし山を見るを得たり。これ即ち『モリアの地』にして、其の上こそはイサクを献げんとせし處なり。アブラハムは二人の少者を殘し、父子崇拜をなせし後、信仰によりて勝利を疑はず之を豫期して『復歸らん』とて、寂しき道を偕に進み、イサクは柴薪、アブラハムは火と刀を執りて、『二人偕に往けり。イサク父アブラハムに語りて父よと曰ふ。彼答へて子よ我此處にありといひければ、イサク即ち言ふ火と柴薪は有り、然れど燔祭の羔は何處にあるや。アブラハム言ひけるは、子よ神自ら燔祭の羔を備へ給はんと。二人偕に進み行けり』。其の豫定の所に到らざる前には此の外に語合へることなし。やがて其の處に到りしかばアブラハム、『壇を築き、柴薪を臚列べ、イサクを縛りて之を壇の柴薪の上に置せたり』。已に刀を執りて手を舒べたれば、エホバの使者即ち契約の使者其の手を捕へたり。アブラハムの信仰は已に十分に試みられ、又全備せられたり。『林叢に繋りたる牡綿羊』、『其の子の代りに燔祭』となるべく準備せられ居たり。又アブラハムに對して以前の約束は重ねて結ばれ、且擴張せられしのみならず、約束の上に『誓を加へ給へり。これ神の誑ること能はぬ二つの變らぬものによりて……強き獎勵を與へんためなりしなり』。『夫れ神はアブラハムに約し給ふとき、指して誓ふべき己より大なる者な



きが故に、己を指して誓ひて言ひ給へり(來六・一三三)。此の「誓」は父祖等の歴史中無二なる所に於て、又後に之を引用する所多く(創二四・七、二六・三、五〇・二四、出一三・五、一一、三三・一等)、ルーラルが云ひし如く、詩八九・三五、一一〇・四、一三二・一一に「誓を立て、」ダビデに約束し給ひし一切のもの、流れ出づる源なりき。アブラハムが其の處を「エホバエレ」(エホバ見給ふ或はエホバ備へ給ふ)と稱せしは怪むに足らず。蓋エホバは吾人の知らざる凡ての事を吾人の爲に見、又備へ給へばなり。後世この山の上に神の殿は建てられ、神に受容れらるゝ犠牲の烟の其處より上りしことを思出せば、神の靈に感ぜし聖書の記者の左の説明を善く理解し得べし。曰く「是に緣りて今日もなほ人々山にエホバ預備へ給はん(或はエホバ見給はん)と云ふ」と。即ち此所は神の見給ひ又見られ給ふ所にしてモリアてふ名は之に基きたり。

尙進むに先ち此の事件をアブラハム、イサク又カナン人等との關係に照して、其の預表的の意味をも研究せざるべからず。聖書の此の物語の眞實なることを承認せざる或る獨逸の著述家も、アブラハムの信仰がこの歴史の深き意味に感化せられしことを多少承諾せざるを得ざりき。彼記して曰く「是迄は永く約束せられたる此の貴き賜たるイサクも、アブラハムに對して唯肉體上の幸なりき。サラの子なりと雖も他の子と同じく其の家に於て生れ又養育せられたり。其の生れし後アブラハムは彼の爲に信仰上の戦の苦を味ひしことなかりしと雖も、何の祝福も皆信仰上の戦を経たる後に初

めて靈なる幸又永久的なる幸となるなり」と。アブラハムは神の命令に従ひて國も親族も家庭も亦イシマエルに對する親子の愛情をも棄てたり。イサクをも靈に於て復之を受けんが爲に肉體に於ては一旦棄てざる可らず。即ち唯「其の獨子、其の宿望の目的のみならず、其の生涯の希望、其の老年の樂」、最も愛せし所の者のみならず、凡ての約束を嗣ぐ者をも棄てざるべからず。此は全く神に信賴し絶對に神を信仰し、神が死よりすら彼を復活し得給ふを疑はざりしがためなりき。かく其の約束の中より肉體上の部分全く取除かれ、アブラハムの信仰全備せられ、又其の愛は潔められたり。此の事件はイサクに對しても大切なる意味ありたるなり。蓋彼が其の父の縛るに任せて壇の上に置かれし時に、アブラハムの心を以て心とし、彼の如く信じて眞に自己が約束をつぐ者なるを信じたればなり。而して冢子を聖別することが後に律法に命ぜられ、又一切を主に聖別せざる可らざることを代表する、凡ての冢子を獻ぐることを嚆矢となりしことを忘るべからず。之に含蓄せる斯る大主意に比すれば、カナン人が之に因りて認め得し所は寧ろ少々なりしならん。而して神は人間が絶望の極、罪を贖はんとて最愛の子を獻ぐる代に大に異なる供物即ち動物を獻ぐることを許し給ひしは、當地の諸山の上にて現に残酷にも人を獻ぐる時なりしことを忘るべからず。然れども神自ら其の愛子、其の生み給へる獨子を我等の爲に與へ給へり。又イサクの獻げられしは之を光榮ある預表者たらしめんがためなりき。またアブラハムは此の預表的犠牲を再び死人の中より受けしが、我等は神



がイエス・キリストを死人の中より甦らせ、我等をして彼と共に天の處に坐せしめ給ふ時に、我等は事實上イエス・キリストを受けたるなり。

アブラハムはイサクを献げし後久しく生存したれども、其の間に聖書に記するに足る事件殆んどなし。次に記せるはサラが百二十七歳にして死せることなり。聖書に年齢を記せる婦はサラに限れり。此は彼前二・六に記せる如く、他の凡ての信者との關係に因るなるべし。其の時イサクは三十七歳にして、アブラハムは再びヘbronに居住せり。アブラハムが「ヘテの子孫」より墓地を買ふことの物語は畫の如くに記されたり。即ちアブラハムは其の地にありて賓旅たり寄居者たりしが、後年其の地を所有するに至ることを堅く信ぜしことを著しく現せり。アブラハムが「墓地」に買はんと欲せし野とマクベラの洞穴(二の洞穴、或は分れたる處、或は阪の處)に關する相談は、東洋の習慣に従ひて「邑の門」に集れる公衆の前にてなせり。父祖は「ヘテの子孫」の中に「賓旅なり寄居者なり」と明言し、又「起ち其の地の民に對ひて身を鞠めたり」と聖書に數々繰返し明記せり。之に對してヘテ人はアブラハムが彼等の中にありて「神の如き君」なればとて、始めには各自己が墓地を彼に無償にて與へんとし、マクベラの代金を取らずと云ひしも、遂に其の最高の値を取れり。曰く「我が主よ我に聽き給へ、彼の地は銀四百シケル(凡そ五百圓にして當時に於ては甚だ高價なり)に當る。是は我と汝の間に豈道ふに足らんや」と、之に反してアブラハムは舉止懇懇王者の如く振舞ひ、斯して

其の野と洞穴とを「墓地」として取得せしが、これはアブラハムが永遠に有すべき地に於る唯一の「所有」なりき。然るにかく家族の爲に永遠の墓地を買ふに因りても、彼が神の約束を信ずることを現せり。宛も此の時より千幾百年の後預言者エレミヤがアナトラの田地を買ひて、ユダはパピロンより歸るべしとの約束を信ずることを現したるが如し(耶三二・七、八)。このマクベラの洞穴の中にアブラハム、サラ、イサク、リベカとレアは葬られ、又藥をぬれるヤコブの屍と多分ヨセフの屍も葬られたり。聖地の中の他の場所には斯程貴き遺骸を數多入れたる處なし。また多くの「聖き所」と稱する場所のうち今日疑もなく明示し得るは唯此の所のみなり。其の地が回々教の支配を受けし以後、基督教信者もユダヤ人も之に入ることを許されず。洞穴の上に回々教の堂宇を建てられたり。其の堂宇は四角にして長さ二百呎、巾百十五呎、高さ五、六十呎、其の内に五呎を隔て、二呎半の石柱あり。巨大なる石(其の一は少くとも長さ三十八呎なり)あるを見れば、此の建物はダビデ或はソロモンの時代の物に疑なし。其の内にある寺院は元來基督教會堂なりしならん。其の床下にある洞穴には父祖の墓あり。

サラ死して三年の後、アブラハムは家庭の缺陷を補ひ、又イサクを慰めんとしてイサクの爲に妻を求むることにしたり。此はイサクの事を論ずるに當りて其の詳細を述べし。サラの死せし後三十八年間は別に語るべきことなし。アブラハムは後妻ケトラを娶りて又六人の子を生めりと記せども、



其の何時なりしやは知りがたし。兎に角其の子等の歴史と約束の嗣子の歴史とは交渉なく、彼等は往々聖書に記せる亞刺比亞人の支族の始祖となれり。アブラハムは「遐齡」(百七十五歳即ちイサク生れしより七十五年)に及びて死せり。聖書の意義深き言に因れば、彼「其の民に加はる」と、此は死ぬること、或は葬るてふ言と甚く異りて、先ちて世を去りし人々に再び會ひ、又來世の生命を堅く信ずることを現す言なり。其の子、イサクとイシマエルとが已に老人となり、マクベラの洞穴にある墓の傍に立ちし時、神は左の言を以て凡ての時代の人々に對ひて語り給ふを聞く想ひす。曰く「彼等は皆信仰を懷きて死にたり。未だ約束の物を受けざりしが、遙に之を見て迎へ、地にては旅人また寓れる者なるを言ひ現せり」(來一・二二)と。

## 第十五章

イサクの結婚—エサウとヤコブの生るゝこと

—エサウ家督の權を賣ること—イサク、ゲラ  
ルに在ること—エサウの結婚

(創二四章、二五章一九—二六章)

之より聖書の物語は約束の嗣子たるイサクの傳に移り、尙連續してアブラハムの傳を特色付けた

ると同じ神の待遇を記す。神の約束に關して之を考ふれば、アブラハムはイサクの結婚を甚だ緊要なるものと認めたり。之につきて彼が堅く心に定めし左の二件あり。第一、周圍にあるカナン人の中より妻を娶る可らざること、即ち地を取られんとする者等と約束を結ぶべからず。第二、數々眞實なる神たることを現し給ふエホバの聖意に任せ、表面上大に利益あらんと思はるべき縁をも斷ちて、神が必ず自らイサクの爲に適當なる妻を備へ給ふべしと信じたること是なり。アブラハムの凡ての行爲は右の二の信念に因りて導かれしが、「其の家の年邁なる僕」も亦然りき。此の人はアブラハムが其の意志を達するやう委任したる者にして、概ね其の主人の心を以て心としたる如し。

之より先或るときアブラハムはハランに残せし弟ナホルの子孫の多き由を開けり(創二二・二〇)。アブラハムは今彼の許に「其の凡ての所有を宰る其の家の年邁なる僕」を遣せり。この人は多分ダマスコのエリエゼル(創一五・二)ならんと思はるゝが、其の齡は主人の齡と殆んど異らざりしならん。其の僕が發足する前に、アブラハムは此は契約の要素なればとて、カナン人とは決して縁を結ばず、己の「親族」より妻を迎ふべきことをエホバを指して誓はしめたり。而して其の僕が此の意志を達せん爲には、或はアブラハムの出でし地にイサクが歸るべき必要あらんと答へしかば、アブラハムはそれを神の聖旨に適せざることとして拒絶し、其の信仰に因りて困難を豫期せず安心して凡てを神に任せたり。之に就ては神より新しき默示もなく、又之を要せず。彼は前に示されし神の聖旨を



現今の境遇に應用せり。吾人も亦諸の境遇に於て一々天より新しき默示を受くる必要なく、唯其の聖書に示されたる聖旨を理解し之を應用すべきのみ。

アブラハムの信ぜし所は、其の結果に因りて眞なることを證せられたり。其の僕はハラシに着しければ、神に其の『ゆく途に幸福を降し給はん』ことを祈れり。蓋は神の聖旨を爲すについても特別の幸福を求めざる可らざればなり。邑の外にて其の地の習慣に従ひて婦女等が、黄昏其の家の爲に水汲に出で井の傍に立ちし時、其の旅の目的が達せらるゝや否や、即ち祈が聞入れらるゝや否やの休徴として、曾て其の主人の家に於て常に目撃せる叮嚀なる待遇と親切は、アブラハムの親族にも之あるべしと思起したるは當然なりき。祈の未だ終らざる間に其の答は現れたり。『彼語ふことを終ふる前に二但九・二〇、二一を参照すべし』、アブラハムの弟ナホルの子ペトエルの女リベカ、其の井の傍に駱駝をつれたる他國人の立てる處に來れり。『其の童女は觀るに甚だ美しく』、舉止悠揚なりき。彼は心に定めたる休徴に従ひて水を飲ましめよと願ひしに、其の願に勝りて童女は駱駝にも飲ましめて休徴の如くなしたり。然れども直に其の始めに感じたる印象に捕はれしにあらず、唯其の祈りし如くなりしに因りて、『其の人之を見つめ、エホバが其の途に幸福を降し給ふや否やを知らんとして黙し居たり』。而して猶ほ其の親族の誰なるやを問ひ、又其の待遇に預ることを求むる前に、其の童女の親切に對して善き贈物を與へたり。然るにリベカの答に因りて、エホバが眞直に其の『主人

の兄弟の家に導き給ひし』ことを認めしかば、感に堪へず『伏してエホバを拜みたり』。

これより續いて起る事件の記述は、非常に畫の如くなるのみならず、眞に迫れるものあり。先づリベカ『走せゆきて其の母の家(婦人の居る部屋)に此等の事を告げたり』。其の後リベカの兄ラバンは其の寶玉を見、又リベカが云ひしことを聞きて、馳出で東洋風に其の人を懇ろに招きたりと記せり。然るに多少偶像を拜むラバンが、アブラハムの僕を迎へんとて云ひたる『汝エホバに祝まらる者よ』てふ言は、アブラハムの言、即ち宗教的の言を用ゆる權なき者も之を用ふることあるを思出さしむ。之に反してアブラハムの僕は其の主人の如く態度威儀ありて、又志の堅き者なれば、ペトエルとラバンの待遇を受ける前に、己が任務につき是非の答を懇求せり。否らざれば、如何に勸めらるゝも又懇請せらるゝも、翌日まで滞留を延すことすらも諾せざりき。幸ひリベカの快諾を得たれば僕は翌日カナンに歸れり。歸着の時も亦黄昏なりけるが、其の時イサク『野に出でて默想をなしたりし』が、歸り來る駱駝に遇へり。彼の默想は神との交通の意にして、多分近く行はれんとする己の結婚について神に祈りしならん。リベカは東洋の新婦に適ふ閑雅さを以て其の夫となるべき者を迎へたり。又約束の子の歡喜は、主自ら妻として備へ給ひし者と一になりたる事により満されたり。イサクは其の結婚の時四十歳なりき。

アブラハムは退隱せし後其の子の結婚生活の幸福を見しのみならず、エサウとヤコブが生れし後



十五年生存せり。イサクはカナン人の難杏せる處を離れて、己が性質に適應せる閑靜なるラハイロの井の邊に移れり。イサクとリベカは結婚後二十年を過ぐるも子なかりき、此は約束の嗣子は神の賜にして、信仰に因りて受くる者ならざるべからざることを現さんがためなりしなり。エホバ遂に其の妻の爲にたてしイサクの『祈願』を聞き給へり。之を直譯せば『妻を指して』の祈願なりき。ルイテル曰く『余は人の爲に祈る時、その人のみを我が心に置いて他を思はず、唯一途に其の人を見る』と。凡ての執成の祈は皆然り。リベカ二子を孕みて思ひ煩ふべきこと起りしに因りて、其の故を『エホバに問ひ』如何なる方法にて問ひしか知り難し、神の答に因りて其の子等の『大は小に事へん』と明に告げられたり。此は普通の例と異りて、其の冢子が神の約束に因りてアブラハムの家族に與へ給ひし家督の權を嗣がすとの意義なり。次男を長男に代ふるは神の爲し給ひし先例に従ひしなれども、同じ兩親より生れたる所に於ては怪しと思へり。リベカが其の間の結果を夫に知らしめ、又後にエサウもヤコブも共に之を聞きしことを信するは、將來の歴史を理解せん爲に當に合理的なるのみならず最も肝要なる所なり。然らずんばヤコブと其の母が慣例に従はずして家督の權を獲らんと企つる理由他にあることなし。其の二人の子生れしに、兄は『赤くして林中裘の如し』、因りてエサウ(毛多しの意)と名け、弟は『其の手にエサウの踵を持れる』が故にヤコブ(踵を持る者の意)と云へり。踵を持る者は他人を躓かしむる故に、『推除者』(創二七・三六)を表す爲に其の名となれり。

さて二人の子生長せしが彼等の状態は其の性質を現せり。エサウは粗暴にして日常山野を徘徊し、狩獵を好みて業とし、イシマエルに似たりしが、ヤコブは温順にして家庭に在りて樂を求めたり。世に幾多の例ある如くイサクとリベカは各自己の性質に似ざる子を他よりも鐘愛せり。温和にして内氣なるイサクは勇敢にして體格強壯に、山野を跋渉する長男を愛せしが、リベカは己の活潑なるに反して温順なるヤコブを愛したり。實はエサウは其の祝福を眞に失へることを知りし時に、涙を流し徒に悔いしことに因りて現れし如く、弱く又氣塞ぎ易かりしが、ヤコブは其の母の如く性急にして自己の考に従ひて實行する者なりき。此の四人は何れも神が二人の子の生れざる間に、ヤコブを約束の嗣子に預定し給ひしことを知りしに相違なしと雖も、イサクはエサウを愛するに因りて神の預定に任せることに躊躇せしが、リベカとヤコブは其の性急に因りて、神の定め給ひし時と之を成就し給ふことを信仰を以て待つよりも、自己の考に従ひて神の約束を成就せしめんとせり。かくてヤコブは其の機會を窺ひしに、幾日も過ぎざるに其の兄より利を得る機會を得たり。エサウ獵より歸りて飢ゑ且つ『慥れ』居りしかば、現今にてもスリヤ及エジプトに於て嗜好せらるる物なる扁豆の羹を見て、己の慾に克つこと能はずして、其の『紅羹』の爲に家督の權を鬻り。此の事柄はライトフート氏が云ひしごとく、エサウが己の慾に任する性質の爲のみならず、其の地に飢饉始まりし時なるを思ひ出せば理解し易かるべし。直後に『其の國に饑饉ありければ』(創二六・一)と記せり。之は



アブラハムの時の飢饉よりも甚だしくして、イサクは之が爲に暫くカナンを離れたり。エサウはその生涯の中非常に重大なりし此の事件のありし後、其の家督の權を譲りたる『紅羹』に因みて、東洋の國風に從ひエドム(紅)と綽名せらるゝに至れり。

右の事件に於る二人の兄弟の行爲に就ては、聖書にヤコブの行爲を正しと記さざることを認むべし。例の如く唯其の事實を述べて敢て之に解釋を加ふることなし。將來ヤコブが其の家より離れ、永く他國に於て僕として勞働の困難を爲せるは之に對する充分なる神の註解なるが如し。ヤコブが其の後家督の權を買ひたることを發言せしことなきは怪むに及ばず。エサウの行爲については唯一の外我等の取るべき説なかるべし。ヤコブはエサウに不法を強ひ、エサウの飢饉を利用せしが故に、エサウを正しと思ふ者あるべけれども、實は然らず。ヤコブが買はんと欲し又エサウが賣らんと思ひし『家督の權』は、後代に於ては親の所有を分つ時二倍を得べき權なりしが(申二二・一七)、父祖の時に於ては家族を『掌る』權、殊にアブラハムに因りて萬民に及ぼすべき靈の祝福(創二七・二七、二九)と、カナンの地を嗣ぐこと、及エホバと契約の交際をなす權(創二八・四)なりき。エサウは右の中、靈に屬するものは之を信ぜず、又輕んじたりしも、其の後の行爲に因りて現るゝが如く、彼が將來受くべき現世に屬するものは、父の偏愛に因りてか或は暴力にて得らるべしと思ひしことは吾人の容易に信じ得る所なり。然るに一時の肉の嗜慾を滿さん爲に、斯る無上に貴く聖き權を好みて賣

るは、來二二・一六に記せる如く『妄なる者』にて約束を嗣ぐに足らざる者なりしことを現せり。蓋し一時の愉快又は肉慾を滿さんとて目に見えざる靈なるものを棄て、目前の樂を取らんとて聖きものを輕んずること、一言にて言へば現在の快樂を妨ぐる何物をも聖しとせざるは即ち妄なる事なりとす。聖書に『食ひ且飲みて起ちて去れり。斯くエサウ家督の權を藐視したり』と記せるは、宛もエサウ自ら己の行爲により有罪の判決を宣告するが如し。

尙イサクの試と喜との歴史を續くる前に、先づイサクとヤコブの行爲と、之に因りて契約に及ぼす結果につきて左に述ぶる所あるべし。アブラハムは信仰家、イサクは忍耐家、ヤコブは活動家にして、後の二人は其の信仰より出でし靈の果を彼等の天性に結びつけしものなりと云ひし人あり。之は勿論然りと雖も、吾人思ふに其の大體につきて大局より見ざるべからず。先づ神はアブラハムと契約を堅く結び給へることを忘るべからず。イサクとヤコブの歴史は却て契約を妨ぐることを現すものにして、吾人が日々送る信仰生活に於て遇ふ妨礙と等しく、或は弱くして神に後れ、或は急ぎて神に先つ反對の傾向あり。イサクは神に後れ、ヤコブは先だたとせり。彼等の歴史は右の二の原因より起る危険と困難とを現し、又神の彼等に對する取扱は、其の妨礙を除き其の罪を彼等の行爲と心中より取消し給ふに當りて、現し給ひし聖と慈悲と智慧によりて知るべし。是故にイサクとヤコブとの歴史は契約に對する妨礙と之を除くことの歴史なりとす。



此の解釋より見ればヤコブが「家督の權」を買はんと圖りし（エサウは之を賣る權ありしかの如く）事は勿論、其の取引の結果をも尙よく理解することを得べし。イサクは大飢饉の爲に其の居留せる地を離れ、父アブラハムに倣ひてエジプトに下らんとせしかども、アブラハムが曾て留りしペリシテの王アビメレクの住所たるゲラルに着せし時に、「エホバ彼に現れ」、其處に留まることを命じ、又アブラハムと結びし契約を彼に對して新になし給へり。この指導を與へ又新に祝福し給ふことに因りて、イサクをエジプトに於る一層大なる試惑に遇せず、其の信仰を強め又獎勵せんとし給ふ主の慈悲を認むべし。彼ゲラルに至りてリベカを其の妻なりと云はざりしが遂に、之を「問はれ」たれば初め實を隠せし臆病は虚偽に進み、アブラハムに倣ひて其の妻を妹なりと云へり。然るに此處にも亦忍ぶこと能はざる試惑より救はんがために主は干渉し給ひ、其の妻を人に奪はれざる前に其の虚偽なること露れ、又アビメレク（アブラハムの時のアビメレクなりしや或は其の後嗣なりしやは知り難し）の命令に因りて將來の安全を保證せられたり。飢饉甚だしかりければ、イサク自ら地を耕すに至りたりと見ゆ。神は尙其の試惑の中に信仰を獎勵せんとて非常に大なる收穫を以て彼を祝み給へり。パレステナの肥沃たる地方にても、其の播きし所の二十五倍乃至五十倍を收穫するを常とす。又或地方に於ては小麦は八十倍、大麦は百倍に登る。然るに神は飢饉の年にも尙十分に其の僕の爲に準備をなし得る事を示し給ふて、イサクは直ちに「百倍を獲たり」。イサクの所有の増加する

に從ひてペリシテ人之を嫉み、争論起りてアブラハムが掘りたる井を埋めたり。是に至りてアビメレクは彼に同情はしながらも其處を去ることを勧めたりしが故に、イサクはゲラルの谷に移れり。然るに此處にても亦争論起りしかば、曩にアブラハムが住みしベエルシバに往きたり。此處にて再び其の地に入るに際し、嘗て結びし契約を堅くせんがためにエホバ復彼に顯れ給ひ、再び之をベエルシバ（誓詞の井）と稱せられたり。蓋アビメレク嘗てペリシテ人とアブラハムとの間に結びし契約を新にせんとして、其の顧問官と軍勢の長を伴ひてイサクの許に來れり。今やイサクは其の地方の諸の人々と和睦せり。其の上ベエルシバにて「壇を築きエホバの名を頌べる」は尙一層善かりき。然るにイサクはかく盛なる時に新らしき試に遇へり。そは其の長男エサウ四十歳になりて偶像教徒なる二人のカナン人を妻に娶りしが、「彼等はイサクとリベカの心の愁煩となれり」。眞にイサクかく大に後れざりしならば、之を以てエサウが「家督の權」を繼ぐに足らざる最後の證據と認めしならん。然るに彼がいつも逡巡する傾向は、遂に之を打破せざる前に、是までに經驗せし所よりも更に大なる愁煩に至らしめたり。



第十六章

ヤコブ、イサクを欺きて祝せらるゝここ—エ  
 サウの愁煩—彼等の過失の悪しき結果が家  
 族中の各自に及ぶここ—ヤコブ、ラバンに遺  
 さるゝここ—イサク、アブラハムの祝福を新  
 にし又悉く之をヤコブに與ふるここ

(創二七章—二八章九)

『神を試みる』事ほど慎むべきこと他にあらんや。神が已に明かに定め給ひしものを己の因循なる心に任せて再び之を狐疑するは神を試みるなり。神が已に定め給ひしものは疑ふべからず、之に従ひて躊躇すべからず。エサクを選ばずして、ヤコブを召し給ひしことは神が明白に定め給ひしことなりと云ひ得べし。其の子等が未だ生れざる間に神は明白に預言し給ひしが、エサクも亦初に家督の權を輕んじて妄用し、次にカナン人と結婚せる事等之に勝りて神の聖旨に逆ひ、契約の目的に適はざることなき事を行ひて全然約束の嗣子となるに不適任なるを明示せり。此の如く明白なる證據あるに拘らず、イサクは神の命に従ふことを猶豫して後れたり。實は彼其の愛情のために迷ひたるな

り。今述べんとする如く、イサクは實にエサクに其の祝福の中の靈なる部分と與ふることを猶豫せしかども、冢子の生來の權は之を彼より離すことを得ずと思ひて、今エサクを祝することによつてその一事を正式に認めんとす。

或る獨逸の著述家は巧に曰ふ、「此は人生の最も複雑なる一例にして、神は歴史の糸を個人の罪と過とに拘らず最後は混亂せざるやう、自ら取扱ひ給ふことを明に示す。即ち織工が各自に預けられたる糸を己の意見と希望とに従ひて織り成すと雖も、已に其の織り上りたる處を見れば主が預定し給ひし雛形を其の中に見るなり」と。當時イサクは百三十七歳にして、其の異母兄イシマエルは十四年前同年にて死せり、彼は尙四十三年生存すべくありしが(創三五・二八)、已に目くもり又他の衰弱に因りて死期の遠からざるを思へり。是等の事情に因りて彼は普通冢子が受くべき權を正當にエサクに授けんと心を定めたりしが、先づ豫備條件としてエサクに應を以て美味を製り持來らんことを命じたり。その應を得るは神の承認を表す記號とし、之を製るは自己に對する愛情を現すものと

イサクの年齢は左の如く計りしなり。ヨセフがパロの前に立ちし時(創四一・四六)三十歳にして、ヤコブがエジプトに下りし時は三十九歳なりき。其の時ヤコブは百三十歳なりき(創四七・九)。是故にヨセフが生れし時ヤコブは九十一歳なり。而して之はヤコブがラバンの家に留りて十四年目なりしが、彼がラバンの家を通り出せしことは七十七歳の時にして、父イサクの齡は百三十七歳なりき。



思へり。此は決して怪しむに足らず、何となれば神を信すれども神の命に従はざる者は、其の聖旨の明白に示す所を爲すために努力せずして、空しく坐して神の爲し給ふことを待つを常とすればなり。リベカはイサクがエサウに語りしことを漏れ聞きしが、遠き前より斯ることあらんと恐れて之を窺ひたりしに、今や甚だ危急に迫りて一時間を延せばヤコブは悉く其の祝福を失ふやも計り難き場合に臨みたれば、急ぎて工夫實行せざるべからず。此の時に於ては兎に角其の目的を達するを得ば、其の方法の如何の如きは問ふの邊なかりき。唯リベカは自己の心中に於て思ふやう、神は已にヤコブを以て約束の嗣子なるを明示し給ひしにあらすや。又エサウは彼のカナンの婦人等を娶らざる以前に於てすら、完く約束を嗣ぐに足らざる者なるを現せしにあらすや。故に其の夫を此の如き大なる過に陥らざらしめ、又己が子の所有たるべく神の定め給ひしもの受けしむるは、神の聖旨ならざらんや云々と自問自答せしならん。モリア山に己の子を献げんとし、もし献ぐるとも神は之を死より甦らすことを得給ふと信じたりし、アブラハムの如き信仰ありしならば、彼女は然く感ぜず恐れず、又實行せざりしならん。然れど彼女の動機は甚だ複雑なりき。その信仰は弱く不備なりしにも拘らず、約束を直視し、神の聖旨を爲しつゝありと自ら信ぜしならん。凡そ如何なる人たるを問はず、止むを得ずして、又神の與へ給ふ智慧に導かるゝと思ひて、神に任すべき所を己の力にて爲さんとすることあり。此の如くせば多くの日子を過ぎる内に其の希望を達する爲に、之を神の聖旨に

適ふものと思ひて、用ゆる方法の正しきや否やを慎まざるに至らん。而して信仰の外には此の如き危険を免るゝ途あることなし。然り其の信仰は神自ら其の聖旨を行ひ給ひ、我等は全く神に信頼し、又何處へなりとも其の導に従ふ信仰ならざるべからず。神の實行し給ふ方法は、決して人の狡猾と工夫とを以てするが如きものに非ず。記して曰く「依頼む者はあわつることなし」、又神は其の人の爲に實行し給ふが故に急ぐ必要なし。

リベカは其の目的を達せんとて、ヤコブに勸めて其の父の目の眩りたるを利用し、エサウの風をなさんことを以てしたり。即ち獵する時に通りし野の草木の香を存つ兄の衣類を着、又滑澤なる皮膚に毛皮を掩ひ、又リベカは其の父の爲にエサウの製らんとする麁と區別する事を得ざる他の物を造らんとせり。ヤコブ始めは之を承諾せざりき。此は其の不義を感じたるよりも寧ろ虚偽の知れんことを恐れたればなり。されどリベカは彼の疑懼を鎮めたりしが、多分己は神の聖旨を行ふことと信じ、好結果あらざることなしと思ひしが故なりしならん。ヤコブは其の企を實行するに當りて其の事意外に出来難きを認めたり。其の老人の益々深き疑を掃はんが爲に重ねて欺偽を用ひざるを得ず。遂に父の疑を掃ふことを得しも、其がため起りし耻と悔恨の甚だしかりしは容易に想像するを得べし。斯てイサクは彼を「祝す」と共に家督の權を授けたり。然るに之につきて最も注意を要するは、此の祝福に因りてカナンの地と其の兄弟を支配する權とは彼に與へられたりしも、此はアブラハムに



與へられし大契約の臍氣なる反響に過ぎざることなり。即ち「汝を詛ふ者は詛はれ、汝を祝する者は祝せらるべし」(創二七・二九)てふ言の外に、其の契約に關すると思はるべき言なし。然るに此は「汝の子孫によりて天下の民皆福祉を得べし」(創二二・一八)てふ、アブラハムに對する祝福と異なること明白なり。イサクはエサウを祝せりと思ひて、敢て家督の權に附屬する靈なる權利を授けざりしが故に、ヤコブとリベカとは其の求めし所を得ざりき。

ヤコブが其の父の前より出去りし時にあたりて、エサウは其の製りし美味を持ち來れり。イサク、リベカ、ヤコブ共にこの事件に關して罪ありしが、エサウも亦然り。蓋は此の點につき神の聖旨を已に知りしのみならず、彼は已にヤコブに賣りしものを、今父の恩に因りて得んとすることをヤコブに隠したればなり。眞に此處にヤコブと等しく不正直、狡猾、虚偽等ありき。イサクはかく欺かれしことを知りしかば「甚だ大に戦兢へり」と雖も、已に唱へし祝福を變ぜず、「彼を祝したれば彼まことに祝福を得べし」と云へり。永くイサクの靈の目のくもりたる所は、今や始めて掃はるゝに至れり。己の弱きに因りて招きし危険を、神の指を以て防がるゝことを見たり。かく此の事件に關して四人共に過失と罪あるに拘らず、神自ら其の聖旨を達せしめ給ひたるが、イサクは之を承認し、エサウも亦今始めて實際失ひし所の如何を悟れり。記して曰く「彼は其の後祝福を受けんと欲したれども棄てられ、涙を流して之を求めたれど回復の機を得ざりき」(來一二・一七)と。彼が強ひて何

かの祝福を懇願するに因りて、イサクはエドムの將來につける預言を唱へて、曰く「汝の住所は地の膏腹に離れ、上よりの天の露にはなるべし」と。此はエドムの山の概ね荒れたる有様を現す所に於て、續いてエドム人の將來の歴史を預言して曰く、「汝は劍を以て世を渡り、汝の弟に事へん。然れど汝つなぎを離るゝ時は其の鞭を汝の頸より振り落すを得ん」と。この意味はイスラエルとエドムとの間に將來數次起る戦争に於て互に勝敗あることを現し、又ヤコブの祝福の中に審判を含ませしめたるなり。エドム人ヘロデがダビデの位を奪ひし迄のイスラエルとエドム兩國の歴史を、イサクの言に比ぶる時は、來一二・二〇に左の言を以て如何に正確又簡單に全般を記せるかを見ん。曰く「信仰によりてイサクは來らんとする事につきヤコブとエサウとを祝福せり」と。

イサク今は信仰を以て行ひ、又己の意志によらず、神の聖旨に従ひ、知らずして祝せしことを已に悟れるは、後の事件に因りて明白に現れたり。エサウはいたく弟を嫉み、又憎みて之を殺さんと心を定めしが、唯父の死に至ることの遠からざるを思ふが故に、其の時まで其の實行を見合せたるのみなり。常に注意深かりしリベカは事の急なるを知り、又其の長男の短氣にして甚く怒り易きも其の永續せざることをよく知れるが故に、ヤコブを己が「兄ラバンの許に逃れ」しめ、「暫く」彼と共に居らしめ、兄の怒の鎮まりたるを見れば「人を遣りて彼處より迎へん」と云へり。然れどもイサクに對してはエサウが兇殺の企を知らしめず、ヤコブが暫く離れ居る理由として、己が親族の内より妻



を娶らしめんと欲すと云ふを以てせり。彼女は眞にこれを深く希望せしなり。リベカ曰く「ヤコブ若し此の地の彼女等の如きヘテの女の中より妻を娶らば、我が身生くるも何の利益あらんや」と。斯く言ひしは怒りて云ひしなれど理に適へり、而も此はエサウの妻の爲にイサクが曾て苦き経験を嘗めし所なり。今はイサク妻を娶らしめんが爲に特にヤコブをラバンの許に遣し、又之に因りて嘗て詐欺を以て取りし祝福を今は意識的に更新せられたり。今は其の契約の言を悉く繰返して明言せしのみならず、更に左の言を加へて曰く「願くは全能の神……アブラハムに賜へんと約束せし祝を汝および汝と共に汝の子孫に賜はんことを」と。斯くてイサクが靈の目の昧は遂に癒へたりと雖も、エサウの靈の状態は益々暗くなれり。エサウ已にイサクが其の弟に命ぜしことを知り、又「カナンの女の其の父イサクの心に適はぬ」ことを始めて明に氣付きたれば、「イシマエルの女マハラテ」を第三の妻として娶れり。彼は父の不興を和げんがため、曾て神の命に従ひてアブラハムが「逐出せし」者と縁を結ぶに至りたるが如し。斯く親切を現し孝を盡さんとせし時にも、エサウが靈の力なく、約束を嗣ぐに足らざることは事毎に現れたり。

爰にエサウが神の不興を恐れしや或は之を思ふことさへありしやの記載なし。悲しいかな、我等は肉體上の親を忘れずとも、天父は忘れ易し。

終に臨み獨逸の或者者の言を變へて言へば、右の事件の後イサクは尙四十二年生存しぬ。されど此

の物語には其の事を記さず。ヤコブは已に其の契約を嗣ぎたれば其の物語は續いて彼の事と爲れり。聖書には唯イサクは齡百八十歳となり、年老いて遂に其の民に加はり、生前其の子エサウとヤコブの和ぐを見て喜びたりしが、兄弟は之をマクベラの洞穴に葬むれりと記せるのみなり。ヤコブの去りしとき父はベエルシバに住居せり。ヤコブが後に其の終焉の地マムレ（創三五・二七—二九）に移りしは、其の父イサクの墓に近く居らんと欲せし故なりしならん。エサウの怒解けなば必ずヤコブに通知せんことを約束せしリベカは、其の愛する子がカナンに歸らざりし前に死にしならん。兎に角其の約束せし報知はヤコブに達せず、又ヤコブのカナンに歸りし後其の名を記すことなし。

第十七章 ヤコブ、ベテルにて幻を見ること—ラバンの家

に着くこと—ヤコブ二妻を娶り、ラバンに事

ふること—ハランより逃るゝこと—ラバン、

ヤコブを追ひ又之と和ぐこと

(創二八章一〇—三一章)

ヤコブ、ベエルシバの家を出立ちし當日、遠く旅して甚だ疲れたり(聖書に因ればヤコブは其の



晩ベテルに宿れりと推量さる。行程四十哩、即ち後世エダの族の領分となれる山を越え、又後にベニヤミンの族の領分となりし地を通れり。日已に没り餘照エフライムの山に消えし時、廣く且大なる岩石多き或る谷に至れり。此處は廣き巔に橄欖の林茂れる山の背を控へて、アブラハムが此の地に入りし時最初に息みし處にして、彼がロトと離るゝに至りし以前、相共に全地を見渡せし處に當れり。前面にはカナン人の邑ルズあり、又それを越えて前には將に通らんとするハラシへの難路あり。(ベエルシバとハラシの間の路は少くも四百マイルなり)。斯る淋しき石の谷に一夜を送るは誠に恐ろしかるべけれど、恐らく朝より時も路も厭はず歩みて最早一步も進むことを得ず、心身共に疲勞せしヤコブの気分には適へるならん。聖書には「一處に至れり」と記せしが、此は偶然のことと思はるれども實は神の定め給ひし所なりき。やがてヤコブは息まんとして、其の谷にある平たき石を重ねて枕となし臥して寝ねたり。さて其の夢の中にて目に見えざる手其の谷の石を以て「梯」(寧ろ正しく言へば階段か)を建つるを見る。見る間に益々高くなりて遂に星の輝ける大空に達し、天開けて其の中に入れり。神の使これを「上り下り」して光を放ち、其の上に榮光あるエホバ立ちて、地に寂寥しく寝ぬる者に言ひ給はく、「我は汝の父祖アブラハムの神、イサクの神、エホバなり」と。ヤコブが寝ねたる所よりエホバの語り給ふ所まで、天使は神の立て給ひし梯を上り下りして黙然として事へたり。其の幻と神の語り給ひし言とは互に相照して前者は後者を表す記號たり。彼は家を離れ

て逃げし夜、疑や恐や憂慮など交互起り、岩多きルズの谷にて石を枕とせし時、エホバは嘗てアブラハムと結び給ひし約束と祝福を懇に又悉く繰返してヤコブに告げ、又かゝる場合にも拘らず左の慰を加へ給へり、曰く「我汝と偕にありて凡て汝が往くところにて汝を守り、汝を此の地に牽き返るべし。我は我が汝に語りしことを行ふまで汝を離れざる也」と。ヤコブが斯く聞きし事は其の幻にても見たり。疲れたる旅人の臥せる處より、天即ちエホバの前まで達せし神の建て給ひし眞實の階段は即ち其の約束なりき。又其の階段は世に知られずして黙々と神に仕ふる天使の通る所なり。故に今も猶ほ眞實のイスラエルたる者は、天地を合する彼の妙なる「梯」の約束に與る。而して下には憐れなる助けなき棄てられたる人間あり。其の上にはエホバ自ら立ち給ひ、天地間に懸れる約束の梯の上には天使ありて、助を與ふる爲に下り、又尙神の助けを求めんが爲に上りて、絶えず黙然として事へ居れり。而して此の「梯」は即ちキリストなり。ルーテルもカルビンも斯く解釋せり。蓋は此の「梯」により神自ら其の愛子の體によりて我等の中に下り給へり。即ち左の言に現るゝ如く、其の子は所謂約束の成就なればなり、曰く「天ひらけて人の子の上に神の使たちの昇り降りするを汝ら見るべし」(約一・五一)と。

『ヤコブ目をさまして言ひけるは、誠にエホバ此の處に在すに我知らざりし』と。彼は今も恐懼あれども此は前の寂寥又は疑惑とは異りたるものなり。常に見給ひ、常に護り給ふ契約の神の在し給ふ



を認めて畏れたるなり。後世多くの漂泊者の同様の發見を爲せしときと同じく彼は斯く感じたり、『畏るべき哉此の處。是れ即ち神の殿の外ならず、是れ天の門なり』と。然れば其の翌朝夙く彼が枕とせる石を記念の柱に代へて之を神に聖別せり。其の後其の岩多き谷の名はカナン人の稱へしルズを代へてペテル(神の殿)と名けたり。宛もバブテスマのヨハネが、神は能く彼の石を以てアブラハムの子と爲し給ふと言ひしが如し。其の時ヤコブは、神が其の約束の如く彼を父の家に『安然』に歸ることを得しめ給はゞ、此の處を神に聖別してペテルと爲し、又其の賜ふ物の十分の一を獻げんと誓を立てしが、後實に爾か爲せり(創三五・六、七)。

ヤコブが其の旅の終局に達し『東の民の地』に至る前には別に記すべき事件なし。已に其の地に至りて或る『井』に來りしに、普通の習慣に反して夜の水飼の時間にならざるに、羊の三の群臥して待居たり。ロビンソン博士の左の實測によれば克く此の事件を理解し得べし。曰く『多くの水溜(同地の井なり)の上に廣く厚く平たき石を置き、其の石の中央に丸き穴あり、之を水溜の口とす。又其の穴の上に石を置けり、此の石は重くして之を動かすには二三人を要す』と。此の石を轉すべき人の來るを待ちしにや、或は凡ての群の集るまで待つ習なりしや、之を知らずと雖も、兎に角ヤコブは其の群のハランより來り、其の牧者がリベカの兄なるラバンを知れることを認め、又己の従妹にして美しきラケルが其の群を導き來れるを見しかば、自ら其の石を轉し小父の羊に水飼ひたり。已に其の

目的の地に至りしのみならず、容貌に因りて己の愛を勝ち得べき者にまで神に導かれしを感じて之に接吻せり。之に因りてヤコブの特性を観察する者は、彼が神の指導を待たざる性急なる所をも認むべし。ラケルの父ラバン其の事情を聞き、ヤコブを其の親族として迎へたり。一個月間ヤコブを試みたる後、我慾にして貪婪なるラバンは、ヤコブが『井』の傍に於る活潑なる動作に因りて之を牧者とせば利益あらんとの念を堅くせり。而して彼は其の慾望を掩はんが爲に僞りて正直と親切を装ひ、ヤコブに向ひて其の『報酬』を定むることを強ひ求めたり。ヤコブは已にラバンの次女を愛するに至りしかば、今は神の聖旨を伺ふことをせず、之を妻に受くる代りに七年間ラバンに事ふることを約束せり。此はヘブル人の間にて奴隸たるユダヤ人の事ふる期間にして、ヤコブはラケルの爲に好んで奴隸たらんとせり。ラバンは前と同じく正直の風をなし、喜びて之を承諾せり。曰く『彼を他の人(見知らぬ人)に與ふるよりも汝に與ふるは善し』と。斯く其の女を賣るは當時の習慣にあらず。又ラバンの女等も、後に其の父の家より逃ぐることに賛成せし時に言ひし言より察せらるゝごとく、制すべからざる輕蔑を感じたり。曰く『我等は父に他人の如くせらるゝにあらずや、其は父我等を賣りたればなり』(創三一・一四、一五)と。

ヤコブはラバンと契約せし七年の期限已に終りければ新婦を要求せり。然るにヤコブが嘗て犯せし罪は今其の身に及べり。彼其の父を欺きしにより今自己も亦ラバンに欺かれたり。ラバンは新婦の



帕子の儘新郎を迎ふる東洋の習慣に乗じて、ラケルに易ふるに其の姉レアを以てしたり。前には神はイサクとヤコブをして其の過失と罪とに關らず、知らずして聖旨を成就せしめ給ひしが、今ラバンとヤコブの間に於ても亦然りき。蓋はヤコブはラケルが美なるに因りて之を選びしが、神の預定し給ひし所はレアなりと思はるればなり。アブラハムに對する約束を成就せらるべき血統は、即ちレアが生みしユダなり。後に見ゆる如く、レアはエホバを尊敬し之に事へしが、ラケルは其の父の家の迷信に従へり。次女ラケルは美麗なれども短氣にして又我儘なりしが、長女レアは其の性質に於て妹よりも神の新しい召命(主イエスの先祖の妻となる)に適當せり。ラバンは長女に先つて妹を嫁がしむるは我が國の習慣に適はずとの口實をまうけたり。然れどもヤコブが尙七年彼に事へなば、喜んでラケルをも與ふべしと言ひしかば、ヤコブ之を承諾し、レアとの結婚の祝宴、即ち東洋に於ては普通一週間打續く祝宴終りて後ラケルとの結婚の祝をも執行せり。此の如くヤコブの重婚につき、聖書に記せる所なきに因りて神の聖旨に適へりと思ふは大なる誤謬なり。常の如く聖書には事柄を記して之に註解を加へず。該事件につける註解は此の結婚の結果として、ヤコブが神の罰をうけて一生涯を通ずる愁歎、耻辱、困難等に著しく現れたり。

ヤコブは結婚せし後も、レアに對しては無情にしてラケルのみを愛せしにより、其の罪なる弱點現れ、又神は「嫌はるゝ」妻を祝し、之に子を生ましめ、又約束の嗣子より他に希望なき其の恩を、ラ

ケルに與へ給はざることによりて彼の罪を戒め給へり。之は神がアブラハムを始め、後にイサクに教へ給ひし如く、今も亦父祖の家に於ては、此の恩は神が直接に與へ給ふ賜なるをヤコブに示さんが爲なりしならん(詩一二七・三を參照すべし)。レアは早く四人の男子を生み左の如く意味深き名を付けた。長子は「エホバ誠」に我が艱苦を顧み給へり」とて、ルベン(見よ、子ありとの義)と名け、第二子は「エホバ我が嫌はるゝを聞き給ひ」たれば、シメオン(聞くとの義)と名け、第三子は「夫今よりは我に膠漆まん」との望を懷きて、レビ(つながらる或は結ぶの義)と名け、第四子は「我今エホバを讚美めん」と云ひて、其の名をユダ(エホバは讚むべき哉との義)と名けたりと。右の四子の中少くとも三人の生れし時、レアが單に神を知りしのみならず、特に神をエホバ即ち契約の神と認めたることは特別の注意を要す。

生みの子なきラケルは、姉が子を生むを見て妬ましげに己に優る點を除くことを密に企てしならん。聖書に於てヤコブの子等は其の名を記せる順序に従ひて生れたりと記せる所なく、却て然らざるべしと思はるゝ點あり。ラケルは永く待つことをせず、又己に子なき點に於て姉に劣ることを認めれば、直にサラがハガルに於てなせし如く、其の侍婢ビルハに因りて母となることを得させよと其の夫を勧めしことは、其の短氣なる性格に善く適へり。斯の如く親の罪は其の子等にも現るゝこと數々あり。ヤコブは神を俟望まず、又祈禱もなさずしてラケルの望の儘を實行し、侍婢に二人の



子を生ましめたり。神が彼女の悪を裁き給ひたるにより、其の一人をダン即ち「審判する」と名け、一人を「我神の争(即ち大なる争)をもて姉と争ひて勝ちぬ」と云ひて、ナフタリ即ち「我が争」と名けたり。兩者に於て其の姉を恨む心を満足させ、又其の名を付くるときに神を認めしと雖も、契約の神エホバにあらず、萬有の神エロヒムとして之を認めしなりき。

妹の悪しき模範と其の成功と思はれしものは姉にも傳染したり。蓋はレアは前の如くに最早子を生まざることを知り、またラケルの二人の養子が生るゝことを待たず、其の妹の例に倣ひて己の侍婢ジルバをヤコブに與へ妻と爲さしめたり。彼女の信仰の衰へたるはジルバの子等の爲に選みし名に因りて現れたり。即ち其の長子生れたれば「福來れり」と云ひて之をガド(幸運)と名け、また其の次子の名アセル(幸)にも同じ意義現れたり。是に於てレアは神を記憶えず、唯己の工夫の好果のみを考へたり。然るに此の二人の姉妹に子を與へらるゝに因りて互の恨は隠かれず、又ヤコブの家に平安は與へられず、却て悲しき事件起りたり。其の後レアは再び二人の子を生み、其の名によりて實に神を認めたりと雖ども、今度はエホバにあらずして其の妹の如くエロヒムとして認めしなり。其の初めの子はジルバをその夫に與へて妻とせし報と思ひ、之をイツサカル(神は褒美を賜へりとの意)と名け、末の子はゼブルン即ち「住まん」と名けたり、是れ都合六人の子を生みしが故に、「夫今より我と偕に住まん」ことを證することと思ひてなり。

ヤコブの子等の生れたる順序を記せるは、眞の順序にあらざるべしとは已に述べし所なり。是れ寧ろ其の二人の姉妹の種々の動機を現し、又各自の子等を區別せんが爲に記せる順序なり。聖書の物語が其の子等の生れたる眞の順序を現さざるは、一人の女テナ(審判の義)をゼブルンの生れし直後に記せしに因りて見るべし。ヘブル語の原文に因ればテナは後に生れたりと見ゆ。又獨り其の生れしことを記せるはヤコブの後の歴史に關係あるに因りてなり。ヤコブには他にも女等ありしならんと思はるれど(創三七・三五、四六・七)、更に其の名や生涯を記さざるなり。

創四九章に記せるヤコブの最後の祝詞に於ては、其の子等の順序全く異なれども、此處にては寧ろ其の物語の目的に従へる也。

後に至りラケルの心の和ぎしを見る。蓋は彼女は神が自己に子を授けたまふに當り、「神彼に聽きたまへり」と記せるを見れば、其の姉を妬み恨むことを止めて信仰の祈の心に起りしことと思はる。ヤコブがラバンに事ふる十四年目に生まれし子をヨセフと名けしが、之に左の二の意味あり。第一は「除く者」、蓋は「神我が耻辱を洒ぎ給へり」との意、第二は「加へること」、蓋は其の子を此の度はエホバなる神が「他の子を我に加へ給はん」と云ひ給へる保證と思ひたれば也。ヤコブが永く其の舅の家に留まれる目的は已に達したり。然るに十四年間ラバンに事へたるも、其の始めて來りし時に比し少しも富まざりき。然れば益々増加する家族の入費と、今や其の家族打揃ひて平穩になりたることは、歸國を益ありと思ふの考を起さしめられたれば、其の意をラバンに知らせしに、彼は



ヤコブの如く己に大なる利益を與ふる者と相離るゝを好まざりき。彼は偶像教的思想と漠然ながら神を知りし知識とによりて、左の如くヤコブに云へり、「若し汝の意に適はざる願くは留れ、我エホバが汝の爲に我を祝みしことをトひ得たり」と。斯くアブラハムの神エホバをナホルの神と同等の者とし、實にエホバの存在を拒絶するにあらず、其の唯一なる活る眞の神とすることのみを拒絶することとは、後にラバンがヤコブと契約を結ぶ時にも亦此の事ありき(創三一・五三)。イスラエル人の後世の歴史に於ても斯の如き事多し。異邦人も背教する時のイスラエル人もエホバは神にあらずと言ふに非ずして、他の神即ち偽の神と同等の者と爲すなり。然るに聖書に因れば、偽の神を活る眞の神と同等なる者とするは唯無知を現すのみならず、全く拒絶するに劣らざる大なる罪なり。

\*ヘブル語に於てはトひてふ語は蛇といふ語と異ならざるは奇妙なり。或る偶像教の儀式に於ては蛇を拜むことはトすることと關係せり。又之に因りて凡ての偶像教とトとの原因が、サタンと稱する老蛇にあるを認め難からず。

ラバンはヤコブが尙暫く己に事へんことを欲し、例の如くに正直と寛大の風を装ひ、ヤコブに其の報酬を云はしめたりしが、此の度は欺く者却て欺かるゝこととなりたり。ヤコブは概して東洋に於る山羊は黒く綿羊は白き事實に基き、群中の黒斑又は白斑なるものを己が有と爲すことを要求したり。こは甚だ寡慾なる望の如くに思はれたれば、ラバン喜んで之を承諾したり。彼は自ら羊を擇り分け、ヤコブが己の羊を牧ふ間はヤコブの受くべき分を己の子等の手に付さんと思ひたり。遂に己の家畜

とヤコブの家畜との間に三日程を隔てしめたり。然れどもヤコブは東洋に於て能く知らるゝ詭計により舅を欺き、是迄は「斑入の者、斑駁なる者、斑駁なる者」の稀なりしが、今それを群の中最も數多くして又最も強からしむべき方法を知れり。ラバン數々其の約束の條件を變へしも(創三一・七)、ヤコブは尙利を取れり。之に因りてヤコブが利益の唯一なる眞の原因は、其の詭計に非ざりしは明白なり。實はラバンと結びし第一の約束の後直に神の使夢にヤコブに現れ、斯る詭計に因らざるも神はラバンとの關係に於て彼を助け給ふことを確證し給へり(創三一・一二、一三)。而してヤコブは其の父の家に於て爲せし如く今も亦爲せり、即ち主が其の約束を成就し給ふを待たず、神に任せるよりも急ぎて神の聖旨を成就せしめんとて己の工夫、即ち其の狡猾なる手段を用ひたり。前には其の父の弱き事と兄の暴行せんとする事を以て父を欺く理由とせしが、今も亦唯ラバンより己を保護せんが爲に過ぎず、且た欺瞞は己を保護せんが爲に必要なりと思ひしならん。又其の企を實行せしは秋にあらずして春なり、即ち秋の産は概ね其の舅の分となれるが故に爾なせしものと思はる。

\*之によりて創三〇・四一、四二の意を解するを得。蓋は春の産は秋の産よりも強しと思はるればなり。

此の欺瞞の結果は其の父の所にてありしものに類似せり。ヤコブの富はラバンと約束せし六年間に急速に増加せしかば、ラバンと其の子等の恨と猜忌甚だしかりしが故に、彼は神より示されざるも、其の身の安全を計らんがために移らざる可らずと思ひたりしならん。然るに尙ほ神よりも命ぜら



れたれば、一刻も猶豫する餘地なく、先づ妻等に其の旨を通じ、彼等も亦喜んで承諾せしかば、ラバンが羊の毛を剪らんとて外に往き、暫らく歸らざる間に乘じて『潜に忍び出でたり』。ヤコブが逃去りしより三日に及びてこのことラバンに聞えければ、『彼兄弟を率ゐて其の後を追ひたり。ラバンは彼のもてる『テラビム』(家の偶像)を、勿論ヤコブも知らぬ間に、ラケルが竊去れるに因りて激しく怒りたり。七日目にラバンと其の親戚等はギレアデ山にてヤコブと其の従へる者に追付きしが、若し神が夢にラバンに干渉し、慎みてヤコブに害を加へざらしめ給はざりしならば、恐るべき結果を生じたりしならん。ラバンは其の女ラケルの狡猾なる所爲のために失へるテラビムを徒らに穿鑿し、又ヤコブに向ひて汝が『忍び出で』ざりしならば、懇に之を見送りしならんと偽りて主張せしも、其の我愆と無情なるとは明白なりき。必竟ヤコブが逃げ去りし行爲は不正直なりとするも、ラバンの行爲こそ實に横着なりき。兎に角終に相和ぎ、又契約を結びたりしが、之に因りて双方其處に建てし記念の塚を越えて互に害せざらんことを約せり。ラバンはカルデア語にて、ヤコブはヘブル語にて此の塚を『證憑の塚』と名けたり。

ラバンは他に此の塚をミヅバと名けしが、之をラバンの性質より考ふれば偽善なりと思はる。此の名は吾人の生涯に於る大なる出来事、殊に同盟と事業に關して適當なる主意を表する言なり。ミヅバの意味は『觀望樓』にして、之を名くる時の言は左のごとし。曰く『我等が互に分るゝに及べる

時、ねがはくはエホバ我と汝の間を鑑み給へ』と。

### 第十八章

ヤコブ、マハナイムに在るこゝに夜角力するこゝ  
 ミーヤコブミエサウの和睦—ヤコブ、シケムに居  
 住するこゝ—ヤコブ其の願を果さんにてベテル  
 に往くこゝ—ラケルの死するこゝ—ヤコブ、ヘ  
 ブロンに居住するこゝ

(創三二章—三六章)

吾人は今ヤコブの靈性の歴史に關する貴重なる點に近かんとす。アブラハムの歴史はヤコブのとは大に異なれども、或る意味に於てアブラハムに對するモリア山の事件は、其の孫ヤコブに對するヤコブの渡の事件に類似せり。即ち兩者に對して二個處借に試煉と決斷の場所なりしと雖も、前者は新らしき名を得てそこに行きて、後者は新らしき名を得てそこを去りたり。

一の恐れたりし會合は已に過去り、又その氣遣ひし危険は避け得たり。ヤコブは恐れてラバンの手より『潜に忍び出でたり』しが、敵によりて追はるゝ如く追はれたれども、神の攝理に因りて平安



なるを得たり。其の『ミヅバ』の傍に立ちてラバンと其の黨與が戈を日光に輝かしながら、山の麓にある松と橡の林を通り、ギレアデ山脈の後に見えざるに至るまで見送りたり。是にて一方の敵は事故なく歸せしも、尙一層恐るべき他の敵に遇はんとす。ラバンに對しては永く彼に事へしことと、其の無情の我愆とを訴ふることを得れども、エサウに對しては以前の行爲につき推諉るべきやうあらんや。又如何にして之に會ふことを得んや。將又二十年前に逃げ去りし時の如く、エサウは尙復仇の心ありや。此等の疑問に對しては信仰を以て曉る外に答なし。即ち今歸國に當り其の危険に向へるは、主自らの明かなる命令に従ふなり。故にヤコブは安然也。尙又其の信仰を堅めんとて之を確證する告示を受け、間も無くギレアデの山地を離れ、後にガドの領地となりし約束の地に入れり。此處にて幸福の望彼の前に展開したり。其は景色美にして肥えたる牧草青々として繁茂せる處にて、山上を見れば森林鬱蒼として繁り、下を臨めば肥豚の平地なりしが、その地は幾多の星霜を経たる今日に於ては樹木なく、潤澤なく、荒れたる跡多き憐れなるパレスチナの地とはなりたり。扱て彼が其の地に入りし時「神の使者これに遇へり」。二十年前其の地を離るゝ時ペテルに於て彼に遇ひ、其の旅行に伴ひ行きしが、今は又其の歸る際にも彼を迎へたり。唯その時は上り下りする神の使者として事へしが、今は來らんとする争に於て彼を守る天使軍として來りしが故に、ヤコブ其處をマハナテム(『二營』或は『二軍』の意)と名けたり。ペテルにては彼『夢に』神の使たちを見しが、今は

目を覺せる時に彼等の顯るを見たり、是れ尙一層確く神の保護を信ぜしめん爲なりき。ヤコブに於ては此の如き慰安は眞に必要なりき。彼はマハナテムより兄エサウと和がんとて使を遣せしが、エサウ自ら四百人を従へて來り迎へんとの外には答を得ずして歸りたり。此は眞に驚くべきことなりしのみならず、後に見ゆる如くエサウは其の時セイルを攻めんとせしが、其の從へる四百人は、恐らく現今の狂暴なるベドイン種族の如く、驚くべき掠奪と兇殺とをなさんとてエサウの旗下に集りしならん、是實に驚くべきことなりき。答を受けざるのみにてもヤコブの如き者に取ては大に脅威を感じしことならん。今までは其の計畫に因りて如何なる妨害をも除き、又如何なる危険をも拒ぎたりしが、今は進退竝に谷まり、敵に對しては絶對に通るべき道あらざりしなり。聖書に記して曰く、『是によりヤコブ大に恐れ且苦めり』と。之に關する計畫も亦之を證す、乃ち其の僕と家畜を二隊に分ちたり。蓋は若しエサウ一隊を攻めなば、他の者は其の戦の間に逃ぐることを得んと思ひたればなり。斯くするも豈に其の結果善からんや、もし善しとするも其の苦心は少からず。ヤコブは深く之を知りて祈禱に訴へたり。即ち自ら恩を受くるに足らざることを言ひ表し、又兼ねて其の遇はんとする危険より救はれんことを懇願し、神が其のカナンに歸ることを明に命じ給ひたることと、已に受けたる恩と、其の恩ある約束とを思ひ出し、神をアブラハムとイサクの契約の神なるエホバと呼びて祈れり。斯る懇願は決して空しくなることなく、其の絶望は次の事の準



備なりき。ヤコブは今は己の力に因らずして、エホバが與へんと約束し給ひし恩を受くることを知らんとせり。

ヤコブの生涯に於る最も大切なる事件の行はれし場所は、殆んど何人も確實に知る所にして、即ちガリヤの湖と死海の恰んど中間にて、東より流れ来る二の川のヨルダン河に合する。ヤボクの渡なり。此の邊にて渡り得る渡は唯一ヶ所あるのみにて、其處とても近來の或旅行者が言ひし如く、其の強き流は馬の肚帯を潤す。又此の地は景色好く地味甚だ肥え、樹木ある野と豊作の畑あり、草木の種類多くして甚だ美し。此處より亞熱帯植物のある廣きヨルダンの流域と、又向のパレスチナの山々を眺むることを得、又其の渡を見渡せば、ヤボクの流は其の堤にある夾竹桃の藪の爲に殆んど見えす、又兩方の險阻なる岸に橡、柏及松の林あり。此の寂寥しき所にて夜に及びしが、上には嘗てアブラハムに對して約束を證したる數へ難き星輝き、四圍靜寂にして唯ヤボクの流の音、其の流を渡る家畜の聲、女、子供、從者等の渡る準備をなす響の外には耳に達するものなし。ヤコブは兄の怒を和げ、又其の從者等の貪慾を満さしめんとて數多の家畜を數群に分ちて送りしが、牧者等は各自和ぎの使命を帯びて皆渡り、女子供等もヤボクの南岸に安然に野營を張り、ヤコブ唯獨り北岸に残り、全く孤獨なりき。恰も曾て其の父の家を離れし時の如く「ヤコブ一人遣りたり」。其の夾竹桃の繁れるヤボクの岸に於て、後に神の教會に對する意味深き事件起りたり。即ち「人ありて夜

の明くるまで之と角力す」。此の「人」は神の借に在し給ふエホバの使なりき。「其の人己のヤコブに勝たざるを見て、ヤコブの髀の樞骨に觸れしかば、ヤコブの髀の樞骨其の人と角力する」とき挫離れたり」。角力を以て勝を競ふこと能はざるに至れりと雖も、爰に更に異なる勝負は始まれり。記して曰く「其の人夜明けんとすれば我を去らしめよと言ひければ、ヤコブ云ふ、汝我を祝せずば去らしめず」と。ヤコブ已に其の敵手の何人たり且つ其の勝負の如何を悟り、前と異なる方法を以て異なる勝利を求めたり。尙己の力によりて勝たんとせず、唯角力せし其の人に勝たんとて祝せられんことを願ひしが、爾せられたり。然るに主は先づ其の元來の經歷を表する舊き名ヤコブ(狡猾にして自ら助くる排除者)を思ひ出しめ、而して後其の新しき經驗と、祈禱に因る高尚なる勝負とを表す新しき名、イスラエル(神と偕なる君)を與へ給へり。彼は此の新しき性質に於て「神と人とに力を争ひて」凡ての敵に「勝つ」を得べし。然るに彼は其の使者の奥妙なる名は未だ知るを得ざりき。蓋はヤコブがイスラエルと變りたる聖旨の成就せられざる間は、「信仰の奥義」は全く示されざればなり。然るに今「其の人其處にて彼を祝せり」。『是を以てヤコブ其の處の名をベニエル(神の面)と名けて曰ふ、我面と面を合せて神と相見てわが生命なほ存る也と。斯て彼日の出づる時にベニエルを過ぎたりしが、其の髀の爲に歩行はかどらざりき。是故にイスラエルの子孫は今日に至るまで髀の樞の巨筋を食はず』と。「イスラエルの子孫」は文字通り「今日に至るまで」此の習慣を守れり。



右の嚴かなる事件の意義に就ては、象徴的なこと疑なしと雖も、亦實際の事實たるなり。即ちヤコブの過去と現在と將來の歴史を表す所にして、『夜の明くるまで』ヤコブと角力せし『人は即ちエホバなり。ヤコブは元來約束を信する嗣子なりしと雖も、生涯神と争へり。即ち己の力と計畫とに依頼して勝たんとせり。彼は人と争ひし如く見えしが、實は神と争ひしものにて、神亦ヤコブと争ひ給ひしが、ヤコブは遂に争ふことを得ざるに至れり。是れ神が其の髀の樞骨に觸れ給ひしが爲にヤコブの力衰へたれば也。彼はエサウの前に力なし。然るに地上の最も恐るべき敵に當る前に、是まで其の計畫を以て知らずして争ひし神に當らざるべからず。エサウとの争は數ふるに足らざるも、神との争は然らざりき。ヤコブ負傷して己の力と異なるところの方法を用ふることを知るに至るまでは、神はヤコブを助け給はず。其の時ヤコブは始めて其の争ひし敵手の誰なるやを認めたり。今は異なる方法即ち祈禱に頼り、又異なる勝利即ちエホバの祝福を、エホバの力に因りて求め、且つ得たり。而して『夜明けんとす』の時、彼は新しき名、新しき力を得、之に因りて『神と人に力をあらそひて勝ちたり』。ヤコブは眞に『髀の爲に歩行はかどらざりし』かども、今はイスラエル即ち神と偕なる君なり。加之何時の時代を問はず吾人が己の力の足らざるに絶望したる時、又『汝我を祝せずば去らしめず』てふ堅忍不拔の祈禱を捧ぐる時、此の争と此の勝利とは神の子等に對する最も貴き記號なり。尙又ホセアは此の事件をイスラエル人の歴史を表す記號として引用せしが

(何一・二・四)、其の主意は、『彼等が其の刺したりし我を仰ぎ觀、……哭かん』時に全く成就せらるべし(亞一・一・一〇)。

ヤコブ朝早くヤボクの渡を渡りし時、蒼暗き松林の中に、戈の旭に輝きて閃めくは、エサウと其の四百人の從者が近けるなりと察せしと雖も、眞の争は已に終りたればヤコブは恐るゝ所なかりき。ヤコブが其の地と約束のものを受けんとて歸る時、彼が過ぎ去りたる歴史は眞に過ぎ去りしものとせざるべからず。故に彼は爾なせり。其の夜以來ヤコブは肉に屬する戰の器を用ふることをなし。彼の舊名は其の新しき名の傍に記せる所少からざれども、此はヤコブと吾人に向ひてヤコブは歩行はかどらざるも全く死するにあらざりて、吾人にも亦彼の如くヤコブとイスラエルの兩性質あることを思ひ出さしむ。次に來る事件を述ぶるには近來の或る獨逸の著述家の言を以てするに如かず、曰く『ヤコブはエホバの使者と争ひて祈禱と懇願を以て勝ちしが、今謙遜と柔和を以て四百人を従へて彼を迎へんとしたるエサウにも勝てり』と。已に言へるが如く、エサウはセイル山を攻撃し、之を占領せしが、其の後其の地に移住したり(創三六・六・七)。是れ其の從者を伴ひ行きし理由にて、復仇の心を以て弟を驚かさん爲か、或は自己の優勢なるを現さん爲なりしか、或は其の弟に對する態度に就き未だ心を定めざりしが故なりしやも計り難し。兎に角神の攝理に導かれ、又『ヤコブの謙遜と己の親切の情に任せ、エサウは弟を抱きて其の頸をかゝへて之に接吻せり。而して不本意ながらも



彼はヤコブの豊なる禮物を受け、其の行先まで武装せる従者を率ゐて伴はんとせしかども、ヤコブは親みつゝも叮嚀に之を謝絶せり。斯くて未く疎遠なりし兄弟は已に和睦し、又死に至るまで相和ぎたり。

ヤコブが斯く兵を伴ふことを謝絶せしは、己を護衛するに地上の兵を要せずと思ひしに因るのみならず、家畜及び幼者がベドインの軍人ほど速に歩むことを得ざるが故にもよりしなり。故にエサウはセイル山に歸りて其處にて弟の來るを待ちしが、ヤコブは西北に向ひ、ヨルダンの東にありて後にガドの支派の領地となりしスコラに行き、其處に暫く留りしならん。蓋は彼己の爲に家を建て、又家畜の爲に廬を作れり」とあるを見れば也、是れスコラ即ち『廬』の名の起る所以なり。遂にヤコブは再びヨルダンを渡りて『悉なくカナンの地にあるシケムの邑に至れり』。此の語はヤコブがベテルにて『安然に歸る』ことを得しめ給はんことを願ひし如く(創二八・二二)、神の豊に應答へたまひしことを示すものなり。然るに其の間に此の地に大なる變化ありき。アブラハムが此の地に入りて之を第一の休み所とせし時には、邑なく唯『シケムの處』と稱せられたりしが(創一二・六)、此の時は其の近邊は人の所有に歸し、畑を作り又邑を建てたり。シケムの父『ヒッ人ハモル』これを建て、其の子の名に循ひて之を名けしならん(創四・一七を参照すべし)。ヤコブ『天幕を張り』、此の地を『ハモルの子等』より買ひ取りしが、此は後にヤコブが『産業』として其の子ヨセフに與へ(創四八・二二)、

又『イスラエルの子孫のエジプトより携へ上りしヨセフの骨』を葬りし所なり(書二四・三二)。然るに之よりも尙一層興味あり、由緒ある所あり。蓋はヤコブが其處に掘りし井のことなり。その井の傍にて、千數百年の後ダビデの裔なるイエスは坐して、彼の憐れなる罪人たるサマリヤの女に對し、『永遠の生命の水の湧き出づる泉』につきて語り給へり。其の女は『永遠に渴くことなき』水を『飲み』て祝福せられし異邦人の始なりき(約四・一四)。ヤコブ此處にて壇を築き、之をエル・エロヘ・イスラエル、即ち『イスラエルの神なる神』と名けたり。

ヤコブのシケムに留ることは新しき試煉の源となれり。想ふに當時十五歳位なりし其の女デナは、聖書によれば『其の國の婦女を見んとて出で行けり』。或はユダヤの歴史家ヨセファスに因れば、シケムの人々の祭の宴に與らんとてなり。斯く輕率にも非宗教的祝宴或は偶像祭の宴に與れるに因り、恐るべき警戒の來るは寧ろ當然なり。其の結果の第一はデナ凌辱を受け、次にイスラエル人とヒッ人との同盟の相談起りしが、勿論これに對してイスラエル人は同意すること能はざりき。終にシメオンとレビが甚く復仇せんとて欺きてシケムの男子を悉く殘殺せしこと是れなり。ヤコブは此の殘酷に甚く心を痛めしことは、數年後其の臨終の時に左の如く語りしに因りて著しく現る、曰く『シメオン、レビは兄弟なり、其の劍は暴逆の器なり。我が魂よ、彼等の席に臨む勿れ。我が寶よ、彼等の集會につらなる勿れ』(創四九・五、六)と。



然れども其の罪の結果の一は偶然にもヤコブに利益を興へたり、即ち彼はシメオンとレビの欺瞞と残酷を行ひし所より離れざるべからざるは明白なりき。其の際神はヤコブにベテルに歸り、兄エサウの面を避けて逃ぐる時に誓ひし約束を果さんことを命じ給へり。ヤコブはメソボタミヤを離れて少くも十年になりしならんに、未だ神に對して誓ひし所を果さざりしなり。次のことより考ふるに、此はヤコブの家族が未だ全く偶像を棄てず、又ヤコブも弱くして之を棄てしむることを得ず、之が爲にベテルに行くこと能はざりしに因る。然るに今やヤコブは「其の家人および凡て己とともなる者に云ふ、汝等の中にある異神を棄て、身を清めて衣服を易へよ（此は身を清める象徴なり）。我等起ちてベテルに上らん」と。而して凡てのテラピムと偶像とを「シケムの邊なる」橡樹の下に深く埋めたり。ベテルに着せしときに一の感動すべき出来事ありき。其の時に「リベカの乳媪デボラ死にたれば之をベテルの下にて橡樹の下に葬れり。是によりて其の樹の名をアロンバクタ（哀哭の橡）と云ふ」と。斯くデボラが永くイサクの家に忠勤を盡して事へしこと、又此の節操高き婦人の爲に家のものが哀哭せしことは、聖書の中に永久に記念するに足るものと思ふ。デボラがヤコブの家に死せるに因りて、其の女主人リベカが既に死せることも、又ヤコブがカナンに歸りし後イサクと往來せしことも推量することを得。ヤコブは其の老いたる父を訪問せしならんも、契約の歴史に關係なきに因り聖書は之を記さず。ベテルにて神再びヤコブに現れ、重ねてイスラエルの名を興へ、又嘗て契

約せし所を再び堅くし給ひしが、ヤコブは其の誓を果し、又再び其の處をベテルと名けたり。彼等はベテルより進みてイサクの住所なるマムレに至れり。途中エフラタ（豊饒）、後にベテレホム（パンの家）と稱せし地（米五・二）より少し離れたる處にて、ラケルはヤコブの十二人目の子を生みて死にたり。ラケルは其の子にベノニ（吾苦痛の子）と名けんと欲せしが、父は之をベニヤミンと名けたり。右に就ては種々に註解する者あり。『右手の子』、『老年の子』、或は十二人目なるに因りて『幸福の子』と解す。耶三一・一五に因ればラケルは實際ラマにて死せりと見ゆ。『ヤコブその墓に柱を立てたり』。デボラの橡樹は士師の時代に、該樹よりも有名なりし同名者デボラが「エフライムの山のラマとベテルの間」（士四・五）にて其の樹蔭に住ひし時まで知られたれば、ラケルの墓の印とせし柱はサムエルの時代には境界標となれり（母前一〇・二、三）。ミゲダル・エデル（群の觀望樓）にてヤコブの家は再び罪の爲に汚されたりしが、ルベンは之に因りて家督の權を失へり（創四九・四）。ヤコブは其の旅終り、即ち「アルバのママレに往きて其の父イサクに至れり。是れ即ちヘbronなり、彼處はアブラハムとイサクの寄寓し所なり」。此處にイサク百八十歳にて死せることを記せるが、其はヤコブがヘbronに着せし十二年後のことなり。イサクの死せしは、ヤコブと其の子等がエジプトに住居せし十年前なりしをもつて、イサクはヨセフがエジプトに賣られたるためヤコブと愁歎を共にせしまで生存したり。然るに其の聖書歴史は已にイサクより移りしのみならず、以



後の事件に於てヤコブすら唯之に間接の關係を有するのみなりき。蓋は之より以後主なる興味の中心點はラケルの長男ヨセフにして、其の傳を以て引き續き歴史を記せばなり。

ヤコブはメソポタミヤに住きし時七十七歳なりし故、ヘブロンに歸りし時は百八歳なりしは疑なし。イサクは其の時百六十八歳なりき。蓋は創二五・二六に記せる如く、ヤコブが生れしはイサクの六十歳の時なりければなり。然るにヤコブの年を尙二十年少しとする説は、彼がパダンアラムに遷ぐる時に五十七歳なりしとする他の年代記あるを以てなり。

### 第十九章 ヨセフの幼時—兄弟等に賣られて奴隷となる

ここ—ポテバルの家に在るここ—入獄のここ

(創三十七章—三十九章)

其より後の事を正當に知らん爲には、父祖等の個人の歴史がヤコブを以て終れること、否寧ろイスラエルの子孫の歴史即ち家族及び支派の歴史に變れることを忘るべからず。ヤコブが選民の先祖となるべき十二人の子の父となりしことにより、個人たる父祖等に對する神の聖旨は成就せられたり。是故に神自ら個人に顯現れ給ふ事は止みたり。唯一の例外は其の後ヤコブがエジプトに下らんとする際、神はイスラエル人がカナンより移るは聖旨に適へる事と、其の豫定の時に彼等を再び約束の地

に導くことの必要なる保證を示さんとて、ヤコブに顯現れ給ひし事なり。先づ諸の點より之を見るに暫時の此の移住は肝要なりき。即ちアブラムに對して始めて約束を結び給ひし時の預言の成就せらるゝことにして(創一五・一二—一七)、又ヤコブの子等を其の地の土着人と區別するために必要なりき。常にカナン人と交際する場合には、最も善きものすら容易に恐るべき悪習に陥るべきはユダの歴史に因りて明瞭なり。即ちヨセフを賣りし後彼は父の家を離れ、カナンの人々と交際し、自己と其の親族が速に同地の忌まはしき習慣に同化したり(創三八章)。此の移住は、神が腕を伸べ徵證と奇跡とを以て彼等を奴隷たる家より導き出し給ふ時、即ちイスラエル人の將來の歴史の準備のためにも必要なりしなり。この國家建設の大事事件はイスラエルの國民史の基礎となり又起源とならんとせしが、其の以前の奴隷たる卑しき有様もイスラエル人の全體の歴史たると共に、又教會と各個人が神の大なる恩に因りて、靈的奴隷たる有様より救ひ出さるゝことを代表す。更に又エジプトに移住することに関係せる諸の事件は、全イスラエルの子女等の教育のため、殊に神がヨセフを豫定し給ひし位置に適はしむるやう教育するために必要なりき。加之ヨセフは新約聖書に於てキリストの表象として記せる所なしと雖も、其の歴史は其の賣らるゝことに於ても、其の最高位に上げられしことに於ても、其の民の生命を救ふことに於ても、又其の民が遂に之を信じて改心するに至ることに於ても、著しくキリストの表象なりしことを忘るべからず。然るに神は世の始より人の凡ての所



作を知り給へるなれども、何人も神の聖旨を各自其の分に應じて成就しつゝあることを自覺せず、己の自由に從ひて意の如く行ふことを許されたり。神の攝理の奧義は此處にあり。即ち見ゆる如く働かざれども常に奇跡を行ひ給ふ故、人これを認めざることを屢次あり。其の攝理は生きて働く人々には黙して氣付かれざれども、終に『凡てのこと神の榮光を顯し、『神を愛する者、すなはち御旨によりて召されたる者の爲に相働きて益となる』ことを認めしむるまで其の道を進むものなり。

聖書に記されたるヨセフの歴史は彼が十七歳以後のことにして、父祖の家族の有様を詳に吾人に示せり。ヨセフは其の兄弟等と同じく家畜を牧することを業とし、概ねレアとラケルの仕婢なるピルハとジルバの子等と偕に在りしが、之に由りてレアの子等とラケルの子等との間に悪感情と嫉妬の蟠りしと見ゆ。こは各自の特性の異なり、又ヤコブが其の愛せし妻の子を偏愛するに因りて其の妬忌は益々深くなりたり。ヤコブの子等の行爲は親の意志を顧みず、粗暴且つ不法なりしが、ヨセフは其の祖先の最良なる特性を有せり。即ちアブラハムの如く分別ありて志堅く、イサクの如く温順堅忍にして、又ヤコブの如く愛情深き人なりき。彼の行爲は大に其の兄弟等と異なれり。然るに其の特性の將來頼むに足る點こそ、却て道徳上危険の原因たるべきこと知り難しとせず。ヨセフの先祖の歴史中之につき著しき例少からず。就中彼が敬ふこと能ざりし兄弟等に服はれたること、父に偏愛せられたることとの二の試惑ありしは青年にとりて、尙一層危険なりしにあらすや。神に

就ては多く教へ、人間に就ては少く知らしむる聖書は、沈黙して唯暗示を與ふるのみなりと雖も、それは意味深長なり。記して曰くヨセフ其の兄弟等の『悪き事を父に告ぐ』と。又曰く『イスラエルその諸の兄弟よりも深く之を愛せり』と。右はヨセフの家庭の有様の一面を現す。若しヤコブが己の『老年子』に與へし『緑れる衣』は、單に價高く或は華美なる衣たるに過ぎざりしものとするも、屢次家庭内に傷ましき感情を惹起す厭ふべき偏愛の記號なりしならん。時は分秒の集つて成る如く、人生に於る小き行爲も積れば大なるものとなるなり。これは實は『緑れる衣』にあらす、君主及び貴顯の着用する手と足まで垂れたる衣にして、ヤコブがヨセフに家督の權を與へんとする意志なることを兄弟等に餘りにも明かに悟らしめたり。吾人はレアの三人の年長の子等、即ちシメオンとレビとはシケムにてなしたる残酷に因り(創三四・二五、二六)、ルベルは『エダルの塔』の邊にて犯せし罪に因り(創三五・二二)、各々其の權を受くるに足らざるを知る。然ればヤコブは彼が元來唯一の妻にせんとせし者の長男に其の權を與ふるよりも當然なることあらんや。兎に角其の結果たるや其の兄弟等は『彼を惡み』、遂に聖書の言によれば『穩和に彼に物言ふことを得せざりき』、即ち『汝に平安あれ』と云ふ同地方の普通の挨拶すら彼と爲さざりしなり。

スミス氏の聖書字典に曰く、『古代エジプトの上流社會にては白麻の長き衣を着たりしが、エジプトの古碑に敵或は從屬者として描出さるゝパルステナとスリヤの人々も、之に類する衣を着たり。而も其は緑りて、概ね其の襟と袖の縁に線ありき』と。



斯る不穩の感情ありしにより唯機會を得ば暴行に移ることは容易なりしが、日ならずして勃發したり。已に述べたる事情に因りて、ヨセフが將來權を取ることを現せる二の夢を見しは當然なり。吾人は其の夢を以て神の明白なる指示なりと承認すべきも、聖書は其の夢が直接なる默示なりとは記せず。又之を其の家族に知らしむべしと命ぜられしとも記さざるなり。此等の夢の第一の比喩的説明は田園生活より取り、第二は牧人生活より取れり。偕て其の第一の夢に、ヨセフは其の兄弟等と共に畑の中に在りしが(之に因りてヤコブもその父イサクの如く地を耕したりと推量するを得べし)、ヨセフの禾束は起き且つ立ちしかば、其の兄弟等の禾束は之を拜せり。第二に於ては家族共に群を牧ひ居りしに、日と月と十一の星ヨセフを拜せり。前者は其の兄弟等のみに知らしめ、後者は父にも知らしめたり。『其の夢と其の言の爲に益々これを惡めり』と記せるを見れば、彼のその夢を知らしむる態度に何か格別に感情を害ふべきものありしならん。父ヤコブすら之を戒められたるも、聖書に彼はヨセフの『言を憶えたり』と意味ありげに附記したり。現今見る所に依れば此は預言的の夢なれども、當時に於ては然りしや否やを判断することを得ず。又ヨセフが知らしめし言によりて之を考ふれば、此は唯偏愛せられたる青年が徒らに高慢に陥り、空想の結果に過ぎずとも思はれしならん。其の實は唯將來に於てのみ知らるべかりしなり。然るに靈性上の發達を謀るため、彼は當時の境遇を離れ、又我慾を根絶すべき所に移さるゝはヨセフの爲に必要なりき。されど斯る結果を生

ぜしむる教育は唯一の外なし、即ち艱難の教育是なり。

ヤコブの子等がシケムの近傍にて其の羊を牧ひ居りしが、ヤコブは其の安否を問はんがためヨセフを遣しければ、ヨセフは身の危険を知らず其の使命を果す爲に急ぎ往けり。ヨセフの其の兄弟等に遇ひし處はシケムにあらずして、或人がヨセフに教へしドタン(二の井)にてなりき。此處に彼等は移り住めり。ドタンはサマリヤより約十二哩を隔てたる地形好き處にして、北には肥えたる牧場地あり。又エスドラエロンの大平原との間には僅なる丘あり。其の地位よりすればエスドラエロンに通ずる路の門戸にして、エフライムのみならずパレスチナの北方の通路を扼する地なりき。其の山の一の峯の上にドダンの廣き古跡現今も猶見ゆ。又其の山下の南方に湧出する清冽の井あり、この井はドダンの名の原因となりし二の井の一ならん。後年ギデオンは此の山より降りてミデアン軍に當りし事あり、又ヨセフが其の兄弟等を捜し當て、又阱に投げ入れられしも此の處なりき。ヤコブの子等は徒らに神の聖手を止めて其の言を行はざらしめ、其の動作を妨げんと欲して其の弟を賣らんとせし時、彼等がアラビヤの隊商のヨルダンよりエジプトに下り來るを眺めたるは、此の山の峯よりなり。

吾人の豫期したる如く、ヨセフの遙か彼方より來るを見るや、其の兄弟等は直に人なき所にて之を殺さんと心の起せり。是こそ『作夢者』と、彼の見し『夢』とを處理するに最も容易き手段なるべ



し。ルベンのみ獨り之に同意せざりしかども、此は弟を愛する爲にあらざる、乃ち其の父の事を思ひたればなり。其の血を流すは無益なりと云ひて阱の中に投げ入れ、其處に棄て、亡すことを偽り勸められたれば、皆早速これに同意したり。彼實は窃に救ひて父に返さんと欲せしに因る。或キリシヤの著述家は其處の阱に就て記して曰く、其の阱は規則正しく掘り又塗りて、下にゆくほど廣く、底は百呎四方程のものもありと。かゝる所は乾きて水なき時、又は底に泥のみある時には避所或は假の獄に用ひたりしこともあり(耶三八・六。賽二四・二二)。ヨセフは斯る阱に投げ入れられ、其の兄弟等は何かの仕事に一段落をつけしが如く、知らざる顔して食事につきしが、其の時殆んど偶然とは言へ、實は神の攝理に因り、アラビヤの隊商が、遙か向より來るを見たり。彼等は香物の生ずるギレアデより、ヨルダンを涉りてガリラヤの湖の南、又エズレルの平野を過ぎ、其處より海邊に沿ひ、所謂太古ながらの路を経てエジプトに往かんとせり。今度は又一人の兄弟の厚意の爲に、ヨセフは却つて大危険に遇へり。即ちルベンは後に彼を助けんとてヨセフを『阱』に投げ入れんことを勧め、以て殺ふことを止めしが、ユダは彼をアラビヤ人に奴僕に賣り、以て其の生命を助けんと欲したり。然れども何れも皆其の不實と罪惡を率直に拒む程の勇氣と正義心なく、再び他の兄弟等は慈悲の勸めなりと思はれし意見に従ひたり。其の約定は速かに整ひ、銀二十枚にてヨセフを『イシマエル人』に賣りたり。後世五歳より二十歳までなる男の奴僕の價は平均銀三十シケルにして(利二七・五參

照)、即ち普通のシケルの倍價なる聖所のシケルを一圓四十錢とすれば凡そ四十圓位なりき(出二二・三二)。ヨセフを賣りし時ルベンは已に歸りて居らざりしが、痛く悔いて其の『衣を裂き』たれども徒然なりき。他の兄弟等は其の父に『惡き獸彼を食へり』と思はしめんとて、ヨセフの立派なる衣を山羊の血に濡して、其の目的を達したりしが、ヤコブは『久しく』これがために哀きて、其の子女等の偽善なる慰藉を拒みたり。然れども其の最も悲しむべき哀哭の中にも、後の世に於て其の愛子に遇ふことを得べき信仰と希望を言ひ表せり。記して曰く『我は哀きつゝ陰府に下りて我が子の許にゆかん』と。

後其の兄弟等の偶然の自白によらざれば(創四二・二二)、ヨセフが泪と懇願を以て其の兄弟等を感動せしめんとして徒らに失敗に歸せしこと、彼がエジプトに往きし旅行とは、吾人の殆んど知り得ざる所なり。彼が其の新しき主人の隊伍に従ひて往く時に、其の父が彼の悲惨なる運命を知らずして其の愛子の歸ることを待てる、ヘブロンを遙に見しことならん。されど其の家には其の後歸りしことなかりしなり。次にヨセフに就て記せる所は、エジプトの奴僕の市場にして、此處にて『エジプト人ポテバル、パロの臣侍衛の長なる者彼を……イシマエル人の手より買へり』。ポテバルてふ名はエジプトの石碑にベト・バラ、或はベト・ブラ(ラ即ち太陽に献ぐとの意)と屢々彫刻しあり。或著者の言によれば、ヨセフが賣られてエジプトに下りし時は、全國一致の朝政を受け居らず、諸朝



共にありて牧王の第十五朝は其の重立ちたるものにて、他は之に服従なし居たり。兎に角ヨセフはエジプトの最もパレステナと密接なる關係ある地方に擧へ行かれたるなり。ポテバルはパロの朝廷に於る執行長官にして、多分現行欽定譯聖書に記せる如く其の侍衛の長たりしならん。ポテバルの家はヨセフの行爲は、以前其の父の家に於る時と同じかりき。蓋は吾人の性質は福と災との事情によりて變するものにあらざればなり。小事に忠しき者は大事にも忠しく、又其の預けられし物を正しく用ふことを知らざる人は其の有つ物をも取らるべし。ヨセフは地上の主の事に事ふることによりて常に臨在を信じたる天の主の事に事へしに因りて、忠義正直公平にして又良心の責なからんことを努めたり。是故に「エホバ、ヨセフとともに在し」、又「彼の手の凡てなす所を亨通しめ給へり」。其の主人は速かに之を見て彼が普通の奴隷と異なる故に、「ヨセフに其の家を宰らしめ、其の所有を盡く其の手に委ねたり」。かくヨセフを信用することは大に利益ありき。蓋はエホバの祝福ポテバルの有てる凡ての物に及べり。而して彼は「其の有てる物を盡くヨセフの手に委ね、其の食ふパンの外は何をも顧みざりき」。古代のエジプトの墓に彫刻し、又畫きたる所は、ヨセフの日々の行爲と職務とを明かに現せり。貴顯の所有は其の家扶の宰るところにして、家族は農業、園藝、家畜、漁業等を整然且つ綿密に監督し、又エジプトの労働者は毎も不正直を以て評判高かりしかば、彼等の不正を防がん爲に其の生産物を丁寧に勘定せり。エジプトほど農業の組織立ちたる國は他にあらざりき。

ヨセフは已に家畜を牧ふこと、又は農業に就て經驗あり、且其の正直なる性質は眞に監督者の地位に適當なる者なりき。彼が此の任務に當りし年間に就ては記する所なし。

此處には概ね承認せられし説を出せりと雖も、或人の説に従へばヨセフの買られしは第十二朝の終にして、即ち牧王政治の前よりしとする理由もあり。この問題に就ては次の部に於て詳細に論ずる所あるべし。

熱心に神に事ふること、正しきこと、この世に於ても必ず成功を伴ふべしとするは屢々聞く所の謬想なり。神を日なり盾なりとする者に神は善きものを拒み給ふことなしと雖も、成功は必ずしも其の人々の利益にはあらざるべし。加之神は其の聖徒の信仰と忍耐を試み給ふこと少からず。此は數々試煉の與へらるゝ理由なるが、靈の教育に於て、或は艱難によりて神の榮光を現さんかたに肝要とすること更に多し。ヨセフは將來占むべき位置の準備として靈肉共に試みられたり。ヨセフが其の母の美しきに似て美しかりしに因りて、主人の妻より誘惑を受けたり。當時のエジプトの社會の状態を知る者は之を怪しとせざるべし。ヨセフは獨り神を知らざる國と家庭にありて、其の道徳心を鈍くせしめ、又之に因りて誘惑を一層強からしむる境遇に置かれたり。又彼は吾人に比すれば、神の律法の深奥なる點を完全に知るところ少かりき。且其の兄等の惡しき行爲を見しことは、其の敬虔を深からしむべきにあらざれども、其の主人に對する廉直の念よりと、殊に「大なる惡を爲して神に罪を犯す」ことの恐怖よりして、斷然惡を排斥したり。然るに彼は其の主義の爲に



却て益々災害を大ならしめたり。斯る例のよくある如く、婦人の烈しき色慾は烈しき妬忌と變じ、忌まはしくも彼を誣告せんと心をめぐらせり。されどポテバルは其の妻の物語の全部に信を措かざりしと信すべき理由あり。何となればヨセフが訴へられたる罪に對するエジプトに於る刑罰は、ヨセフが實際受けしよりも尙一層苛酷なりければなり。ポテバルが彼を入れたる牢獄は王の囚徒を繋ぐ所にして、ポテバルは侍衛の長なるに因りて又之が典獄たりしなり。始めに彼の辛苦の如何に甚だしかりしは、詩一〇五・一七、一八に因りて明白なり。曰く『彼等の前に一人を遣し給へり。ヨセフは賣られて僕となりぬ。彼等足械をもてヨセフの足を害ひ、鐵の鏈をもて其の靈魂を繋げり』と。

近ごろ翻譯せられし二人の兄弟に之に類似せるエジプトの物語あり。大に聖書の記事に似たれば、ヨセフの審判に基きたるものなりと思はる。或人は然らずと思へども、あらゆる證據は此の説を確實たらしむるを信す。

今の有様と前の預言的の夢との間に於る相異より更に甚だしきものあらんや。然るに猶ほヨセフは屈せざりき。而して神を疑はず信仰に憑りて歩むことと、見ゆる所に憑りて歩むこととの區別を現さんとて、聖書は左の如く記せり。『エホバ、ヨセフと偕に在して之に仁慈を加へ、典獄の恩顧を之に得させ給へり』と。間もなく其の廉直は愈々現れければ、囚徒の監督をヨセフに委ね、又『エホバ彼のなす所を榮えしめ給ひ』たれば、遂に獄の事一切をヨセフの手に委ぬるに至れり。斯くてエ

ホバは此處にも眞誠なる契約の神なることを證し給へり。暗雲の彼方には白光漸く輝き始めたり。されど尙忍耐をして全き活動をなさしめざるべからず。

## 第二十章 ヨセフ入獄のこゝろ——パロの二人の官吏夢を

見るこゝろ——パロの夢——ヨセフ立身するこゝろ

——ヨセフ、エジプトを支配するこゝろ

(創四〇章、四一章、四七章二二—二六)

ヨセフ賣られてエジプトに行きしより、已に十一年を過ぎしかども、嘗て見し夢に於る神の約束は成就せらるべき望なく思はれたり。ヨセフは『典獄』を補佐し、之によりて彼より受くる恩典の外には何の望も無く、此の憂き月日の大部分を獄中にて過せしが、暫時にしてヨセフの境遇に一の變化を仄かすべき左の事件突然として起りたり。即ちパロの官吏の長二人は、眞の罪の爲か或は唯嫌疑の爲なるや知り難けれども、『罪』を犯し職を免ぜられて獄に囚はれたり。此の『酒人の長』と『膳夫の長』は侍衛の長に渡されたりしが、此の人はヨセフをして此の二人を親しく見張らしめたるを見れば、彼は此の時ポテバルの後任に擬せられしならんか。此の二人が獄に入れられて多くの日を



過ぎざる間に、神の攝理の直接の導に因りて同夜に感銘すべき夢を見たり。翌朝同じく神の導に因りてヨセフは彼等の心配らしき様を認め、其の理由を尋ねたり。ヨセフが直に猶豫せずして其の夢の眞意を彼等に傳へ得たるは、直接神より示されたるものとせざるを得ず。

右の點につきヨセフが認めたる所は殊に吾人の注意を牽く。若し彼等自由なる身分にてありたらんには夢を「解く者」を探して相談したらんも、今はその術なくして困しめる彼等を見て、彼は神に頼るべきことを勧め、「解くことは神に因るにあらずや」と云ひて、「己に其の夢を語らんことを求め、同時に自ら全く神に依頼みて以て其の夢を解明すべき準備を爲したり。一言すれば彼は遂に其の夢の意味を曉り得べきや否やに關せず、エジプトの法術士の如く自ら權あり智慧ありとせず、唯神を信じて之に依頼みたり。

ヨセフが斯く夢を説明することの容易にして又理に合へることは、直接神によつて示されたるものなることを一層堅く信ぜざるを得ず。蓋は自然的の事を超自然的に實行せしむることに於て、神の直接に干渉し給ふ所を最もよく認むればなり。夢は全く自然にして、之を釋くことも亦自然なりしが、兩者ともに直接神の知しめし給ふ所なりき。パロの誕辰に「其の諸の臣僕の爲に筵席をなす」ことを例とすることを知りたれば、其の三日前に酒人の長と膳夫の長が、夢の中に各自再び其の務をなすことを夢みしは當然の事ならずや。又パロが斯る場合に其の賦に入れし官吏を思出し、之に

對して何事をか爲さんとするは當然のことならずや。終に酒人の長は其の良心に顧みて無罪を知り、再び其の主人の前に事へ、膳夫の長は良心に責められ有罪を知りて、彼が從來主人の膳部に供ふる爲に作りたる饌を入れたる筥の中より、鳥の食ふを見たるは更に當然の事ならずや。

茲に吾人はヨセフが夢の解明の凡ての要素を知る、後にパロを惱ませたる夢を解くに於ても然り。一たび解釋せられて見れば實に明白なることも、エジプトの法術士と博士等には曉り得ざりしなり。然れば何時も神の照し給はざる間は漠然として知り難きものなり。

已に述べし如く、其の二の夢の譯は同一にして、兩者ともに三なるは、酒人の長がパロの盃に榨りし葡萄の房に於ても、膳夫の長が王の饌を供へし筥に於ても、孰れもパロの誕辰の三日前を現せり。兩者ともに未だ罪せられざる以前の有様を示したるにて、唯其の相違は一はパロが其の役員の職務を嘉納し、一は屍を食ふ鳥が其の筥の中より食へるにありき。酒人の長は其の主に対して良心に疚しき所なかりしを以て、始より好んで其の夢を語りしが、膳夫の長は己の罪あるを知りしが故に、其の友の夢の善き説明に勵されてのみ自らの夢を語りしは當然なり。此の物語の眞誠なる證據として、其の夢の詳細がエジプトの風俗に適應することを認めざるべからず。元來聖書を攻撃する者はエジプトにて葡萄を作り、又用ひしことを否認せしかども、同國の古碑に因りて明白に之ありしことを證せり。又同じ古碑に因りて、同國には菓子を焼くことの頗る進歩したるをも見るべければ、



宮廷に膳夫長なる官職のありしことを解し得るなり。其の館を運ぶ風俗も、他國に就ては一概に云ふことを得ざれども、エジプトにては男は頭の上、女は肩の上に載せたり。

其の事件は遂に實現して、ヨセフの解明の眞正なるを現せり。即ち其の夢を見たる三日の後、パロの誕辰の筵席の時、酒人の長は其の職に復りしが、膳夫の長は木に懸けられたり。ヨセフは酒人の長の夢を解明せし時に、誣告の爲に自ら苦しめる彼に向つて、其の職に復るに至らば、初め「へブル人の地より掠はれ來りて」久しく無法にも獄に入れられ、又殆んど放免せらるべき望なき我が身を憶えんことを願へり。ヨセフが斯く願ひしは唯放免せらるゝことを望み、若し然らば或は父の家へ歸るを得んかと思ひしが故ならん。彼は未だ自己に對する神の計畫の如何を全く知らざりき。況んや高慢なるエジプトの宮内官吏が、争で獄にある憐むべきへブルの奴隷を顧みんや。其の盛んなる日に「酒人の長ヨセフを憶えずして之を忘れたる」は唯人情の常なるのみ。

彼は尙獄中に二ヶ年を過せしが、此は前よりも彼に取りて一層物憂く、又謂はゞ望なき時なりしならん。然るに遂に俄然として思はざる救を得るに至れり。此の度はパロ引續き二の夢を見たり。第一は七の肥えたる牝牛ありてナイル河の岸に茂れる「葦」を食ひ居りしに、他の七の瘦せたる牛あり、「河」より出で來りて其の肥えたる牛を食ひ盡せしが、更に太らざりしことにして、第二は一の莖に七の「肥えたる佳き」穂出でしに、其の傍に同じく一の莖に「東風に焼けたる」七の穂出で來りしが、

『その七のしなびたる穂かの七の肥えたりたる穂を吞み盡せる』ことなりき。此の夢は躍如としてパロが之を事實と思ひし程なりしが、『パロ窺めて見るに夢なりき』。唯夢なれども事實の如くに思はれて忘るゝことを得ず、之を解明さんがために「エジプトの法術士と其の博士を皆悉く召したり。然るに彼等は何等かの解明を試みざりしに非ざるべけれど、其に由りてパロを満足せしむる能はざりき。斯る困惑の際に當り、其の主人の失望を見て酒人の長は二年前に、己と膳夫の長とが夢を見てヨセフの之を解明せしことを思出せり。而して此の事件が果して「二年の後」、即ちパロの誕生の記念日なりしとせば、如何に自然にして更に又印象深きことにあらずや。

先に進まざる中に此の物語の繪畫の如き點、及び其の歴史的事實を驚くべく描寫せる詳細を認むべし。先づ第一に其の物語のエジプト的特性を認めざるべからず。其の「河」とは同國の富源なる聖きナイル河にして、パロは其の濱に立ち居りしなり。彼の「葦」てふ言はナイル河の岸に限りて生長する所にして、へブル語にては翻譯することを得ざるエジプトの語なり。又現に示すが如く、其の夢の全體の有様はよくエジプトの事情に適へり。其の他近來の研究に因りて、エジプトの「法術士」、及び「博士」につける聖書の記事の正確を益々明白に證したり。エジプトに於ては一國の宗教のみならず、科學に關することを委ねられし祭司的階級ありしことは疾に知られし所なり。吾人は法術がエジプトの宗教中に含蓄せらるゝを知るのみならず、今は其の古代の法術的儀式をも發見せり。又



殊に死人に關する彼等の呪及び呪符、吉凶の日と事件又所謂「悪しき目」に就ての信仰をも知り。然れども尙本論に關して緊要なるは、其の法術の書は「法術士」若くは學者、及び「博士」と譯すべき、二様の學者に委ねられしことなり。而してパロが其の夢を語りて何の益をも得ざりしは此の「法術」に熟練せし者、又祭司の最も貴き者に向つてなりき。彼等は此の世の智慧に於ては智者なれども、眞に愚者なり。最も學識ありと雖も、眞に無智なり。エジプトの熟練せし學者と、獄より呼出されし憐むべきヘブルの奴隸は何たる對照ぞや。前者は其の普通の學問の外に不可思議なる能力ありとせしが、後者は自己に力なく唯神に依頼あり。是れ聖書中最も大なる事件にして、當時に於て眞實なりし事は、主イエスの時代に於ても、パウロの時代に於ても、此の世の終までも同じきなり。記して曰く「智者いづこにか在る、學者いづこにか在る、此の世の論者いづこにか在る、神は世の智慧をして愚ならしめ給へるにあらすや」と。

然れどヨセフの解明を聞けば、眞に平易にして且明白なりしが、パロは之を信ぜざるを得ざりき。其の二の夢が一なるは明かにして、第一はエジプトに於る牧畜生活、第二は其の農業生活に關せり。一は牛の群にして一は農作物に關せり。兩つながら共に七の肥えたるものと、又之を食ひ盡して猶ほ始の如く瘦せたる七の者が出ることなり。前の夢の意味は明白にして、後者に因りて尙明かに之を説明せり。蓋はエジプトに於ては牝牛は地を養ふ女神アイシスの表象として貴ばれ、又象形文字

にては牝牛は地と農業と滋養の意味を表せばなり。而して其の牝牛はナイル河の岸にて草を食ひ居りしが、其の河の氾濫するや否やは其の年の豊作か饑饉かの分岐點なり。一の莖に多くの穂ある麥は、現今もエジプトに於て作る種類の一なり。既に言ひし如く、此の事吾人に於ては明白なれども、エジプトの博士等は其の王の前に黙然として立ちたり。ヨセフが召されて「急ぎて獄より出でし」は、彼が神につける證據ならずや。パロがヨセフに挑戦して「聞くに汝は夢を聞きて之を解くことを得ると言ふ」如何と、ヨセフは簡單ながら力強く信仰を以て、「我に因るにあらず、神パロの平安を告げ給はん」と答へたり。又ヨセフはパロの前に出る準備として「鬚を薙りたり」との記事を讀むとき、此の物語の眞實なるを認めざるを得ず。かゝる場合に於て斯くなすは、古の石碑に因りてエジプトの風なるを知ると雖も、ヘブル人に於ては例へば鬚を剃ることは耻辱とする所なりき。

ヨセフが謹んで明晰に解明せし所によれば、其の夢は先づ七年續きて未曾有の豊年の後に、七年續きて饑饉甚だしく、爲に前の豊作を忘るゝことを現せり。是れパロ及び「其の諸の僕臣」の直に承認する所となれり。彼はかく解明すと共に、最も智慧ある意見を述べしが、斯る困難の際に之を述べしは、人の智慧に優りたる所より出でたりとせざるを得ず（太一〇・一八、一九參照せよ）。ヨセフが王に勸めし所は、人民に命じて豊年の間地の産物の五分の一を納めしめ、將に來らんとする七年の饑饉のために王の監督の下に之を貯藏せしむることなりき。其の七年は非常の豊年なりしを



考ふれば、是れ過重なる税にあらず、又經濟上の方策として之を考ふれば、以前の苛税に比して大に有利にして、且其の國民を全き滅亡より救ふ方法なりしなり。終に尙一層高尚なる點よりして考ふれば、パロの臣民が納めし此の割合は、後にイスラエル人に天の王なるエホバの要求し給へる納税の基礎なりしは注意すべき事實なり。パロが斯く勸めし者を以て、直に其の勸めし整理の監督に任せしことは怪しとするに足らざるなり。彼は實にヨセフを歸化せしめ、其の首相に任じて、『エジプト全國の家宰』たりと公布したり。此處に於ても亦其の物語がエジプトの風俗を現すこと多し。先づパロ其の『指環』をヨセフに與へたりしが、之は印形にして古代のエジプト王が重んぜしものなり。而して其の姓名を記す時、楕圓形の印影の象に書すことを常とせり。次に高貴にして又祭司の衣の如き『白布』を彼に着せたり、之は同國の特産なる白色の光澤ある亞麻なりき。次にエジプトに於る高官に任ずる例に従ひ、『金の案を其の頂に掛け』、『己の有てる次の輅』に乘らしめ、『下にゐると其の前に呼ばしめたり』。(此の原文は『喜べよ』との意にして、臣下及び民衆之を呼びしならんとの説あり)。又ヨセフを歸化せしむる時、其の名をザフナテパネアと改めたり。此は『生命の支持者』、或は『生るもの、食物』との意義ならん。又之を『世の救主』と解する説もあり。又ユダヤのラビは、之を『秘密を啓示する者』の意なりとすれども、十分なる理由なし。終にパロはヨセフを國中の最も貴き者と同じ位にせんとて、『オンの祭司ポテバル(太陽に献ぐるの意)の女アセナテ(エジプトの

智慧の女神ナテより出づとの意ならん)を與へて妻となさしむ。ポテバルは同國の宗教的、文學的、又政治的の都なるヘリオポリス(『日の邑』)の祭司の長なりき。祭司の長を概ねパロの近親中より選ぶを常とせしは、殊に注意すべきことなり。然るにこの物語の中には何等非常のことあるなし。蓋はエジプトの産物は悉くナイル河に因れるが故に、饑饉は常に起り得ればなり。紀元千六十四年より千七十一年まで恰も七年間引續き饑饉ありしが、當時の驚愕はヨセフの賢き備荒方法を想起さしむるに足れり。又ヨセフが俄に立身せしことに就ては、東洋の歴史中如此例少からず。或るギリシャの歴史家はエジプト王の中に或る石工の子を、國中第一の智者なりとして養ふて子となしたるものありしことを記せり。この物語に於て注意すべきは、神が之を豫定し、又其の聖旨を行はしむる爲に用ひ給ひし不思議なる方法なり。

右は後にイスラエル人の宗教的及び慈善的寄附金を論ずる篇に於て詳述すべし。

此の點に就てはブル氏の説に同意するを得ず。同氏の説に因ればアセナテはエジプトの名にあらず、ヘブルの名にて『倉庫』との意にして、或るエジプトの婦人がメレデと結婚せし時、吾寧ろ改信してエホバを信せし時に妻女とせしビテヤ(代上四・一八)のヘブルの名稱に類似すと。ビテヤは『帳』或は『エホバの僕』の意なり。然れど此の處のアセナテはエジプトの名なるが如し。

ヨセフの拔擢せられし時は三十歳にして、我等の主イエスが『世の救主』、『生命の支持者』、『秘密の啓示者』として傳道を始め給ひたる齡に同じかりき。ヨセフの施政の歴史を左に簡単に述べん。豊



作の七年間、彼は「海隅の沙の如く甚だ多く穀物を儲へ、遂に數ふることを止むるに至れり」。これは穀倉充つるに至りて、書記其の容積を記せしことを示す所の古の石碑の描寫と著しく符合せり。其の後饑饉の至りし時、先づ金に代へて穀物を民に賣渡せしが、其の金罄きければ穀物の代に民自ら其の家畜を、終には其の田畑をパロに渡さんとせり。祭司等は直接パロに養はるゝ者なれば、其の土地を渡さざりき。かくパロは其の民の願に因りて、エジプトの土地と金と家畜とを悉く有するに至れり。其の時外國人が政事を執るとして不満足の點ありしとせば、こは一層有利なりしなり。ヨセフは斯く得たる權を取て濫用せず、却て深切を現し、爾後總ての税の代りに地の作物の二割を納めしむる法律を設けて、其の土地を民に返せり。右の事に就て已に述べし所の外に、エジプトに於ては凡ての作物はナイル河に因れるが故に、國費を以て經營する水道及び灌溉の方法は公衆のため必要なことを忘るべからず。然れど「パロの有とならざりし、祭司の田地のみ」は、此の徵稅より除外されたりとの聖書の記事は大に普通歴史家の記事に合へり。

第十二王朝の王アメンムハ第三世始めて完全なる水道を設け、又ナイル河の餘水を受け、之を分配せんとてモリスの廣大なる貯水池を造れり。

今述べしヨセフの歴史に於て卓絶したる二點を茲に掲ぐれば、第一は其の困難の時、主の聖手に因りて罪惡、不信及び絶望より護られしが、其の拔擢せられし時も高慢に陥らず、又エジプトの祭

司の長との密接なる關係に因りて墮り易き偶像教に入ることよりも亦護られたること、第二は自己をエジプトに在る「旅賓なり寄寓者なり」として常に其の父の家を望み、其の父の神及び其の父に對する約束を憶えたることは是なり。右の二の事實に就ては多くの證據あり。其の「饑饉の歳の至らざる前に」、ヨセフはエジプト人なる妻に因りて二人の子を擧げ、彼等にエジプトの名にあらす、ヘブルの名を付けたたり。第一子、マナセ(忘れしむる者)に因りて、過去の悲哀と苦難を忘れしめ給ひし神の恩恵を感謝せんとし、第二子、エフライム(多く生る)に因りて、エジプトはヨセフに「多くの子を得せしめ給ひし」國なれども、彼は之を以て未だ歡樂の地にあらず、「艱難」の地にして、又何時も然るべしと明かに認めたり。若しヨセフは順境に入りたりしに、何故其の健在なることと高位に昇りしことを父に通知せざりしやと問ふ者あらば、かゝる身上に於て安然たるを得るは唯神に倚頼みて靜に待つにありと答ふべし。ヨセフにして若し其の生涯の大教訓を悟り得たりとせば、其は過去に於ける萬事は神の攝理し給ふ所なりといふ事なり。神は引續き導き給ふを止むべくもあらず。益々其の途を教へ、又終まで導き給ふべし。而してヨセフは斯く信じたれば急ぐ事なし、斯くて神は崇められ、又ヨセフは神に依頼したれば安き上に安を以て守らるべし。

當時ヨセフは神が再び彼に其の家族と會はしめ給ふやう取計ひ給ふことを知る證據無し。况んや其の家族がエジプトに下りて彼に遇ふことを知る證據に於てをや。



第二十一章

ヤコブの子等穀物を購ふためにエジプトに到るこ  
 じ—ヨセフ其の兄弟等を見分くるこじ—シメオン  
 を獄に投れるこじ—ヤコブの子等ベニヤミンを伴  
 ひ再びエジプトに来るこじ—ヨセフ其の兄弟等を  
 試みるこじ—ヨセフ己を兄弟等にあかすこじ—ヤ  
 コブ家族と共にエジプトに下る準備をなすこじ

(創四二章—四五章)

今やイスラエルの歴史に於る決定的時期は到来したり。而して一切の事件は自然に行はれしが如く見ゆるも、實は超自然の攝理に基づく所なり。アビシニヤの山々に雨少く、又之と共にナイル河の減水に因り、パレスチナに旱魃と饑饉とを生ぜしむるに至れり。斯る困難の場合に於て、一方にはヤコブの粗暴なる子等が絶望の有様に立ちつゝあり、而して他の方には其の父の活動力が之に反して一層鼓舞されしは、よく各自の特性を表せり。記して曰く「汝等なんぞ互に面を見合するや……我エジプトに穀物ありと聞けり、彼處に下りて彼處より我等のために買ひ來れ」と。而してヤコブの

十人の子等之を購ふ爲に往けり。ヨセフの代りに父に愛せられしベニヤミンは偕に往かざりき。蓋は途にて「災難」の彼の身に及ばんことをヤコブが眞に恐れたると共に、其の子等を十分信ぜざりしに基因せり。

却説穀物を購はんとて多くの内外人共に來り集れる中にヘブル人ありき、而してヨセフはエジプトの最高位の官吏に相應する威儀を以て其の販賣を監督せり。例に習ひて、ヤコブの子等は其の「國の總督」の前に地に伏して拜せり。勿論彼等は其の容貌、衣服、言語ともにエジプトの貴族に等しき彼を見て、二十餘年前に彼等に「心の苦」を訴へて只管奴隷に賣らざらんことを願ひたる「青年」ならんとは知るよしも無りしなり。然るに兄弟等の方には以前に變りたる處なかりしに因り、ヨセフは直に彼等を見分けたり。然れども兩者の地位は全く變更したり。ヨセフは兄弟等が伏して己を拜するを見て、嘗て夢みしことを目前に思出せり。斯る場合に於てはヨセフ程の敬神家にあらずとも、神が其の聖旨を行はしめんがため、斯の如き攝理を用ひ給ふにあらずやと思ひしならん。かく思へば彼の私憤や立腹も心に起ることを得ざりき。然れば或人の考ふる如く、兄弟等に對する峻嚴を以て、其の後の行爲の重なる動機なりとす可らず。兎に角其の後間もなく、彼等が深く其の罪を悲みて悔悟を言ひ表せるときに、ヨセフは「彼等を離れ往きて哭きし」を見れば、尙怨恨を抱きしとは云ひ難し。思ふに、ヨセフの行爲は首尾一貫更に矛盾するところなかりしなり。其の兄弟等が彼の眼



前に顯るゝに因りて、神の聖旨は其の家族より彼を離らすにあらす、又彼を其處に歸らしむるにもあらず、唯兄弟等が彼に來り、且彼等の生命を救はしめんとて其の前に彼を遣し給へるなるを知るべし。然るにかく家族を再び合さんには、彼等はヨセフを奴僕に賣りたる無法の嫉妬心を是非とも全く改めざるべからず。彼は兄弟等に己をあかす前に彼等が心を改めしや否やを知らざるべからず。加之改心の實際を知らん爲には最も嚴重なる試験を経ざるべからず。

然りとせばヨセフの全行動を了解し得べし。先づ第一に彼等に疑を起さすること無く、ヤコブの子等を他の多くの購買者より別ち、其の家族の消息を知らんと欲せり。是に於てヨセフ自ら嘗て無力にして抵抗することを得ざりしが如く、専横の權を以て彼等に不當の悲哀を味はしめ、目前の苦難に因りて過去の罪を曉らしめんと欲せり。ヨセフは一の計畫を以て右の諸目的を達するを得たり。乃ちヨセフは其の兄弟等を以て穀物を買ふ風をして、國の占領し易き所を窺ふ間者なりとの難題を被せたり。當時のエジプトの有様に於ては無理ならぬ訴にして、又東洋に於ては稀なることにあらざりき。此は他人を離れて彼等と語合ふべき機會を與ふるのみならず、其の難題に對する彼等の辯解は家郷の様子を知り得べき機會となりぬ。蓋は彼等は其の罪なき事を主張するのみならず、斯る疑念の元來有り得べからざることを證すべく、之を證するには皆「一箇の人の子」なりと云ふよりも尙信すべき論あらす、何となれば何人も凡ての子の生命を斯く危険なる事業に當らすべき者なきを

以てなり。然るにヨセフは之にて満足せず、重ねて詳細に訊問して、其の父とベニヤミンの猶ほ生存することを知り得たり。而して其の自己を「居らすなりし」者とせしに因りて、彼等が以前の虚偽の尙繼續せるを見、その心の状態に就て疑を一層深くせしなるべし。然るに今困難に遇ふは彼等に其の過去の不義を認めしむるのみならず、神が早晚凡ての惡に報い給ふを認めしむるならん。加之ベニヤミンが父に愛せられ、其の兄弟等に對して以前ヨセフのありし境遇に立つが如き場合に於ても、之を嫉ます又憎まず、却てベニヤミンの爲に危険と耻を受くる時にも、彼を離れざるのみならず、彼に代つて之を受けんとせしならば、彼等は眞實に悔改めたるにて、二十年前の心は一變せしこと明白なり(以上はルーテルの説による)。ヨセフは右の主意に従ひ先づ其の兄弟十人を獄に入れ、而して其の云ひし所の眞誠なるや否やを試みんとて、ベニヤミンを伴ひ來らんと一人を免さんとせり。斯の如き峻嚴なる取扱を以て彼等を恐怖せしめんとせしが、三日の後、心を變へて人質として一人のみを留置くこととせり。斯くなすは「神を畏るゝ」が爲にして、彼等の罪無きことを知りて害を加ふるの心なきを示して彼等を勵したり。かくてエジプト人が「神を畏るゝ」ことと其の寛容とは、彼等がヨセフに對せし執念深き行爲と異なるに因りて大に心刺されたり。ルベンは曾てヨセフの生命を助けんとせしが故に抑留せられざりしが、其の次の兄シメオンは人質として残されたり。之に因りて彼等は以前の罪を思出し、今度始めて相互に其の罪を白狀し、又今神が之を罰し給ふことを認めたり。



彼等甚く心を痛めて、今まで通辯を以て語りしヨセフはヘブル語を知らずと思ひ、其の前にてヘブル語にて互に之を語合へり。ヨセフは亦己を現さざらんとて急に退きしが、彼の目的に就ては躊躇せざりき。シメオンは其の兄弟等の目前にて縛られ、他の者は去らしめられたり。然れど其の買取りし穀物の外に途中の食物をも十分に與へられ、且又彼等の買入代金を密に返したり。

此の案外なる事情に於る恐懼は、其の夜の旅邸にて其の一人が囊に金あるを見出せし時に一層甚だしくなれり。されど此の印象は前の如くに彼等のために有益なりき。されば之をも神の報復として互に曰へり、『神の我等になし給ふ此の事は何ぞや』と。

既に歸國して其の父に知らしむべき物語は悲しむべきものなりしのみならず、各自の袋に其のひとたび拂ひし金を密に返されしは、害を加へんとする計畫を現すものなりと思はれ、ヤコブも亦其の子等も尙一層懼れたり。ベニヤミンを伴ふことが再びエジプトの宰相なる人の前に出づる條件ならば、已に二人の子を失ひしヤコブは決して其の愛子にしてラケルの唯一人の遺子を斯る危険に晒すことを拒むるべし。ルベルは『我若し彼を汝につれ歸らざれば、吾が二人の子を殺せ』と云ひて其の安全を保證せしと雖も、此の言はヤコブを慰むるに足らざりき。蓋はヤコブの愁歎はシメオンの居らざるに因りて愈々増し、又ヨセフが再び其の家族に會合すべしとは夢にも思はざりしに因りてなり。

ヨセフが其の家族に遇ふべき機会を逸し、又其の父の愁歎を増せし理由を考ふれば、第一はヨセフは已に其の家族の境遇を知り、又シメオンが近くに居りしが故に、必要ある場合には何時にても父に遇ふことを得たるを以てなり。第二は其の兄弟等が彼等の使命に關して試みられ、證明せられ、また準備せらるゝ爲には其の父の愁歎を増すは止むを得ざる所なり。加之其の兄弟等が過去の罪を認め、神の報を直に感ぜしに因りて、ヨセフはこの事件につきて全く神の聖旨を識れりと思ゆるなり。然りとせば彼は續いて善を行ふ事に於て神に任せ、又神に信頼することを得るにあらざや。又否、この試に耐ゆるものとヤコブの信仰を信じ得るにあらざや。右にも左にも其の困難は暫時のみにして、又之より凡てのものに及ぶ好果少からざるべし。この事に就ても亦彼の意見の謬らざるを見る。茲にヤコブの子等のエジプトより持來りし穀物殆んど盡きんとしたれば、再びエジプト王家の穀倉に買入れの申込を爲すは是非とも必要となれり。今回ベニヤミンに代りて保證とならんとせしはユダなりしが、其の言ふ所は沈着にして愛情を現すと共に斷乎たるに因りて、彼はヤコブより熱心と善き目的を有する正直なる者の受くべき信用を得たり。然りと雖も祈禱と信仰に因れる一層高尚なる慰ありき。記して曰く『願くは全能の神、其の人の前にて汝等を矜恤み、其の人をして汝等の他の兄弟とベニヤミンを放ち還さしめ給はんことを』と。又若し神の聖旨然らずして其の子等を取り給ふことありとも、彼の信仰は揺がざるなり。曰く『若し我子に別るべくあらば別れん』と、



即ち何れに於ても神の聖旨を善と認め彼は之に任せたり。

此の弱き老人が苛酷なりと信じたるエジプトの宰相の怒を宥めんとして、震へる手にて何彼と準備せるを見るはまことに痛ましきことならずや。此の年は饑饉の年なれば東方より常に輸出する贅澤品の少かりしは自然なり。されば彼は其の子等に「乳香、少許の密、香物、没薬、胡桃及巴旦杏」の類を禮物として彼のエジプト人に贈らしめたり。又其の袋に入れて返されたる金は過ちて入れしならんとて、之を再び持参し、又今度買はんとする穀物の代金をも持参せしめたり。ベニヤミンも其の兄弟等もイスラエルの神の聖名に因りて行き、ヤコブはヤボクの渡に於る如く一人残りたり。否一人にあらず、信仰と忍耐を以て其の結果を待ちたりしなり。さて其の十人の兄弟等はヨセフが嘗てエジプトに往く途中、或は奴隸の市場に於るよりも尙一層不安を懐きつゝ、彼の恐るべきエジプト人の前に立ちたり。ヨセフは彼等を見、又嘗て家にて別れし當時僅に一歳なりし弟も借なるを見たりしが、斯る時と場合に於て彼等と語合ふこと能はざるは明かなれば、其の家宰に命じて彼等を己が家に導き、又午餐を共になす準備をなすべしと命じたり。ヨセフはヤコブの子等の知らざるエジプト語にて語りたり。彼等はヨセフの家に導かれたるを見て、前の穀物の代金を盗みしとして訴へられんことを惧れたれども、家宰は彼等が「家の入口にて」入ることを遠慮するを懇なる言を以て慰めたり。

彼等は直に免されたるシメオンに遇ひたれば、大に心を安んじたるならん。而して今や饗宴の準備は整ひたり。ヨセフは歸邸して其の兄弟等に面會せし時は心甚だ感ひしならん。東洋の風習に従ひ、其の父が送りたる粗末なる禮物を陳列し、「地に伏してヨセフを拜せし時、ヨセフは殆ど感情を隠すことを得ず、重ねて其の父の安否を問ひしに、「我等の父、汝の僕は恙なくして尙生存へ居るといひて、再び身を屈め禮をなせり」。然るに目を揚げて彼は己の同母弟なるベニヤミンを見て、エジプト人の如くに振舞ふことを忘れ、「我が子よ、願はくは神汝を恵み給はんことを」と云ひし後、其の弟なつかしさの餘りに「心焚くるが如くなりしかば」、急ぎて退かざるを得ざりき。一別以來十二年を経過し、自己が獄中の苦難を始めし時の年齢と殆んど變らざるベニヤミンは、其の眼前に立てり。嘗て嫉妬のために己を棄てし兄弟等は、今また我慾のために其の弟ベニヤミンを棄つべきか。

其の饗宴に於てヤコブの子等に更に驚くべきこと起りたり。素よりエジプトの風習に従ひてヨセフはヨセフ、エジプト人はエジプト人と各自別々に食せり。ヨセフは最高位の一員として、エジプト人は宗教的躊躇によりて斯くなせり。普通の歴史に因りて吾人はエジプト人が或種類の肉を斷ち、又庖丁と肉刺と他國人が用ひたる器を用ひざるを知れり。然るに饗宴の席に於て兄弟等は、其の年齢の順に従ひて置かれしは毫も理解し得ざる所なりき。如何にして彼のエジプト人が之を知ること



を得たるや、今の境遇は眞に怪むべきことなり。更に不可思議に思ひしことあり、其の父の家に於ては彼等の中の末の弟、即ちラケルの子が、常に彼等に優れる者とせられしが、今エジプトの官邸に於ても又然れり。このエジプトの宰相なる者、『自己の前より皿を彼等に供ふ』るに、『ベニヤミンの皿は他の人のよりも五倍多かりき』。古代の習慣に従へば、斯く爲せしは其の優遇の如何計り厚きを示すものなり。

\* スバルタ人に於ては二倍、クレテ人に於ては四倍を君と宰相の前に供へる習慣ありしが、エジプトに於ては五倍とせり。

饗宴は愉快に終りて、其の翌日十一人は歡悦と感謝を以てカナンに歸らんとて出發せしかども、ヨセフの家宰は特に主人の命令に従ひて、以前の如く各自の袋に『金』を又ベニヤミンの袋の中にヨセフの杯、即ち『銀の杯』を置れたり。兄弟等が遠く進まざる内に、ヨセフの家宰は後を追跡し、『わが主が用ひて飲み又用ひて常にトひし』杯あり、汝等恩を知らずして之を盗みしと詰りたり。無論此の言に因りてヨセフが此の『杯』を用ひてトへることを證するにあらず、却て已に盗まれし杯を以て能くその盗まれしことをトふこと能はざれば、其の然らざるは明白なり(創四・一五)。然れども凡てのエジプトの大智者等の家に普通にありし如く、ヨセフの家にも亦トに用ゆる銀の杯ありしこと疑ひなし。此の如き杯に入れたる水に未だ知られざる事件が反映し顯るゝものと信ぜられ、時としては光線の光輝を増さんとて寶石或は金(法術の咒文等を彫りたるもあり)を杯に入れて斯

く爲すことありしが、是は今もエジプトに於て行はるゝ所なり。

斯く欺瞞と竊盜の罪を歸せられて兄弟等は甚く驚きしが、自ら盗まざりしことを知れるを以て、若し一行の中に杯の發見せらるゝことあらば其の者は生命を失ひ、又他の十人は其の自由を捧ぐべしと云へり。然るにこは家宰が命ぜられし所に適はず。其の命ぜられしはベニヤミンを他のものより離すことなりき。故に彼は寛容の風をして罪人のみを奴隸として取らんと云へり。かくて穿鑿せしにベニヤミンの囊中に其の杯を發見せり。今や彼等が心中第一の大苦悶は續いて起り來れり。彼等は各自妻子の許に歸ることを得、獨りベニヤミンのみ奴隸たらんとす。蓋は杯の彼の囊中より發見せられたるが故なり。兄弟等は之に關せず、罪なしと知るの外、止まりてベニヤミンを助くべき理由あらんや。家に在つては兄弟中最も愛せられ、父はベニヤミンをして危険に遇はざらしめん爲には、他の者及び其の妻子に至るまで殆んど餓死せしむるも善しとしたり。又エジプトに於ては、最も若き彼は異腹の子なれども著しく重要視せられたり。嘗て最も愛せられし者を除きし彼等は、今攝理に因りて又愛せらるゝ一人を彼等の中より除かれんとするに當り、如何で猶豫すべけんや。尙ベニヤミンと利害を共にする必要あらんや。今日まで何處に於ても彼等を凌ぎしものをこれ以上許し難きにあらずや。悲運と零落の中に彼等を陥し、と思はるゝ此の者の爲に全家族を亡し、子供等を失ふべけんや云々と論ずることを得たれども、彼等は然ることを爲さず、尙其の他に更に論せしこ



となし。蓋は義務の問題につきて議論するは甚だ危険なり、絶対に即時に義に従ふことのみ安全なればなり。『斯有しかば彼等その衣を裂き、おの／＼其の驢馬に荷を負せて邑に歸りたり』。

第一の試は已に過ぎたりしが、第二にして最後の試は將に來らんとす。彼等はヨセフの『前に地に伏し』、黙して悲めり。ユダは其の代人として語り、其の辯護に因りて大なる後裔なるキリストの伸保を善く代表せり。彼は毫も辯解せず、『神僕等の罪を摘發し給へり』との外何の思考もなかりき。茲に訴へられし此の事件については冤罪なりと雖も、隠れたる罪を罰し給ふ神の前には罪ありしなり。然ればこの悲みの原因はベニヤミンにあらずして彼等なれば、争でかベニヤミンを不當なる奴隸たらしめて棄つことを得んや。然れども前に家宰がなせし如く、今ヨセフも亦之を拒絶し、ベニヤミンの外は皆免すことゝしたり。之に對して辯疏したるユダの言語は優しくして力あり、然も熱心なりしかば、聞く者哀れを催さざるなかりき。彼は簡單に物語れり。先づエジプトの大宰相が彼等に父又は弟あるやを問ひければ、家に父あり又其の愛せし妻の擧げたる老後の子にして最愛なる子の生き別れたる者あるを答へたり。而して宰相はこの子を連れ來ることを命じたれど、父は其の子に別れば死なんと云ひしかども、饑饉に迫りて父に之を遣らんことを願はざるを得ざりき。この際に當りて老父が彼等の已によく知りたること、即ち今も唯一人の妻なりと思へる者が二人の子を擧げしが、今ベニヤミンを取られんとするが如く、他の一人は已に出でて後之を見ず、『必ず裂き殺

されしならん』と云ひしことを思出ださしめたり。今また彼等が此の者を連れ往きて、若し災害彼の身に及ぶことあらば遂に此の『白髪をして悲みて墓に下らしむるに至らん』と云ひしが、其の老人の恐れしことは遂に來りたり。然るにユダ自らは其の老父の悲哀と死を見るに耐へ得べけんや。自己の保證に因りて老父は彼の往くを承諾せしめしが故に、己に罪なしと云ふべけんや。否、ベニヤミンに對する保證人なり。彼は今赦罪も恩恵も願はず、唯若者を其の兄弟等と共に返し、彼に代りて自己を奴隸とせんことを願へり。『災害の父に及ぶを見る』に忍びざれば、自ら進み求めて奴隸たらんことを願へるなり。

ルーテル曰く、『ユダが此處にベニヤミンのために懇願せし如く、我は神に祈るべき力を得ん爲に何を惜むべけんや。これ祈禱、否凡ての祈禱の基たるべき強き感情の完全なる模範なればなり』と。又神は頗美べき哉。主は吾人の爲に懇求し、吾人の保證として自らを棄て給ひ、吾人のために奴隸となり給へり(詩四〇・六、七。腓二・六—八)。彼の懇求は聽容れられ、彼の代人たることは受入れられ、吾人の爲にする彼の執成の祈は常に續きて、又常に力あるものなり。主イエス・キリストは『ユダの族の獅子、ダビデの萌蘗』にして、又『すでに勝を得て、卷物とその七つの封印とを開き得るなり』。

終局の試は已に終へたり。ヨセフ『自ら禁ぶ能はざるに至りければ』、最早其の試を繼續するこ



とを得ず。他人を皆離れしめ愛情と思遣りを以て、己がエジプトに賣られたるヨセフなることを兄弟等に名乗りたり。然れど實は神が彼等の生命を救はしめ、又其の子孫を生存せしめんがため、又之に基き世に對する恩恵の聖旨を成就せんがために彼を前に遣し給ひたるなり。然れば神が一切を統治め給ひしが故に、彼等は憂ふるに足らず。然るに彼は三度之を語り、慇懃なる語を以て彼等の罪を赦したることを反復せざるうちは、兄弟等は之を信ぜず、又慰を得ざりき。今やヨセフの目的は、七年の饑饉の中僅か二年を過ぎしのみなるが故に、其の父と全家族を養はんが爲に之を己の許に來らしめざるべからず。又この目的を達する爲に不思議に神の助を蒙りたり。パロは此の事件とヨセフの寛容とを聞きしかば、大に喜びてヨセフの希望せし如くせんとして、彼等の子女と妻等を迎へるため彼等を載する「車」、及び途中の饑饉を多く與へたり。ヨセフは又其の父に最良の禮物を贈れり。十一人は迎車に先ちて父の所に歸り、之を詳報せしかど「ヤコブの心なほ寒冷なりき、蓋は之を信ぜざればなり」。目のあたりにエジプトの「車」を見るに及びて「反作用を起し、『其の氣己に歸れり』。過去の愁歎と罪惡とは彼の記憶より全く消失せたる如く見えたり。以前の如く彼は再びヤコブとして語るにあらず、「イスラエル」(神人と偕なる君)となりて曰く、「足れり、我が子ヨセフなほ生き居る。我死なざる前に往きて之を視ん」と。

第二十二章 ヤコブ家族と共にエジプトに向つて出發するこ

こ—ヤコブ、パロに會ふここ—ヤコブ臨終にカナ  
ンに葬られんここを命ずるここ—エフライムこ  
マナセをイスラエルの子等の中に數ふるここ

(創四六章—四八章)

今や父祖ヤコブは大に惑ひたり。蓋は家族と共にエジプトに移ることにつき未だ神より直接なる啓示なしと雖も、神がヨセフを待遇ひ給ひしこと、パロに招かるること及びカナンにある饑饉とは、神がアブラムに示し給ひし如く(創一五・一三)、其の子孫がカナンを離れ、他國に於て旅人また奴隸となるべき時を現す如く思はれたり。彼はイスラエルが再び歸り來つて約束の地を永久に領有するまでには二の事件が起らざる可らざることを知り。その一は「アモリ人の惡」の「貫盈」の可らざる事、その二はイスラエルの家族が國民となるまで發達せざる可らざる事なり。後者は未だ成らず、前者に就てはヤコブが尙長くカナンに居るは、却て之を妨ぐるものにして何等の益なきことを容易に認め得べし。當時カナンには諸の獨立せる種族ありしが、ヤコブの子等の増すに従ひて之と提携



するか、或は戦はざるべからず。又カナン人と同居し、交際せしならば其の信仰に大危険ありしならんが、エジプトに居らば全く然らず。其のエジプトに往きしは公然寄寓者として、又暫時の目的なりしなり。彼等は牧者にして『エジプト人の穢はしとする』者なれば、政治的、宗教的、又社会的にエジプト人と區別せられ、又離れたる地方に居ることゝなれり。然れども『彼等が置かれたりしゴセンの地』は、其の家畜の増加する爲には最も善き所なりき。右は其の時にエジプトに移るべき外部的理由なりしが、事件のより高き靈的の方面は已に述べたり。

ヤコブが慰安を得んために希望せし保證は、彼が約東の地の南の界なるベエルシバに着せし時に與へられたり。其處にて彼は『其の父イサクの神に犠牲を献ぐ』、而して信實なる主は『夜の異象にイストラエルに語り』給ひて、左の四の點につき保證し給へり。第一、我は契約の神なれば、ヤコブはエジプトに下ることを懼るゝに及ばざること、第二、我は彼處にて汝を大なる國民となさん、語を換へて言へば、家族より國民に變ずるはエジプトに於て起るべきこと。第三、我は汝と共にエジプトに下るべきこと。第四、我は必ず汝を導き上るべきこと是なり。右のことを確證せん爲に、此等の恩が神より直接に出づるものなるを示さんとて、我てふ代名詞を重ねて用ひ給へり。此に於てヤコブ意を強うし、勇んで其の旅行を續けたり。

聖書に於て數次ある如く、此處にも甚だ肝要なる教訓を含めりと雖も、研究せざれば認め難き所な

り。聖書は一個人の歴史を記せるものにあらず、神の國の歴史を載するものなるは繰返し述べし所なるが、此處に記せる『イストラエルの子のエジプトに下れるものゝ名』の目錄に於て最も明かに現る。右はヤコブがエジプトに往きし時、ヤコブに伴ひし者等の目錄とすべからざるは明白なり。例へば第一、其の中に記せるヨセフの如き又其の子等なるエフライムとマナセ、若くは彼等の子等は已にエジプトに居りしが故なり。而して其の中に記せるヤコブの孫と曾孫の中、エジプトに着せし後生れたる者あり。又其の中に記さざるものありとせざるを得ず、蓋は子孫の名を記さざる所の家族は絶えたりとするを得ざればなり。然るに單に神の國に屬する所のみを記せりとの主意に従ひ解釋せば、其の理由は知り難からず。然れば右の目錄は、特別の目的に従ひて記せる傳記的目錄にあらずして、系圖的の表なりとす。其の目的は先づイストラエルの各の支派の始祖、次に彼等の子孫にして各の支派の中に起りし『宗族』の先祖を掲ぐるにあり。是故に此の表に記せる所は唯ヤコブと共にエジプトに往きし者、及び『家々の長』となりし者是なり。此はイストラエルの『宗族』を別々に記せる民數紀略二十六章と比ぶれば明白なり。其處に記せる宗族の先祖等の中、前の表に記さざる者は一人もなし。然れども前の表に記す者の中に、第二の目錄に記さざる者あり。此はシメオンの子一人、アセルの子一人、又ベニヤミンの子三人にして、或は死滅せしに因り、或は罰として他の所に移されしに因りて記さざりしならん。又後に宗族の長となりし者を前の表に時代を繰越して記せるも怪しむ